ドイツ　アカデミック街道を歩く
２０２０年１１月１６日発表

絵解き　地図と写真による大学入門

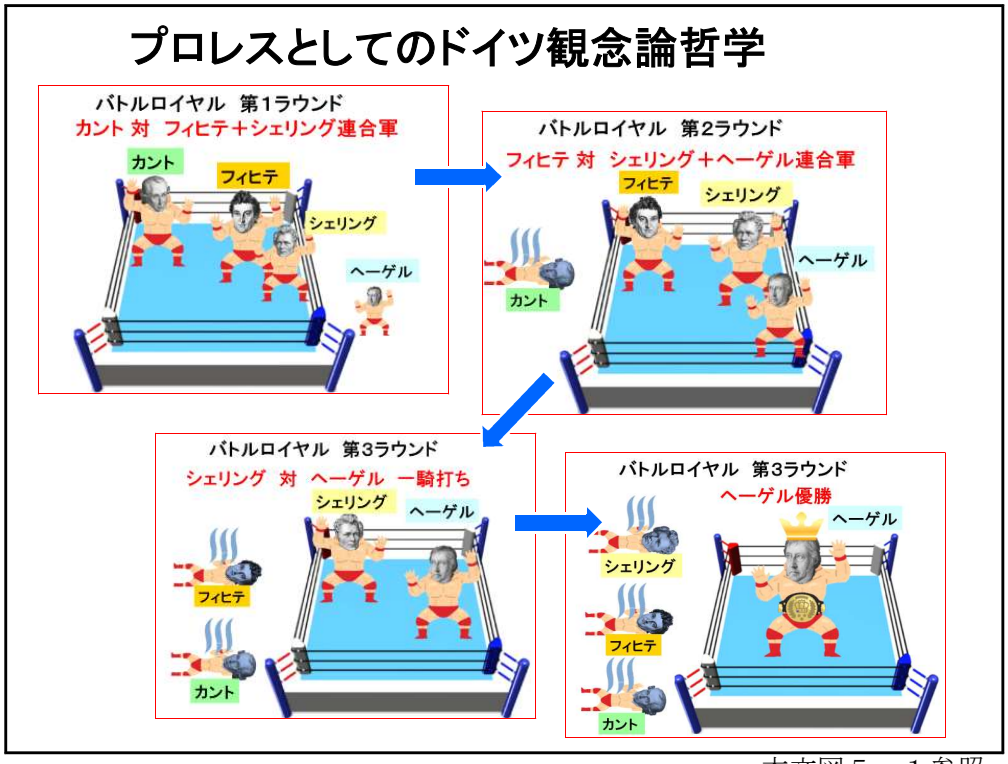
プロレスとしてのドイツ観念論哲学
ー哲学史上最も面白い人間ドラマの心理学ー
ベルリン大学の栄光　第５部
ドイツ　アカデミック街道を歩く　丹野義彦（東京大学名誉教授）

大学散歩の面白さを伝えるために、私はアカデミックツアーとして、ロンドン編、アメリカ編、イギリス編、イタリア編の４部作を刊行してきた（星和書店および有斐閣）。これからドイツ編をお届けしたい。私はこれを「ドイツ・アカデミック街道」と名前をつけた。ハイデルベルクとライプツィヒ、ミュンヘンの次は、ベルリンをとりあげる。ベルリンほど奥が深く面白い都市はない。

まず、ベルリン大学の歴史について５部に分けて述べる。本稿はその第５部にあたる。

◆ベルリン大学の栄光
第１部　創立の謎　フンボルト理念のウソとシュライアマハー
第２部　フィヒテ　初代公選学長
第３部　シェリング　ドイツ観念論哲学の要
第４部　ブラック・ヘーゲル入門　隠蔽された哲学者の恋
第５部　プロレスとしてのドイツ観念論哲学 ー哲学史上最も面白い人間ドラマの心理学ー

これまで、第２部でフィヒテ、第３部でシェリング、第４部でヘーゲルを取りあげ、それぞれの人生と哲学理論を描いてきた。３人の人間関係は、哲学史で最も面白い人間ドラマである。３人は、カントを含めてそれぞれ師弟関係を結んだが、決してきれいごとではなく、打算と裏切りの関係となった。それが３代続いた。しかも、師と戦うために弟子とタッグを組み師をやっつけるが、その弟子に同じ仕打ちを受けた。まさにプロレスのバトルロイヤルである。第５部では、３人を群像として捉え、感情むき出しのバトルを心理学的に描きだしてみたい。



本文図５－１参照

第５部　プロレスとしてのドイツ観念論哲学
－哲学史上最も面白い人間ドラマの心理学－

＜目次＞

はじめに　結論と３つの視点

第１章　テュービンゲン大学時代　（1788～1795年）
１－１．３人の年表
１－２．テュービンゲン大学時代（1788～1795年）の歴史的・政治的背景
１－３．テュービンゲン大学時代の３人の行動（編年体）
１－４．徹底比較　テュービンゲン大学時代の３人

第２章　イェナ大学時代　（1794～1807年）
２－１．３人の年表
２－２．イェナ大学時代（1794～1807年）の歴史的・政治的背景
２－３．イェナ大学時代の３人の行動（編年体）
　カントとフィヒテの師弟関係（まとめ）
　フィヒテとシェリングの師弟関係（まとめ）
　シェリングとヘーゲルの師弟関係（まとめ）
２－４．徹底比較　イェナ大学時代の３人

第３章　裏切りと打算の師弟関係

第４章　３代続く悪の連鎖と因果応報

第５章　プロレスとしてのドイツ観念論哲学

第６章　ベルリン大学時代　（1810～1846年）
６－１．３人の年表
６－２．ベルリン大学時代（1810～1846年）の歴史的・政治的背景
６－３．ベルリン大学時代の３人の行動（編年体）
６－４．徹底比較　ベルリン大学の３人

第７章　テュービンゲン・イェナ・ベルリン時代の比較　生涯変わらなかった特性は何か

結び　大学がドイツ観念論哲学を育てた

はじめに　結論と３つの視点

０－１．哲学史上最も面白い人間ドラマの本質は何か

ドイツ観念論哲学のビッグ３であるフィヒテ（第２部）、シェリング（第３部）、ヘーゲル（第４部）について、それぞれの人生と哲学理論を描いてきた。これらを仕上げても、私の中には強い不全感が残った。３人の人間関係は、哲学史で最も面白い人間ドラマである。なのに、その面白さの本質が全く描けていない。この人間ドラマを描き切ってみたい。このために本稿第５部に取りかかり、この人間ドラマの本質は何なのか、ずいぶん長い時間をかけて考えた。

先に本稿の結論で辿りついた結論を述べておこう。

①打算と裏切りの師弟関係（第３章）

イェナ大学でのフィヒテ・シェリング・ヘーゲルの関係は、哲学の教科書にも取りあげられることがあり、よく知られている。３人は、互いに師弟関係を結んだが、それは決して師弟愛のようなタテマエのきれい事ではなかった。よく調べると、３人は、はじめ打算から師に取り入り、師も打算から弟子に便宜供与をおこない、相互の打算の中で師弟関係を結んだ。しかし、後に、弟子が師を裏切り、師は怒りで弟子を破門し絶交した。一言でいうと、「打算と裏切りの師弟関係」である。感情のるつぼのようなドロドロした人間ドラマであった。

②３代続く悪の連鎖と因果応報（第４章）

しかも、面白いことに、３組の師弟は、全く同じ「打算と裏切りの師弟関係」パタンを繰り返した。彼らは全く学習しない。経験に学ばずに、同じ泥沼のパタンが連鎖した。師を裏切った弟子が、みずからの弟子に裏切られるといった因果応報のパタンが３代繰り返された。悪の連鎖である。

③プロレスのバトルロイヤル的乱闘（第５章）

さらに面白いことに、弟子は、師と戦うために、自分の弟子をイェナ大学に呼びタッグを組んだ。フィヒテは、シェリングと組んで、カントと戦った。その数年後、シェリングは、ヘーゲルと組んで、フィヒテと戦って蹴落とした。その数年後、ヘーゲルがシェリングと戦ってシェリングを蹴落とした。昨日の味方が今日は敵となるというのは、まさにプロレスのバトルロイヤルである。ドイツ観念論哲学は、バトルロイヤルのような乱闘から生まれたのである。しかも、ベルリン大学時代には、「死者の身体を蹴る」のような反則技まで飛び出した。

このような３人の大学での人間関係がドイツ観念論哲学を生んだ。

０－２．本稿の３つの視点・方法論

哲学史で最も面白い人間ドラマを描き切るために、本稿では、表０－１のような３つの視点・方法論を考えてみた。それはこれまで第２～４部での視点とは異なるものである。

表０－１　視点・方法論　　第２～４部と第５部本稿の違い

	第２～４部	第５部　本稿
視点１ 個人か関係か	３人の哲学者の**個人**に関心 ケーススタディ	３人の哲学者の**人間関係**に関心 リレーションスタディ
視点２ 哲学か心理学か	哲学 哲学者の**学説**への関心 タテマエ（学問上の理論の側面）	心理学 哲学者の**心理や感情**への関心 ホンネ（人間としての感情の側面）
視点３ 哲学史か大学論か	**哲学史** 「哲学者が大学で仕事することは当然」 ドイツ観念論を哲学史から見る	**大学論・大学史** ①大学という文化装置への関心 ②大学という場に生きる大学教員への関心 ③大学での「哲学」というシステムへく関心 ドイツ観念論哲学を「大学論」から見る

視点１　３人の哲学者の人間関係に関心

これまでの第２～４部では、３人の哲学者の個人に関心を向けた。フィヒテ（第２部）、シェリング（第３部）、ヘーゲル（第４部）について、人生と哲学理論をまとめた。その面白さは第２～４部を参照いただきたい。これまでフィヒテ論、シェリング論、ヘーゲル論はたくさん書かれたが、それらも哲学者個人に焦点を当てている。ハルトマンの名著『ドイツ観念論の哲学』もこうした視点をとっている。

これに対して、第５部の本稿では、３人の哲学者の人間関係に関心を向ける。３人を群像として描き、３人の濃密な人間関係を扱う。これまで、こうした人間関係に焦点をあてた論は少なく、不十分である。

第２～４部が、それぞれの哲学者のケーススタディ（個別事例研究）であるとすれば、第５部本稿は、３人間の哲学者のリレーションスタディ（関係研究）ないしグループスタディ（集団研究）である。

３人は哲学史上最高レベルの天才であり、傑出人の異常性や心理を扱うパトグラフィ（病跡学）の発想と近いものがある。私なりの『天才の心理学』（クレッチュマー）をめざした面もある。ただ、パトグラフィが個人としての傑出人を扱うケーススタディであるのに対し、本稿は３人の関係を扱うリレーションスタディである点が異なる。

このような視点を取ることで、今まで見えてこなかったことが浮かび上がった。３人が３組の師弟関係を結び、全く同じパタンを繰り返したこと、それがバトルロイヤルの乱闘となったことなどは、人間関係に焦

点を当てることで明確になった。また、例えば、フィヒテとヘーゲルを結びつけたキーパーソンとしてシェリングの存在の重要性が理解できる。シェリングがいなかったらドイツ観念論哲学はなかったかもしれない。

視点２　哲学者の心理や感情への心理学的関心

これまでの第２～４部では、哲学の視点から、哲学者の学説に関心を向けた。

これに対して、第５部の本稿では、心理学の視点から、哲学者の**心理や感情**への関心を向ける。

私は心理学者なので、哲学者という人間のあり方や感情や動機に関心がある。３組の師弟関係は、ふつうの学者の心理として理解できる部分も含まれ、いつの時代でも世界中の学者の身にも起こりうる可能性がある。一般的には、そうした感情は出さないように抑制されるものだが、この３人はむき出しにした。

また、これまでの第２～４部では、**タテマエ**を中心として描いた。「タテマエ」とは、学問上の理論の側面である。哲学の教科書では、ドイツ観念論哲学の師弟関係は次のように説明される。弟子は、師を学問的に批判することによって、オリジナルな新学説を発展させた。やがて、師と対決して、妥協せず、師から独立した。師との対決は、学問の進歩のための産みの苦しみである。哲学はオリジナリティや純粋性こそ大事であり、議論や批判によって進歩する。ソクラテスやプラトンの時代から、哲学の基本は「対話」であり、オープンな「議論」であり、「批判」である。学問は戦いであって、学問の発展のためには、師弟関係や人間関係などはどうでもよい。むしろ妥協が入ってはいけない。こうした学者の世界のステレオタイプは、当然のことのように語られ、美談として描かれる。

これに対し、第５部の本稿では、**ホンネ**を中心として描く。「ホンネ」とは、人間としての感情の側面である。人間関係の心理学の視点からみると、師弟関係の裏には、打算や嫉妬や憎しみといったホンネの感情がある。３人は哲学の天才であり、その学説を理解することはなかなか難しいが、しかし、哲学のスーパースターといえども、ごく当たり前の感情を持ち、打算と裏切りの人間関係にどっぷり浸かって生きた当たり前の人間である。哲学の基本にある「議論」や「批判」の底には、人間の攻撃性や憎しみの感情がある。

このような視点によって、今まで見えてこなかったことが浮かび上がった。３人の人間関係こそが、ドイツ観念論哲学という哲学史上稀な学問的発展を作り出す原動力となったことがわかる。ドイツ観念論哲学が深まったのは、師への反撥や弟子への憎しみといった感情的なバトルのおかげである。また、例えば、隠蔽されてきたヘーゲルのブラックな側面なども明らかにされた。哲学史においては、尊敬する大哲学者のネガティブな感情などはあえて無視されてきた。

視点３　大学論・大学史としての関心

第２～４部では、哲学史に焦点を当て、学説の発展に関心を向けた。３人が活躍した大学という舞台には関心が向かなかった。哲学者が大学で仕事することは当然のように思われてきた。しかし、それは決して当然ではない。哲学者が「大学」で最新のオリジナルな学説を教えるという制度が固まったのは、実はドイツ観念論哲学以降のことである。それまでの偉大な哲学者、例えばデカルト、スピノザ、ライプニッツ、イギリス経験論の哲学者（ロック、ヒューム、バークリー）は、教会の関係者などであり、大学の教員ではなかったし、大学で教えられる哲学の内容は、最新の内容でもオリジナルなものでもなかった。大学と哲学が本質的に結びついたのはドイツ観念論によってだからである。

そこで、第５部の本稿では、大学論・大学史に関心を向ける。私は大学論に関心を持ち、ロンドン編、アメリカ編、イギリス編、イタリア編の４部作を刊行してきた（星和書店および有斐閣）。そうした大学論の一環として、本稿のベルリン大学論を書き、ベルリン大学の教員だったフィヒテ・シェリング・ヘーゲルを描き、その人間ドラマに気がついた。これも大学論という視点に立ったからである。

本稿でこだわったのは以下のような大学論・大学史の視点である。

①大学という文化装置への関心。すなわち、大学の地理的条件（どの場所にある大学か）、大学の歴史、大学の制度など。

②大学という場に生きる大学教員への関心。すなわち、大学教員の行動と心理、師弟関係、大学の人事選考システム、大学人のパーソナリティ、大学人としての生涯など。

③大学における「哲学」というシステムへの関心。すなわち、大学と哲学、大学の中での哲学者の行動と心理、大学とドイツ観念論哲学など。

このような大学論という視点に立つと、今までの哲学史では見えてこなかったことが浮かび上がった。ドイツ観念論哲学がいかに大学というシステムと結びついていたか、いかに大学がドイツ観念論哲学を育てたかが見えてくる。

私は本稿において、ドイツ観念論哲学を見る見方として、**「大学論」という視点**を提案したい。

大学人として生きた３人

３人の年譜を並べてみたのが表０－２の年表である。この表をみてすぐにわかることは、３人とも、３つの大学に関係しているということである。第１はテュービンゲン大学、第２はイェナ大学、第３はベルリン大学である。３人はまさに大学人として生きたことがわかる。

表０－２　フィヒテ・シェリング・ヘーゲルの生涯

西暦	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
1762	0　誕生		
1770	8		0　誕生
1775	13	0　誕生	5
75～87			
1780	18　イェナ大学入学	5	10
1781	19　ライプツィヒ大学転学	6	11
82～87			
1788	26	13	18 テュービンゲン大学入学
89	27	14	19
90	28	15 テュービンゲン大学入学 ヘーゲルと同室	20 シェリング同室
91	29	16	21
92	30	17	22
93	31　テュービンゲン訪問	18	23 テュービンゲン大学卒業
1794	32　テュービンゲン訪問 イェナ大学助教授	19　フィヒテとの文通始まる	24
95	33	20 テュービンゲン大学卒業	25
96	34	21 ライプツィヒ大学	26
97	35	22	27
98	36	23 イェナ大学助教授	28
99	37　イェナ大学を去る	24	29
1800	38	25	30
01	39	26	31 イェナ大学私講師
02	40	27	32
03	41	28 イェナ大学を去る	33
04	42	29 ヴュルツブルク大学教授	34
05	43　エルランゲン大学教授	30	35 イェナ大学助教授
06	44	31 ミュンヘンで文化行政	36
07	45 ケーニヒスベルク大学教授	32	37 イェナ大学を去る
08	46	33	38 ギムナジウム校長
09	47	34	39
1810	48　ベルリン大学教授	35	40
11	49　ベルリン大学学長	36	41
12	50　学長を辞任	37	42
13	51	38	43
14	52　死亡	39	44
15		40	45
16		41	46 ハイデルベルク大学教授
17		42	47
18		43	48　ベルリン大学教授
19		44	
20		45　エルランゲン大学教授	
21～26			
27～28		52　ミュンヘン大学教授	
29		54	59　ベルリン大学学長
30		55	60
31		56	61　死亡
32～40			
41		66　ベルリン大学教授	
42～45		67～70	
46		71　ベルリン大学を辞す	
47～53			
1854		79　死亡	

３人の項目の数字は年齢

第１期　テュービンゲン大学時代　　**第２期　イェナ大学時代**　　**第３期　ベルリン大学時代**

①テュービンゲン大学時代

テュービンゲン大学には、1788年にヘーゲルが入学して、1790年にはシェリングが入学し、ふたりは寄宿舎で同室になり、友情を深めた。ふたりとも５年後には卒業する。1793年と94年にフィヒテはテュービンゲン大学を訪問し、この時にシェリングと出会って、文通を始めた。

②イェナ大学時代

イェナ大学については、1794年にフィヒテがイェナ大学の助教授となり、1798年にはシェリングが助教授となり、1801年にはヘーゲルが私講師となった。３人とも数年ほど在任した後、イェナ大学を去った。

③ベルリン大学時代

1810年にフィヒテがベルリン大学教授となり、1814年に急死した。フィヒテのポストの後任は、４年間の空白をへて、1818年にヘーゲルが後を継いだ。1831年にヘーゲルが急死すると、ヘーゲルのポストの後任は。1841年にシェリングが後を継いだ。

重なったのは偶然ではない　その必然性にドラマがあった

ドイツ観念論哲学のビッグ３が、いずれもテュービンゲン・イェナ・ベルリンという３大学とかかわったのは面白い。３人の人生は、３つの大学で交錯した。

ビッグ３が同じ時期に同じ大学にそろったということは、奇跡のように思える。しかし、奇跡といっても、決して偶然という意味ではない。そこには必然が働いている。

たしかにテュービンゲン大学でシェリングとヘーゲルが出会ったのは全くの偶然である。

しかし、イェナ大学での重なりは、彼らの意図によるものである。つまり、フィヒテがシェリングを呼び、シェリングがヘーゲルを呼んだたために、イェナ大学に３人がそろったのである。この意図的なつながりに人間ドラマが潜んでいるのである。

また、ベルリン大学でのつながりは、プロイセン政府の意図によるものである。フィヒテの死後のポストにヘーゲルが呼ばれ、ヘーゲルの死後のポストにシェリングが呼ばれたという哲学史的な必然性があった。このつながりに歴史的ドラマが潜んでいるのである。

３人の生涯がいかに大学と深く関わっていたかが見えてくる。

本稿の構造

以下では、３つの大学時代を取りあげて、各時代ごとの３人の関係に焦点を当ててみていく。

テュービンゲン大学時代は「前史」、イェナ時代時代は「本論」、ベルリン大学時代は「後日談」といった感じである。

第１章　テュービンゲン大学時代　（1788～1795年）

＜目次＞

１－１．３人の年表
１－２．テュービンゲン大学時代（1788～1795年）の歴史的・政治的背景
１－３．テュービンゲン大学時代の３人の行動（編年体）
１－４．徹底比較　テュービンゲン大学時代の３人

１－１．３人の年表

テュービンゲン大学時代は、ヘーゲルがテュービンゲン大学に入った1788年から、シェリングが卒業した1795年までの７年間である。

下の表は、３人の足取りを年表にしたものである。色を塗ったところがテュービンゲンにいた時期である。

表１－１　テュービンゲン大学時代のフィヒテ・シェリング・ヘーゲルの年表

西暦	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
1788	26	13	18 テュービンゲン大学入学
89	27	14	19
90	28	15 テュービンゲン大学入学 ヘーゲル・ヘルダリンと同室	20 シェリング・ヘルダリンと同室
91	29	16	21
92	30	17	22
93	31 テュービンゲン大学訪問	18	23 テュービンゲン大学卒業
94	32 テュービンゲン大学訪問 シェリングとの文通始まる	19　フィヒテの講演を聴く フィヒテとの文通始まる	24
95	33	20 テュービンゲン大学卒業	25
96	34	21	26

３人の項目の数字は年齢

師弟の絆の形成期

1790年にはシェリングが入学し、ふたりは寄宿舎で同室になり、友情を深めた。シェリングとヘーゲルが出会ったのは全くの偶然である。ふたりとも５年後には卒業する。1793年と94年にフィヒテがテュービンゲン大学を訪問し、この時にシェリングと出会って、文通を始めた。

この時期は、シェリングとヘーゲルの師弟関係の形成期であり、その後に繰り広げれるバトルを思わせるようなことは起こらない。

１－２．テュービンゲン大学時代（1788～1795年）の歴史的・政治的背景

その前に、この1788～1795年という時代の歴史的・政治的背景について、簡単におさえておこう。

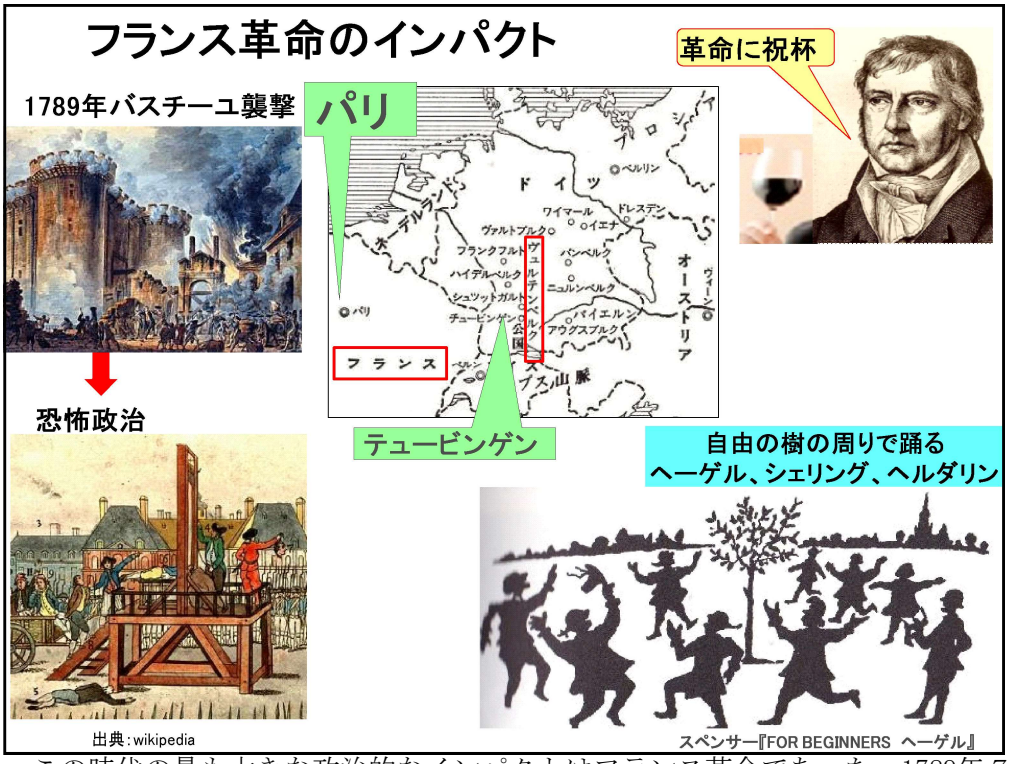
プロイセン王国とハプスブルク家の覇権争い　近代化の遅れ

18世紀のドイツは、多くの国に分かれて争っており、近代化が遅れた。これはイギリスやフランスが絶対主義を強めて発展したのとは対照的である。ドイツの18世紀は、オーストリアのハプスブルク家とプロイセン王国の覇権争いの時代である。

啓蒙絶対君主の時代

18世紀後半には、ハプスブルク家とプロイセン王国は啓蒙絶対君主の時代（1763～89年）に入った。啓蒙絶対君主とは、啓蒙思想をかかげて「上からの近代化」を図った君主である。これにより、オーストリア継承戦争や七年戦争（1756～73年）などの覇権争いの戦争がおこった。

フランス革命のインパクト



この時代の最も大きな政治的なインパクトはフランス革命であった。1789年７月14日バスチーユ監獄への襲撃から始まったフランス革命により、フランス王は処刑された。これに対抗して、周囲の国々は対仏大同盟（1793～97年）を結んで、フランスと戦い、革命をつぶそうとした。

フランス革命は、当時の若者を熱狂させた。

地図に示すように、テュービンゲン大学のあるヴュルテンベルク公国は、ライン河をはさんでフランスと接していた。テュービンゲン大学の学生はフランス革命への関心を強め、神学校には政治クラブができた。

ある日、学生たちはテュービンゲン郊外の野原に出かけ、「自由の樹」を植えた（右下の絵）。そして、樹の周りを踊って歌いながら、フランスにならって革命を祝った。この学生たちの中に、ヘーゲル、シェリング、ヘルダリンの３人がいたのである。３人はフランス革命に熱狂した。ヘーゲルとシェリングの哲学に対しても、フランス革命は大きな影響を与えている。

ナポレオンの独裁へ

しかし、フランス革命は、その後、ジャコバン党の独裁政治に移行し、ロベスピエールらによる恐怖政治が始まった。1794年のテルミドールの反動によりロベスピエールは処刑されたが、こうした混乱の中から、ナポレオンの独裁があらわれ、ナポレオン軍はヨーロッパを侵略し、ドイツの大学も被害を受けることになる。

テュービンゲンの町

テュービンゲンは、ドイツの南部にあり、バーデン＝ヴュルテンベルク州に属している。

地図にあるように、観光地としては、ファンタスティック街道の真ん中に位置している。ファンタスティック街道は、ハイデルベルク、シュトゥットガルト、テュービンゲンと続き、ホーエンツォレルン城をへて、コンスタンツに至る観光ルートである。

テュービンゲンは、1477年に設立されたテュービンゲン大学によって発展した町であり、今でも住民の４割は大学関係者だという。旧市街を歩くと、中世の町並みが残っており、緑が多く、落ちついた静かな雰囲気である。

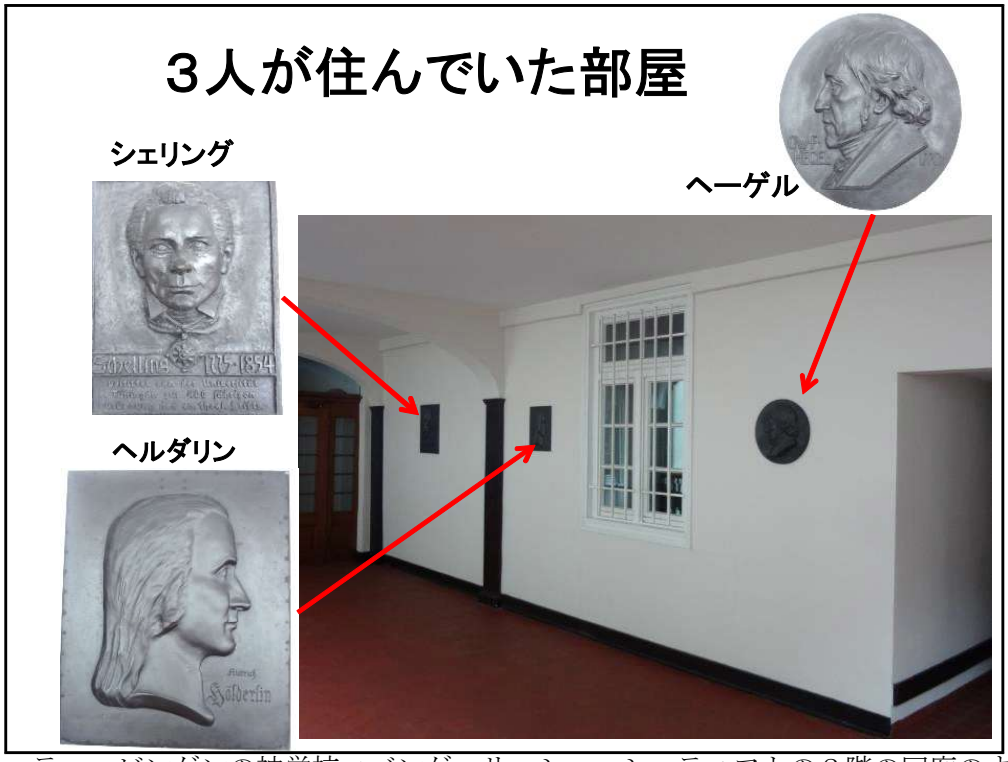
ヘーゲルとシェリングの寄宿舎となった神学校は今も残っている。左上の写真に示すように、テュービンゲンの街の真ん中をネッカー川が流れる。道を少し登ると、この神学校エバンゲーリッシェ・シュティフトEvangelisches Stift Tübingenがある。右下の写真がこの学校のマークである。

中世の時代に、ここにアウグスティン派の修道院が建てられた。宗教改革の後、1536年に、ヴュルテンベルク公国のウルリヒ公が、プロテスタントの神学校として作り変えた。1589年には天文学者となるケプラーがこの学校に入学した。

左下の写真のイラストのように、この建物は、いくつかの棟からなっている。入口を入ると石畳の中庭がある（右上の写真）。その周りが回廊になっている。中を自由に見学できる（入場無料）。回廊は２階に登

れる。２階にシェリングとヘーゲルとヘルダリンがいっしょに住んだ部屋がある。

３人が住んでいた部屋



テュービンゲンの神学校エバンゲーリッシェ・シュティフトの２階の回廊のすみに、シェリングとヘーゲルとヘルダリンがいっしょに住んだ部屋がある。

この部屋の前には、シェリング、ヘーゲル、ヘルダーリンの３人のレリーフがある。

この建物は、全体が博物館のようになっていて、いろいろな展示がある。３人の部屋の反対側には、出身者のケプラーやモリケのレリーフがある。その奥の部屋にも展示がある。

１－３．テュービンゲン大学時代の３人の行動（編年体）

以下、上の１－１の年表にしたがって、３人の行動を編年体で見ていこう。

1788年　ヘーゲルがテュービンゲン大学入学

ゲオルグ・フリードリヒ・ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel）は、シュトゥットガルトに生まれた。父はヴュルテンベルク公国の財務官であり、プロテスタントの真面目な家庭であった。母マリアは、ヘーゲルにラテン語を教えるほど教養ある婦人であったが、ヘーゲルが13歳の時に病死した。

1777年（７歳）、地元のギムナジウム（大学進学学校）に入学し、ギリシャ語とラテン語を徹底的にたたきこまれた。ギムナジウムとは、ドイツにおける大学進学のための中等教育の学校であり、イギリスではグラマースクールや、フランスではリセに当たる。ギリシャ語とラテン語という古典語の学習を中心としている。ヘーゲルは18歳でギムナジウムを卒業した。つまり、７歳から18歳までの11年間をこのギムナジウムですごしたことになる。

ギムナジウムでは、教師のレフラーを敬愛したが、ヘーゲルが14歳の時に、亡くなってしまった。

1788年（18歳）、ギムナジウムを卒業したヘーゲルは、テュービンゲン大学の神学校に進んだ。父の希望にしたがって、牧師になるつもりであった。

1788年　ヘーゲルが大学の前期課程へ

官費奨学生であり、国からすべての学資が出ていて、黒いマントと白いカラーの制服を着て、教師から厳しい監視を受けながら生活した。

大学では、最初の２年は哲学を中心とする一般教育を学び、後半の３年は神学を学んだ。最初の２年の哲学では、ベェク、アーベル、シュヌーラーといった教官の講義を受けた。シュヌーラーから旧約・新約聖書の講義を受けた。そして、マギステルの学位（教師になるための学位）を得た。

1789年　フランス革命がおこる

1789年７月14日バスチーユ監獄への襲撃からフランス革命が始まった。ヘーゲルとシェリングとヘルダーリンの３人を結びつけたのは、フランス革命への関心であった。

1790年　ヘーゲルが大学の後期課程へ

1790年（20歳）、ヘーゲルは後期の神学部に進んだ。教官は、フラット、ル・プレ、シュトールといった教授であった。ヘーゲルはこのうちシュトールから大きな影響を受けた（澤田,1970）。当時のテュービンゲン大学神学部は、ルター派の正統的な教義を守り、テュービンゲン学派と呼ばれていた。しかし、学生たちは、当時の最先端であるフランス革命とカント哲学の啓蒙主義への関心が強かった。このため、学生には神学部の教授たちは古ぼけた保守的な権威としか映らなかった。ヘーゲルも同じであり、伝統的なキリスト教には批判的であったが、教授シュトールの講義をすべて受けて、キリスト教の基本的な知識を身につけた。

ヘーゲルは、話し下手でまじめだったので、「老人」というあだ名がつけられた。ヘーゲルの成績表には、「無気力」という評価もあったというから、活発な学生ではなかったようである。ヘーゲルは、大学生あこがれのマドンナに恋をした。亡くなった神学教授の娘で、学生たちのあこがれだアウグステという女性に恋をした。友人のサイン帳に、ヘーゲルはこう書いた。「去年のモットーは酒、今年のモットーは恋！　1791年10月7日、アウグステ万歳！」

テュービンゲン時代のヘーゲルの研究は、キリスト教の歴史である。「民族宗教とキリスト教」という論文を書いた。彼はキリスト教に対して否定的であった。というのは、彼にとって理想的な宗教はギリシャ宗教であった。ギリシャ宗教は、国民全部が共通して持つ生活に密着した宗教であり、これを彼は「民族宗教」と呼んで、高く評価した。こうしたギリシャ崇拝にはヘルダリンの影響が見て取れる。これに対して、キリスト教は、当時は　専制政治によって上から押しつけられた宗教であり、望ましいものではない。ここにはフランス革命の影響がみられる。

1790年　シェリングが大学に入学

フリードリヒ・ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・シェリング（Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling）は、1775年、ヴュルテンベルク公国のレオンベルクで生まれた。シェリングの父は聖職者で、その２代前より牧師の家系であった。また、母も牧師の娘であった。

シェリングの父は、1877年に、テュービンゲン近くのベーベンハウゼン修道院の上級課程(いわゆる高等学校に当たる)のオリエント学（ヘブライ語など）の教授をつとめた。

シェリングは、９歳で、シュトゥットガルト近くのニュルティンゲンにあるラテン語学校に入学した。この学校には、５歳年上のヘルダーリン（Johann Hölderlin; 1770～1843年）も在学していた。11歳で卒業するまでに、将来チュービングン大学で神学を修める者のための地方試験に合格したという。

11歳のシェリングは、ベーベンハウゼン修道院の上級課程に入った。この学校は、父が教授をつとめる学校である。この学校は、マウルプロンとシュトウットガルト王立高等学校と並んで、テュービンゲン大学に進学するエリートコースであった。

シェリングは、15歳までの間に、言語、歴史、論理学、算数、幾何の試験に合格して、大学入学資格者となったというから、驚くべき早熟である。

ふつうより３年も早く大学に入学したシェリング

1790年（15歳）、シェリングは、テュービンゲン大学に入った。大学はふつう18歳で入学するのがふつうなので、３年も早い。いわゆる飛び級で進学したことになる。本人の学力も相当なものだっただろうが、父親が聖職者だったので、親のコネの力も大きかったかもしれない。このように恵まれた家庭に育ち、才能を開花させたシェリングは、早熟の天才であった。

大学は前期２年、後期３年に分けられた。前期２年は哲学を中心とする一般教育を学び、後期３年は神学部に進み、神学を学んだ。

最初の２年の哲学では、ベェク、フラット、アーベルといった教官の講義を受けた。とくに、フラットからカントの『純粋理性批判』の講義を受けた。また、シュヌーラーから旧約・新約聖書の講義を受けた。シェリングの指導教官はこのシュヌーラーであり、ヘブライ語を勉強し、オリエントの研究をした。

前期２年の最後には、シュヌーラーの指導のもとで『人間の悪の始元に関する創世記第三章の最古の哲学問題解明のための批判的哲学的試論』という学士論文を書いた。また、その参考論文として、ラインホルトとカントに関する哲学論文も書いた。この頃から哲学には大いなる関心をいだいていた。

1790年　シェリングはヘーゲルと同室になる

1790年から翌年にかけての半年間、シェリングは、ヘーゲルとヘルダーリンと寄宿舎が同室となった。

世界の哲学と文学に大きな影響を与えることになる３人が、同時期に同じ部屋で勉強したというのは、世界史的な事件であったと言える。ある意味で奇跡のような話である。

ヘルダリンとヘーゲルはいずれも1770年生まれであり、シェリングは、ヘーゲルより５歳年下であった。ふたりはシェリングより２年早く大学に進んでいた。

シェリングとヘーゲルを結んだものは、哲学だった。シェリングは早熟で大学時代から哲学への関心が強かった。シェリングもヘーゲルも、神学の学生として熱心に勉強したが、カントなどの新しい哲学に触れることにより、神学への興味が薄れ、哲学に深く関心をもつようになった。結局、ふたりとも牧師にはならず、哲学の道へ進んだ。

1792年　シェリングが大学の後期課程へ

1792年（17歳）、後期の神学部に進んだ。教官は、ル・プレ、ウーラント、シュトール、前述のフラットといった面々であった。
1795年（20歳）、シュトールの指導のもとに、卒業論文『パウロ書簡の改良者マルキオンについて』を提出し、合格した。20歳でテュービンゲン大学を卒業したのである。
その後、シュトゥットガルトで神学試験に合格した。しかし、牧師の道には進まず、哲学者の道を進むことを決意した。

1793年　ヘーゲルが大学を卒業し、家庭教師となる

1893年（23歳）、ヘーゲルは牧師試補の試験に合格して、牧師試補の資格を得て、神学部を卒業した。しかし、彼は、牧師の道を進むことには自信がなく、哲学の教授になりたいと考えた。このため、家庭教師となることにした。当時は、大学の教員になろうとする者は、貴族の家庭教師をしながら、研究をして、大学から招聘されるのを待つという進路をとるのが普通だった。ヘーゲルは、スイスのベルンの貴族シュタイガー家の家庭教師となった。ここでシュタイガー家の２人の娘と１人の息子に勉強を教えて、３年をすごした。
スイス時代はヘーゲルにとってゆううつな時期だった。周りはフランス語を話す外国人で、ドイツ人のヘーゲルは孤独を味わった。また、思想的にも行き詰まっていたという。
スイスでうつ状態となったヘーゲルは、そのことをヘルダリンやシェリングに手紙で訴えた。そこで、彼らは新しい職場を探してくれた。ヘルダリンは、その時フランクフルトで家庭教師をしており、同じフランクフルトの商人ゴーゲルの家庭教師をあっせんした。
ヘーゲルはこの話に飛びつき、ベルンを去った。1897年（27歳）、フランクフルトへ行き、ゴーゲル家で４年間家庭教師をした。家庭教師をしながら、ヘーゲルは哲学者に向けて研究を始めた。シュタイガー家の図書室を利用できたのは幸いであった。この時代には「イエスの生涯」と「キリスト教の実定性」という２つの論文を書いた。この時代に、ヘーゲルはカントの著作を研究した。この時期から、シェリングの諸論文からしだいに影響を受けはじめたと言われる。

1793年　フィヒテがテュービンゲン大学訪問

ヨハン・ゴットリープ・フィヒテ（Johann Gottlieb Fichte）は、貧しい家に生まれ、貴族のミルティッツ男爵に才能を見い出され、学費を出してもらって教育を受け、イェナ大学とライプチヒ大学で学んだ。ミルティッツ家からの援助が途絶え、生活に苦労した。あちこちで家庭教師を続けながら苦学して勉強を続けた。お金がなくて大学の試験が受けられないため、牧師となる夢を捨てた。絶望し、26歳の誕生日の前日に、自殺を決意するほどであった。何とか家庭教師が決まって、自殺を思いとどまるほどだった。カント哲学に傾倒し、29歳のフィヒテは、ケーニヒスベルクのカントに会いに行き、出版先や家庭教師先が決まり、そこから彼の人生は変わった。しかし、家庭教師の口は不安定であり、カントに紹介してもらった家庭教師も終わり、無職となった。出版した本の評判によって、イェナ大学の助教授となることができた。フィヒテの前半生は、波瀾万丈の綱渡り人生である。
1793年６月に、フィヒテはテュービンゲンに３日間滞在した。おそらく、ダンツィヒからチューリヒに向かう途中に立ち寄ったと思われる。この時に18歳のシェリングと会ったかどうかは不明であるが、その後、シェリングは、フィヒテが1794年に出版した『知識学の概念について』を読んで、自我哲学に傾倒していた。

1794年　フィヒテがテュービンゲン大学を訪問し、シェリングとの文通始まる

1794年５月に、再びフィヒテはテュービンゲンに半日だけ滞在した。当時32歳のフィヒテは、イェナ大学の助教授となったばかりであった。この時、フィヒテは19歳のシェリングと会ったようだ。フィヒテが帰ってから、『哲学一般の形式の可能性へ』という論文を書き、９月９日に小冊子として完成し、９月26日にフィヒテに贈った。その後、フィヒテとの間で手紙をやりとりした。

1795年　シェリングが大学生で著書を発表　ドイツ観念論の哲学者として世に認められた

1795年、20歳の大学生だったシェリングは、『哲学の原理としての自我について』を出版した。フィヒテの学説は難解でまだ生成途上にあったが、シェリングは、フィヒテの学説の要点をすばやく的確に捉えて、この学説を的確に解説してみせたのである。この著作によってシェリングはドイツ観念論の哲学者として世に認められた。
この時期のシェリング哲学の特徴は、フィヒテのコピーであった。フィヒテは、「シェリングの本は､私の本の注釈書です」とし、「私の本よりも明快だ」と述べているほどである。フィヒテはシェリングを自分の後継者とみなしていた。

1795年　シェリングが大学を卒業

1795年に、20歳のシェリングは、シュトールの指導のもとに、卒業論文『パウロ書簡の改良者マルキオンについて』を提出し、合格した。20歳でテュービンゲン大学を卒業したのである。
その後、シュトゥットガルトで神学試験に合格した。しかし、牧師の道には進まず、哲学者の道を進むことを決意した。

1796～1798年　シェリングが家庭教師となりライプツィヒ大学で学ぶ

1796年（21歳）、大学を卒業したシェリングは、シュトゥットガルト近郊のアイゼンバッハに住む貴族リーデセル家の家庭教師となった。その後、23歳でイェナ大学の助教授となるまでの３年間は家庭教師をした。わずか３年間の家庭教師をしただけで大学教員となれたシェリングは幸運であった。

さらに幸運だったのは、貴族リーデセル家の２人の子ども（18歳のヘルマンと16歳のヴィルヘルム）がライプツィヒ大学で勉強することになり、シェリングはいっしょにライプツィヒ大学についていき、そこで自分も勉強できたことである。

１－４．徹底比較　テュービンゲン大学時代の３人

テュービンゲン大学の３人（とくにシェリングとヘーゲルの２人）には多くの共通点がある。それをまとめたのが、下の表である。

表１－２　徹底比較　テュービンゲン大学時代の３人

		共通点	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
A 入学前	入学前の状況	初等・中等教育		エリート校であるベーベンハウゼン校 15歳大学入学資格	地元のギムナジウム
	入試の成績	優秀で飛び級も		３年飛び級で入学	優秀。通常の進学
B 入学時の事情	入学時の特徴	入試成績はトップクラス		入試成績は１位	入試成績は３位
	入学時の推薦	推薦あり		父の推薦	出身校の推薦で官費奨学生に
C 在学中の特徴	大学での地位	父からの期待によって神学部の学生に		父の後継を期待されて神学部の学生ら	父の希望にしたがって神学部の学生に
	在学期間	５年間		1790～1791年 ５年間	1788～1793年 ５年間
	年齢	15～23歳 少年期～青年期		15～20歳 少年期～青年期	18～23歳 青年期
	在学期間の重なり	重なりあり。ここからドイツ観念論の人間ドラマが始まった		ヘーゲルと２年	シェリングと２年
	在学中の行動と感情の特徴	牧師を志し神学を猛勉強。フランス革命に感激。		牧師を志し神学を猛勉強。ヘーゲルの影響でフランス革命に関心。	牧師を志し、神学を猛勉強。奨学生として優等生。フランス革命に感激。
	在学中の哲学の学業	神学→カント哲学→哲学を志す→フィヒテ哲学		神学の卒業論文→カント哲学→フィヒテ哲学。在学中に著書出版	神学の卒業論文→カント哲学→哲学を志す。シェリングの影響大
D 師弟関係	師との関係・師への感情	将来の師との出会い。師への尊敬と後継者アピール 【師弟関係　第１位相】		師フィヒテとの出会い。師を支持する論文を送り、尊敬と後継者アピール	後輩のシェリングとの友情。後に上下関係は逆転。結果的に師シェリングとの出会いとなる
	弟子との関係・弟子への感情	将来の弟子との出会いと指導	テュービンゲン大訪問で弟子シェリングと出会う	先輩のヘーゲルとの友情。後に上下関係は逆転。結果的に弟子ヘーゲルとの出会いとなる	（該当なし）
E 対人関係	対人関係	ヘルダリンとの友情		同室のヘルダリンとの友情	同室のヘルダリンとの強い友情
	女性問題	淡い恋程度		なし	学生あこがれのマドンナへの恋
F 大学を去る	大学を去るきっかけ	いわゆる卒業		卒業論文が合格	牧師試補試験に合格
	大学を去った後	卒後、牧師にはならず哲学者めざし家庭教師に。後にイェナ大学教官に		卒後、牧師にはならず哲学者めざす→家庭教師３年→イェナ大学助教授に	卒後、牧師にはならず哲学者めざす→家庭教師７年→イェナ大学私講師に

注）この表１－２の形式は、後の表２－２、表６－５、表７－１と合わせてある。

以下、表１－２にしたがって、以下のＡ～Ｆの６つの点から、３人を比較してみよう。
Ａ．入学前
Ｂ．入学時の事情
Ｃ．在学中の特徴
Ｄ．師弟関係
Ｅ．対人関係
Ｆ．大学を去る

Ａ．入学前

入学前の状況
初等・中等教育

２人とも、中等教育の学校からテュービンゲン大学に進んだ。

シェリングは、父が修道院の牧師で東洋学の教授をつとめていた。９歳でラテン語学校に入学した。11歳のシェリングは、ベーベンハウゼン修道院の上級課程(いわゆる高等学校に当たる)に入って学んだ。この学校のオリエント学の教授だったのが、シェリングの父であった。この学校は、マウルブロンとシュトゥットガルト王立高等学校と並んで、テュービンゲン大学に進学するエリートコースであった。

ヘーゲルは、父がヴュルテンベルク公国の財務官であり、プロテスタントの真面目な家庭であった。７歳で地元シュトゥットガルトのギムナジウムに入学し、ギリシャ語とラテン語を徹底的にたたきこまれた。ギムナジウムとは、ドイツにおける大学進学のための中等教育の学校であり、イギリスではグラマースクールや、フランスではリセに当たる。ギリシャ語とラテン語という古典語の学習を中心としている。ヘーゲルは７歳から卒業までの11年間をこのギムナジウムですごした。

大学前の成績
優秀で飛び級も
２人とも優秀であった。とくにシェリングは３年も飛び級をするほどの天才であった。

シェリングは、早熟の天才であり、９歳から通ったラテン語学校では、教師が「シェリングはここではもはや学ぶべきものはない」と言ったという。11歳までに、将来チュービングン大学で神学を修める者のための地方試験に合格した。15歳までには、言語、歴史、論理学、算数、幾何の試験に合格して、大学入学資格者となったというから、驚くべき早熟である。それで、ふつうよりも３年早く大学に入学できたのである。シェリングの学んだ学校は父が教授をつとめていたので、父の指導も大きな力を持っていたに違いない。

ヘーゲルは、18歳で地元のギムナジウムを卒業し、テュービンゲン大学に進んだ。シェリングのような飛び級はなく、ふつうの進学であった。

Ｂ．入学時の事情

入試の特徴
入試はトップクラス
２人とも、入試の成績はトップクラスだった。
シェリングは、入試の順位は１位だった。
ヘーゲルは、入試の順位は３位とのことである。

入学時の推薦
推薦あり
２人とも、入学に当たって推薦があったようだ。
シェリングは、シェリングの学んだ学校であるベーベルハウゼン修道院上級課程では、彼の父親が教授をつとめており、大学入学資格を取らせるなどの指導もしたであろうし、テュービンゲン大学神学部への飛び級においても、当然、父親の推薦があったのではないかと考えられる。
ヘーゲルは、出身校の推薦により、官費奨学生となったようだ。国からすべての学資が出ていて、黒いマントと白いカラーの制服を着て、教師から厳しい監視を受けながら生活した。

Ｃ．在学中の特徴

大学での学部選択
父からの期待によって神学部を選ぶ
　２人とも、父から聖職者になることを期待されて神学部を選んだ。しかし、結果的に２人とも聖職者にはならず、哲学の道を選んだ。
　シェリングは、大学では神学部を選んだ。シェリングの父は牧師であり、その２代前より牧師の家系であったし、母も牧師の娘であった。したがって、シェリングも家系と同じ牧師になることが期待されていただろう。
　ヘーゲルも、神学部を選んだ。父は聖職者ではなかったが、父はヘーゲルが牧師になることを望んだ。ヘーゲルはその望にしたがって、牧師になるつもりで神学部に入学した。

在学期間
５年間
　２人ともテュービンゲン大学に在学した期間は、５年間である。留年もせず、最短期間で卒業した。
　シェリングは、1790～1791年まで、５年間在学した。
　ヘーゲルの在学期間は、1788～1793年の５年間であった。これは通常の大学生の在学期間である。

年齢
15～23歳　少年期～青年期
　２人が在学したのは15～23歳であり、少年期～青年期であった。
　シェリングは、15歳で大学に入り、20歳で卒業した。少年期～青年期といえる。いかに早熟だったかがわかる。
　ヘーゲルは、18歳で入学し、23歳で卒業した。これは通常の大学生の年齢であり、青年期といえる。

在学期間の重なりがある
　２人は別々の時期に在席したのではなく、重なって在席した期間がある。
　シェリングとヘーゲルは２年間の重なりがある。しかも、２人は、寄宿舎で同室であった。これは全くの偶然である。この偶然からドイツ観念論哲学の人間ドラマが始まった。もし２人が異なる大学にいたら、また、もし少しでも時期がずれていたら、２人が出会うことはなかった。そうなれば、ヘーゲルがイェナ大学で哲学を始めることもなく、哲学者ヘーゲルは誕生していなかったかもしれない。ヘーゲルの哲学者人生の初期において、シェリングとの出会いはそれほど決定的だったと言えよう。

在学中の行動と感情の特徴
多くの共通点あり
　２人とも、在学中には、牧師をめざして熱心に勉強した。また、フランス革命に感激し、強い関心をいだいたことも共通する。

　シェリングは、聖職者だった父の期待によって、牧師を志して神学部に入り、神学を熱心に勉強した。寄宿舎でヘーゲルと同室となったため、哲学への興味を互いに強め合った。また、ヘーゲルの影響で、フランス革命に感激し、強い関心をいだいた。

　ヘーゲルは、父が牧師になることを望んだため、ヘーゲルはその望みにしたがって、牧師になるつもりで神学を勉強した。官費奨学生として真面目に取り組み、優等生であった。ヘーゲルは、学生時代は、哲学よりもフランス革命に対する政治的な関心の方が強かった。1789年７月14日、ヘーゲルが18歳の時に、バイチーユ監獄への襲撃からフランス革命が始まった。フランスに近いテュービンゲン大学の学生はフランス革命への関心を強め、神学校には政治クラブができた。ヘーゲルもフランス革命に熱狂し、その後一生の間、バイチーユ襲撃を記念して、７月14日には祝杯をあげたという。ヘーゲルの神学の研究にはフランス革命の強い影響がみられる。

在学中の哲学の学業
同じような学問的経過

　２人とも、神学→カント哲学→哲学を志すという同じ学問的な経過をたどった。テュービンゲン大学は前期２年、後期３年の５年制であった。前期２年は哲学を中心とする一般教育を学び、後期３年は神学部に進み、神学を学ぶ。２人とも、牧師を志して神学部に入り、神学を熱心に勉強したが、その過程で、カント哲学の講義を聴いたり、カントの著書を読んで感銘を受け、哲学に強く惹かれた。さらに、当時最先端のフィヒテ哲学に傾倒し、シェリングは在学中にドイツ観念論の哲学者として認められるに至った。
　なぜシェリングとヘーゲルが共通した経過を辿ったかというと、はじめシェリングが哲学に強い関心を示したが、２人が寄宿舎で同室となったため、ヘーゲルがその影響を受けた（真似をした）からである。

　シェリングは、牧師を志して神学を熱心に勉強した。前期２年間には、神学者シュヌーラーの指導のもと

で『人間の悪の始元に関する創世記第三章の最古の哲学問題解明のための批判的哲学的試論』という学士論文を書いた。また、後期の３年間の卒業論文は、神学者シュトールの指導のもとに、『パウロ書簡の改良者マルキオンについて』を書いた。卒業後、牧師の試験にも合格した。しかし、牧師の道には進まず、哲学者の道を進むことを決意した。それは、大学の前期課程において、哲学者フラットからカントの『純粋理性批判』の講義を受けたりして、カント哲学に開眼したからである。前期２年の最後の学士論文の参考論文として、ラインホルトとカントに関する論文も書いた。寄宿舎でヘーゲルと同室となったため、哲学への興味を互いに強め合った。さらに、シェリングは、師フィヒテとの出会いによって、フィヒテの自我哲学に傾倒し、多くの論文を書いた。そして、在学中の1795年（20歳）に、著書『哲学の原理としての自我について』を出版した。この著作によってシェリングはドイツ観念論の哲学者として世に認められた。

ヘーゲルは、牧師になるつもりで神学を勉強した。前期の２年間には、神学者シュヌーラーから旧約・新約聖書の講義を受けた。また、カントの著作を読んだ。後期の３年間には、神学者シュトールの講義をすべて受けて、キリスト教の基本的な知識を身につけた。キリスト教の歴史に深く関心を持ち、「民族宗教とキリスト教」という論文を書くなど、大学を卒業しても宗教に対する関心は強かった。ヘーゲルは、卒業後に牧師試補の資格を得たのだが、牧師の道を進むことに自信がなかった。ヘーゲルが哲学に興味を持ち始めたのは、寄宿舎でシェリングと同室となり、シェリングに刺激されたことが大きい。ヘーゲルの哲学者人生において、シェリングとの出会いは決定的だったと言えよう。大学を卒業してから、ヘーゲルはカント哲学やフィヒテ哲学を本格的に勉強し、本格的に哲学を志すようになった。

Ｄ．師との関係
将来の師との出会い。師への尊敬と後継者アピール【師弟関係　第１位相】

２人とも、テュービンゲン大学時代に、人生に大きな影響を与える師と出会った。弟子は師に対して、学者としての尊敬を示した。また、師の理論を支持する論文を書いて、師の後継者であることをアピールした。つまり、後述する師弟関係の第１位相がここに始まった。結果的に、こうした出会いがドイツ観念論哲学を生んだと言える。

シェリングは、師フィヒテとの出会いがあった。フィヒテは、1793年に３日間、1794年に半日間、テュービンゲン大学を尋ねる機会があり、シェリングと出会った。フィヒテは、イェナ大学助教授として、1794年に『知識学の概念について』を出版し、自我哲学を体系化していた。シェリングは、この著書を読んで感激し、自我哲学に傾倒していた。フィヒテが帰ってから、シェリングは「哲学一般の形式の可能性へ」という論文を書き、９月９日に小冊子として完成し、９月26日にフィヒテに贈った。師フィヒテに対して、学者としての尊敬を示し、フィヒテの後継者としてアピールした。これに対して、フィヒテも応じて、２人の往復書簡が始まった。師弟関係の始まりである。

ヘーゲルは、寄宿舎でシェリングと同室になり、友情を育んだ。２人が出会ったときは、ヘーゲルのほうがシェリングより５歳も年上であり、学年も２年上だったので、ヘーゲルのほうが先輩であった。その時は、師弟の意識は全くなかった。ところが、早熟の天才シェリングは、神学や哲学の才能を早くから発揮したので、ヘーゲルのほうがその影響を受けるようになった。その後、ヘーゲルは、シェリングのことを「私の師」と呼び、自分のことを「シェリングの弟子」と呼んで、尊敬を示した。２人の上下関係は完全に逆転した。事実、1790年に２人が出会ってから11年後の1801年には、シェリングはイェナ大学の助教授となっており、ヘーゲルは正式に「シェリングの弟子」としてイェナ大学に呼ばれることになったのである。したがって、テュービンゲン大学のヘーゲル、結果的に、師シェリングと出会ったといってよい。のちに、ヘーゲルは、『フィヒテとシェリングの哲学大系の相違』（1801年）という論文を書いてシェリングを支持したが、このことも２人の共通点である。

弟子との関係・弟子への感情
将来の弟子との出会いと指導
師弟関係は相互的であり、師にとっても、人生に大きな影響を与える弟子との出会いがあったことになる。師は弟子に対して、学問的な指導をおこなった。後述する師弟関係の第１位相がここに始まった。そして、後のイェナ大学時代に、師は弟子をイェナ大学に就職させるなど、さまざまな便宜供与をおこなうことになる（後述の師弟関係　第２位相）。

フィヒテは、1793年に３日間、1794年に半日間、テュービンゲン大学を尋ねる機会があり、そこで、シェリングと出会った。当時、フィヒテは、イェナ大学助教授として、1794年に『知識学の概念について』を出版し、自我哲学を体系化していた。出会いの後に、シェリングから「哲学一般の形式の可能性へ」という論文を受取り、フィヒテはシェリングに対して手紙を書き、２人の往復書簡が始まった。これによって、師フィヒテと弟子シェリングの師弟関係が始まった。後のイェナ大学時代に、師は弟子を指導し、いいろな便宜供与をおこなうことになる。

シェリングは、寄宿舎でヘーゲルと同室になり、友情を育んだ。２人が出会ったときは、シェリングはヘーゲルより５歳も年下であり、学年も２年下だったので、シェリングのほうが後輩であった。その時は、師弟の意識は全くなかった。ところが、早熟の天才シェリングは、神学や哲学の才能を早くから発揮したので、ヘーゲルに対して大きな影響を与えるようになった。その後、ヘーゲルは、シェリングのことを「私の師」と呼び、自分のことを「シェリングの弟子」と呼んで、尊敬を示した。２人の上下関係は完全に逆転した。したがって、テュービンゲン大学は、結果的に、師シェリングと弟子ヘーゲルの師弟関係の始まりとみなすことができる。後のイェナ大学時代に、師は弟子を指導し、いいろな便宜供与をおこなうことになる。

Ｅ．対人関係

対人関係
ヘルダリンとの友情

２人とも、後のイェナ大学時代やベルリン大学時代には数々のトラブルをおこすが、しかし、テュービンゲン大学時代には大きな対人トラブルはなかった。

テュービンゲン大学時代の２人の重要な対人関係は、ヘルダリンとの友情であった。テュービンゲン大学時代の２人の人間ドラマにおいて、ヘルダリンは、重要なゲストである。ちょうど、イェナ時代のゲストがゲーテであり、ベルリン大学時代のゲストがシュライアマハーであるように（後述）。

ヘーゲルとヘルダリンはいずれも1770年生まれである。1788年に、ヘーゲルが18歳でテュービンゲン大学に入学した時、ヘルダリンも同期入学であり、ふたりはすぐに仲がよくなった。

1790年に15歳のシェリングが入学してきて、シェリングは、ヘーゲルとヘルダーリンと寄宿舎が同室となった。世界の哲学と文学に大きな影響を与えることになる３人が、同時期に同じ部屋で勉強したというのは、奇跡のような話であり、世界史的な事件であった。

３人を結びつけたのは、1789年のフランス革命であった。テュービンゲン大学の学生はフランス革命への関心を強め、神学校には政治クラブができた。学生たちはテュービンゲン郊外の野原に出かけ、「自由の樹」を植えた。そして、樹の周りを踊って歌いながら、フランスにならって革命を祝った。この学生たちの中に、シェリング、ヘーゲル、ヘルダリンの３人がいたのである。ヘーゲルは、ヘルダリンに寄せた詩『エロイジス』を書いたりしている。

第４部ヘーゲル論で詳しく紹介したように、卒業後のヘルダリンは不幸な人生を歩むことになる。彼は、詩人としての道を歩み、小説や詩を発表して有名になった。ヘルダリンは、家庭教師先で、妻のズゼッテに恋をした。この恋愛は小説『ヒュペーリオン』に描かれた。しかし、この恋は悲劇に終わった。ズゼッテとの関係を知った夫は激怒し、ヘルダリンを家から追い出した。その後、ヘルダリンはズゼッテと文通を続け、ヘーゲルがその仲介をしたこともある。しかし、４年後の1802年にズゼッテは亡くなってしまった。

このような不幸な事件がヘルダリンの心を傷つけたのか、ヘルダリンは、30代で統合失調症を発症した。テュービンゲン大学精神科に入院し、退院後、1807年（37歳）から、1843年（73歳）の死に至るまでの36年間を、知人の家で独居した。そこが「ヘルダリン塔」と呼ばれる。ヘルダリン塔での生活は、外出が禁じられていたわけではないが、来客が来ても通常の会話をすることができず、内にこもっていた。宗教的な詩や支離滅裂な詩を作ったが、発表できる作品を作ることはなかった。

ヘルダリンは、生前は文学の名声は得られなかったが、死後に、ニーチェやハイデッガーなどの実存主義の哲学者から高く評価された。小説『ヒュペーリオン』は、後の文学に大きな影響を与えた。ニーチェは青年時代にこの作品を愛読し、その影響は『ツァラトゥストラかく語りき』にも及んでいるという。三島由紀夫が愛読者だったことも有名で、小説『潮騒』は、『ヒュペーリオン』を下敷きにしているという。

女性問題
淡い恋程度

２人とも、15～23歳の少年期・青年期であり、女性問題はなく、せいぜい淡い恋程度であった。

シェリングは、テュービンゲン大学時代は15歳～20歳であり、まじめに勉強と研究に励んだらしく、恋の話は伝わっていない。その反動のためか、イェナ時代には大きな不倫スキャンダルを起こすのであるが。

ヘーゲルは、学生あこがれのマドンナに恋をした。亡くなった神学教授の娘でアウグステという女性に恋をした。ヘーゲルは、友人のサイン帳にこう書いた。「去年のモットーは酒、今年のモットーは恋！　1791年10月7日、アウグステ万歳！」

Ｆ．大学を去る

大学を去るきっかけ
いわゆる卒業

２人とも、いわゆる「卒業」により大学を去った。

ドイツの大学では、第二次世界大戦前まで、「転学の自由」があり、どの大学で学んでもよく、途中で変わることも自由だった。「かつては学生のほうも遍歴してまわったものである。・・・学生は学期又は学年ごとに好みの大学を移りかわり、目指す教授の講義や学位をもとめて、複数の大学に在席するのが常だった。」樺山紘一『都市と大学の世界史』日本放送出版協会、1998.

ゲーテは６年かかってライプツィヒ大学とシュトラースブルク大学の２つの大学で学んでいる。フィヒテは、イェナ大学とライプツィヒ大学の２つの大学で学んでおり、大学を卒業していない。そもそもドイツの大学には、各大学で「単位」を揃えて「卒業」するという制度がない。国がおこなう大学卒業資格試験を受けて初めて卒業が認められる。「〇年で卒業すべし」といった年限もないので、勉強したいだけ勉強できる。

だからシェリングとヘーゲルがテュービンゲン大学だけで勉強し、５年で「卒業」したことは珍しいことであった。正確に言うと、「卒業」したというわけではなく、卒業論文が認められたというだけのようである。

シェリングは、卒業論文『パウロ書簡の改良者マルキオンについて』を書いて、合格した。

ヘーゲルは、卒業論文を書いたという記録がない。どうやら牧師試補の試験に合格することで、大学卒業と同等の資格を得たのではないかと思われる。

大学を去った後
牧師にはならず哲学者めざす→家庭教師→後にイェナ大学教官に

２人とも、大学卒業後、牧師の資格はとったのに牧師にはならなかった。哲学者をめざして、家庭教師の仕事をした。そして、後に、イェナ大学の教官に招かれた。

シェリングは、卒業後、牧師の試験に合格したが、牧師の道には進まず、哲学者の道を進むことを決意した。家庭教師の仕事をして、哲学の研究を続け、３年後にイェナ大学助教授として呼ばれた。

ヘーゲルは、卒業後、牧師試補の試験に合格したが、牧師になる自信がなく、哲学の道をめざした。家庭教師の仕事をして、７年後に、シェリングの引き立てでイェナ大学の私講師にもぐりこむことができた。

第２章　イェナ大学時代　　（1794～1807年）

＜目次＞

２－１．３人の年表
２－２．イェナ大学時代（1794～1807年）の歴史的・政治的背景
２－３．イェナ大学時代の３人の行動（編年体）
　　カントとフィヒテの師弟関係（まとめ）
　　フィヒテとシェリングの師弟関係（まとめ）
　　シェリングとヘーゲルの師弟関係（まとめ）
２－４．徹底比較　イェナ大学時代の３人

２－１．３人の年表

イェナ大学時代は、フィヒテがイェナ大学の助教授となった1794年から、ヘーゲルがイェナ大学を出た1807年までの13年間である。1798年にはシェリングが助教授となり、1801年にはヘーゲルが私講師となった。３人とも数年ほど在任した後、イェナ大学を去った。

下の表２－１は、３人の足取りを年表にしたものである。色を塗ったところがイェナにいた時期である。

表　２－１　イェナ大学時代のフィヒテ・シェリング・ヘーゲルの年表

西暦	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
1794	32　イェナ大学助教授		
95	33		
96	34		
97	35		
98	36　無神論論争 ←→	23　イェナ大学助教授	
99	37　イェナ大学を去る	24	
1800		25	
01	←	26 ←→	31　イェナ大学私講師
	←		←シェリングに同調しフィヒテを批判
02		27 ←→	32「哲学批判雑誌」
03		28　イェナ大学を去る	33
04			34
05			35 イェナ大学助教授
06			36
07			37 イェナを去る
			←『精神現象学』でシェリング批判

←→ は協調　　← は批判　　３人の項目の数字は年齢

哲学の歴史を変えた13年間

イェナ大学時代はほんの13年間という短期間の出来事である。しかし、哲学史の流れからすると、この13年間がドイツ観念論哲学を完成させ、哲学の歴史を大きく変えたわけである。イェナ時代の３人については哲学史の教科書にも取りあげられ、よく知られている。

３人の在任期間には重なりがある。これは偶然ではなく意図的なものである。つまり、フィヒテがシェリングを呼び、シェリングがヘーゲルを呼んだために、イェナ大学に３人がそろったのである。この意図的なつながりに人間ドラマが潜んでいる。

２－２．イェナ大学時代（1794～1807年）の歴史的・政治的背景

その前に、この1794～1807年という時代の歴史的・政治的背景について、簡単におさえておこう。
この時期は、フランスのナポレオン軍の侵略を受けて、ドイツが占領された時期である。

フランス革命からナポレオン独裁へ

フランス革命は、ジャコバン党の独裁政治に移行し、ロベスピエールらによる恐怖政治が始まった。1794年のテルミドールの反動によりロベスピエールは処刑されたが、こうした混乱の中から、ナポレオンがあらわれ、1799年から独裁政治が始まった。

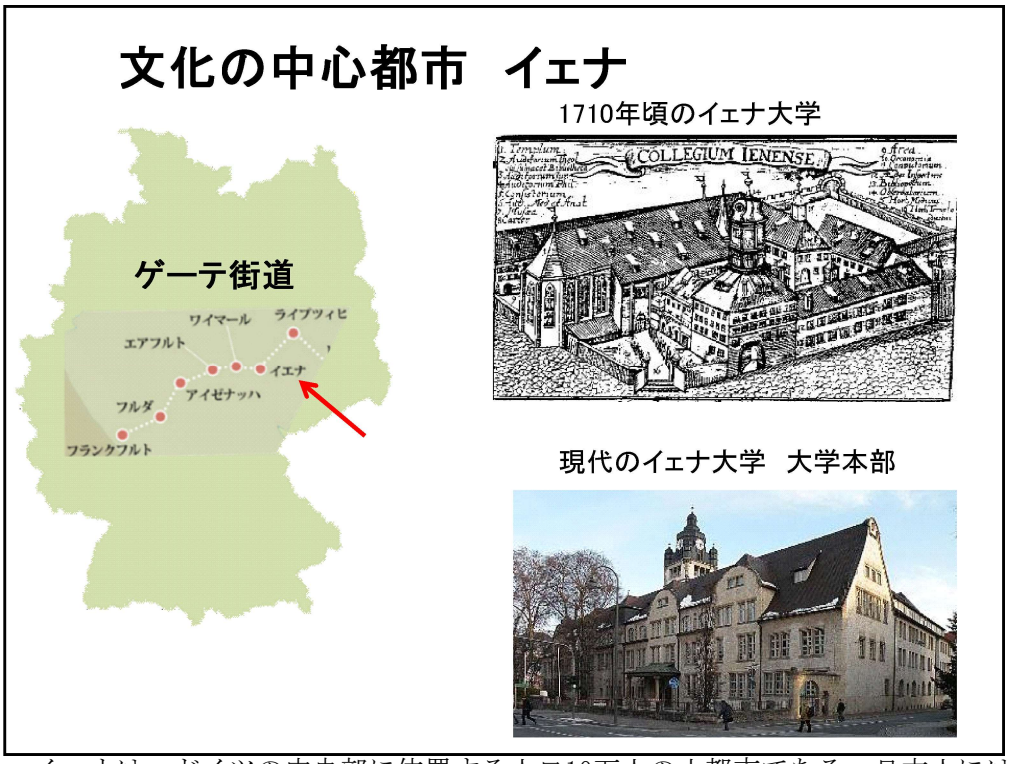
ナポレオン軍のドイツ侵略

ナポレオンはヨーロッパを侵略し、フランス革命を輸出しようとした。ナポレオンは1802年、ドイツの西部を占領し、「ライン同盟」という属国を作り、これによって、1000年続いた神聖ローマ帝国が解体した。東側に残ったプロイセン王国は、1806年にフランスに宣戦したが、イェナ・アウエルシュタットの戦いに大敗し、ベルリンを占領された。ドイツの大学もその被害を受けることになる。1807年にはイェナ大学も占領され、ヘーゲルは大きな被害を受けた。

反ナポレオンの戦い

これに対して、プロイセンは、国王フリードリヒ・ヴィルヘルム３世のもと、宰相シュタインやハルデンベルクらの官僚によって、国の大改革がおこなわれた（プロイセン改革）。日本でいえば明治維新のような大改革である。この流れが、後にベルリン大学の創設へとつながる。
上からの改革だけでなく、下からの改革運動もおこった。国民レベルでナポレオン支配からの解放運動がおこり、その代表が1807年のフィヒテの講演『ドイツ国民に告ぐ』である。フィヒテの人生は反ナポレオンの戦いに費やされることになる。
こうした改革によって、1813年、諸国民の戦い（ライプチヒの戦い）に勝ち、ナポレオン軍を追い出すことができた。

文化の中心都市イェナ

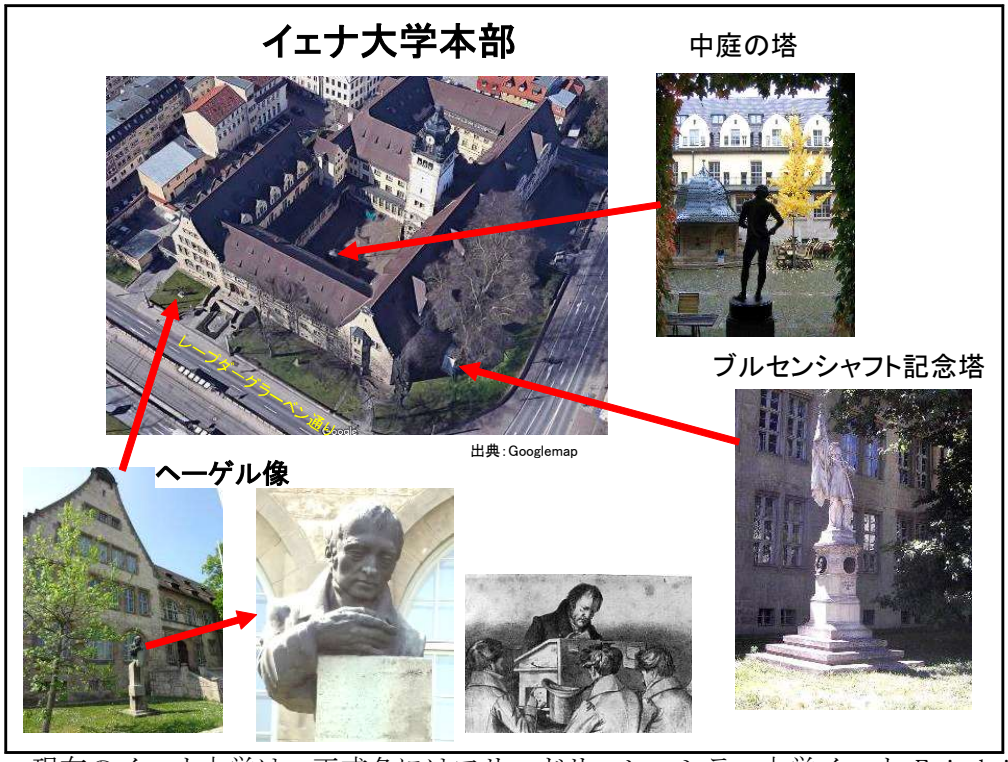


イェナは、ドイツの中央部に位置する人口10万人の小都市である。日本人にはあまりなじみがないが、観光的には、ゲーテ街道にある都市として知られている。ゲーテ街道は、ゲーテの足跡を辿る観光ルートであり、地図に示すように、フランクフルトから、フルダ、アイゼナハ、エアフルト、ワイマール、イェナを経て、ライプツィヒに至る。
ゲーテ街道の中心にあることからわかるように、ワイマール公国の宰相だったゲーテが、ドイツ中から有力な教授をイェナ大学に集めたことで、イェナは文化の中心都市となった。中でもロマン主義という美学運動がイェナでおこったことはよく知られている。ゲーテの疾風怒濤期の作品から影響を受け、『アテネウム』という機関誌が発行された。この運動の中心となったシュレーゲル兄弟、ティーク、ノヴァーリス、シュライアマハーなどであり、シェリングもこのサークルの理論的指導者だった。さらに、ゲーテがドイツ観念論哲学のビッグスリー（フィヒテ・シェリング・ヘーゲル）をイェナ大学に呼んだ。シェナという都市の

雰囲気から、後にブルシェンシャフト運動がおこった。
　イェナという街は、1558年に設立されたイェナ大学によって発展した町であり、街の中央に大学の建物がある。
　昔のイェナ大学の様子は、右上の版画に示されている。建物の正面に塔が立っていて、特徴的なトンガリ屋根がついている。
　右下は、現代のイェナ大学の本部である。建物の中央に時計台が立っている。

哲学者の道
　街の中央部、植物園の東側にに「哲学者の道 Philosophenweg」がある。哲学者の道といえば、ハイデルベルクや京都が有名だが、イェナにもある。
　イェナの哲学者といえば、フィヒテ・シェリング・ヘーゲルのことであろうから、彼らが歩いていた道なのであろう。

イェナ大学本部



　現在のイェナ大学は、正式名にはフリードリッヒ・シラー大学イェナ Friedrich-Schiller-Universität Jena である。この大学で活躍した詩人のシラーの名前をとったものである。
　イェナ大学の本部の前には、ヘーゲルの像が建っている。
　左上の写真のように、本部の建物は、「日」の字のような形をしている。中庭には、前の写真で示したような昔の塔のトンガリ屋根が保存されている（右上の写真、再掲）。
　東側のレープダーグラーベン通りの側に、ヘーゲルの上半身の像が立っている（左下の写真）。
　この像は31歳でイェナにやってきた若きヘーゲルが大学で講義をする絵（下の真ん中の写真）をもとにしたものであろう。
　また、大学本部の北東の角には、ブルセンシャフトの記念碑が建っている（右下の写真）。ブルセンシャフトとは、1815年にイェナ大学ではじめて作られた学生組合のことで、ドイツ統一を訴える政治運動となり、ドイツ中の大学に広がった。この運動に対抗するために、後にヘーゲルはベルリン大学に呼ばれることになる。

２－３．イェナ大学時代の３人の行動（編年体）

　以下、上の２－１の年表にしたがって、３人の行動を編年体で見ていこう。

1794年　フィヒテがイェナ大学助教授に呼ばれる
　イェナ大学の哲学部では、教授のラインホルトがキール大学に転任し、そのポストが空席になっていた。当時のイェナ大学には哲学の教員がたくさんおり、教授３名、助教授（員外教授）２名、私講師７名という構成だった。学生は30名ほどであった。
　フィヒテは、著書『あらゆる啓示の批判の試み』の名声によって、1794年（32歳）、イェナ大学の助教授に招かれた。自分が学生時代に学んだ母校の教員となれたわけである。フィヒテは当時ラインホルトの哲学

について研究していたので、その後任になれたことは運がよかった。また、この人事にはゲーテの推薦もあった。イェナ大学に来る前のフィヒテは家庭教師をしていたが、生活苦にあえいでいた。この就職が決まらなければ、フィヒテは路頭に迷っていただろう。

哲学史上最も面白い人間ドラマの幕開け

フィヒテがイェナ大学に来たことが３人の人間ドラマの幕開けである。フィヒテはシェリングをイェナ大学に呼び、シェリングはヘーゲルをイェナ大学に呼び、ドイツ観念論哲学の３人がすべてイェナ大学に集結することになったのである。もし、フィヒテが、イェナ以外の大学（例えば、ハレ大学とかハイデルベルク大学とか）に呼ばれたら、その大学にシェリングとヘーゲルは呼ばれただろう。そして、ドイツ観念論哲学も別のルートを辿っただろう。

ただ、フィヒテのイェナ大学への人事にはそれなりの必然性もあった。影の仕掛け人ゲーテがイェナ大学の人事に力を持っていたので、フィヒテの人事はイェナ大学でしか可能ではなかったかもしれない。また、カント哲学の信奉者ランンホルトがイェナ大学にいたために、その後任としてカントの弟子のフィヒテが呼ばれたという事情もあった。

フィヒテの旺盛な著作活動

フィヒテのイェナ大学の講義は、学生の人気は高かった。公開講座には聴衆があふれ、フィヒテの名声は、前任者のラインホルトを凌いだ。

イェナ大学時代のフィヒテは、著作活動が最もさかんな時期であった。

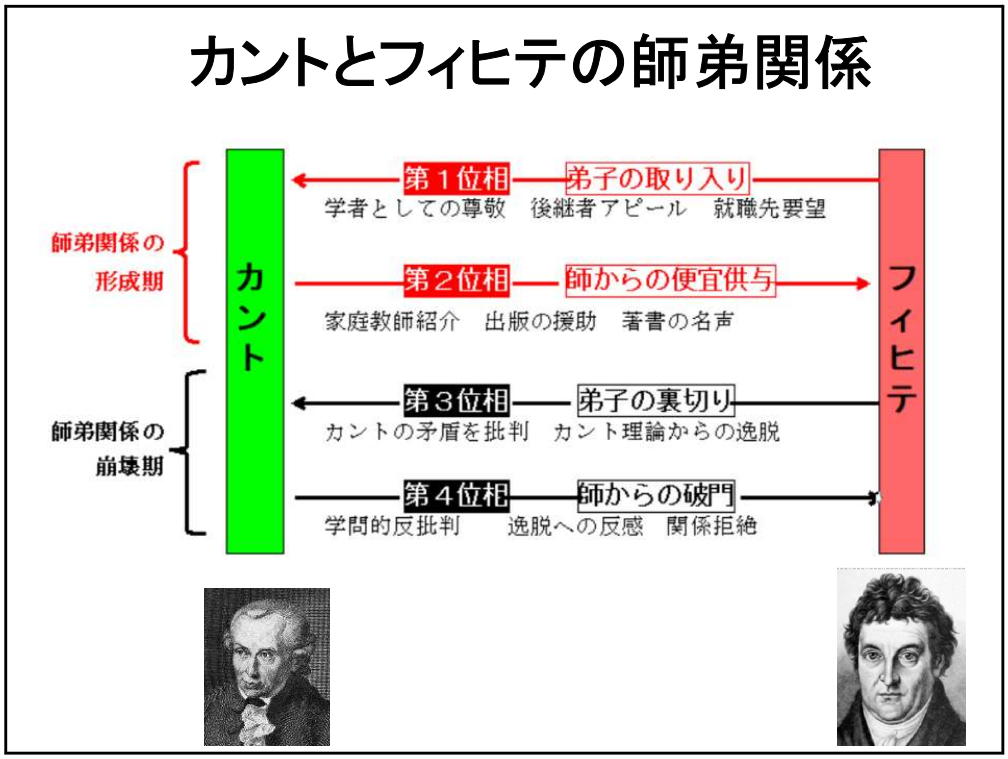
1794年には『知識学すなわちいわゆる哲学の概念について』を出版した。また、イェナ大学の公開講義『学者の使命について』をおこない、それを1794年に出版した。

私講義『全知識学の基礎』をおこない、それを1794年～95年に出版した。この『全知識学の基礎』がフィヒテの主著となり、ドイツ観念論哲学の出発点となった本である。

1796年には『自然法の基礎』、1798には『道徳論の体系』を出版した。

さらに、1794年には「知識学への第一序論」「第二序論」などの多くの論文を発表した。

カントとフィヒテの師弟関係（まとめ）

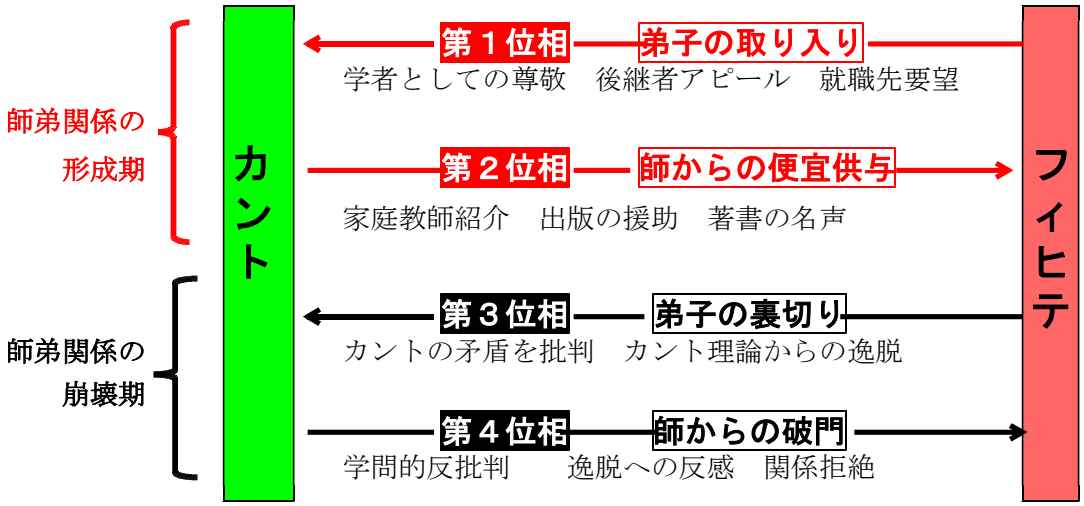


それまで全く教職の経験がなかったフィヒテが、イェナ大学に就職することができたのは、カントのおかげといってよい。

ここでカントとフィヒテの師弟関係についてまとめておこう。

師弟関係は、形成期と崩壊期に分けられる。それらは、それぞれ、弟子から師への働きかけと、師から弟子への働きかけに分けられる。そこで、全体として４つの位相に分けられる。第１位相は「弟子から師への取り入り」であり、第２位相は「師からの便宜供与」、第３位相は「弟子による師への裏切り」、第４位相は「師から弟子への破門」である。

図２－１　カントとフィヒテの師弟関係



第１位相　弟子の師への取り入り（フィヒテ→カント）

タテマエ

始まりは、1791年、29歳のフィヒテが、ライプツィヒからわざわざケーニヒスベルク大学のカントを尋ねたことにある。フィヒテはカントの著作を読んで感動し、学者として尊敬していることを示した。しかし、無名のフィヒテは相手にされなかった。そこでケーニヒスベルクに滞在して論文『あらゆる啓示の批判の試み』を５週間で書きあげた。これをカントに見てもらい、カントの後継者たることをアピールした。フィヒテの論文を読んだカントはフィヒテの実力を認めた。

ホンネ
　当時のフィヒテは、結婚したばかりで、家庭教師の口もなく、無職で困っていた。ケーニヒスベルクに行くときも、歩いて行かなければならないほど、お金がなかった。そこで、フィヒテはカントに借金を申し込んだほどである。大学のポストへの就職は喉から手が出るほど欲しかった。フィヒテの猛烈な売り込みによって、カントから著書の出版先や家庭教師先を紹介してもらうことができた。フィヒテがイェナ大学に就職することができたのは、カントのおかげである。もしイェナ大学の就職が決まらなければ、フィヒテは路頭に迷っていただろう。

第２位相　師からの便宜供与（カント→フィヒテ）

タテマエ
　カントとフィヒテの利益は双方向的である。フィヒテがやってきたとき、カントは67歳、ケーニヒスベルク大学の教授であり、すでに哲学上の弟子はたくさんいた。とはいえ、フィヒテに対して、哲学上の実力を認め、自分の哲学の継承者のひとりを見いだしたという師弟関係を感じ取ったので、いろいろな援助を与えたのだろう。

ホンネ
　カントは、わざわざ遠くケーニヒスベルクまで会いに来てくれるほど尊敬されたことを喜んだであろう。フィヒテに対して、後継者となることを期待して、好意を持った。借金の申しこみは断わったものの、家庭教師先を紹介した。また、カントは出版社を紹介した。このために、フィヒテは著書『あらゆる啓示の批判の試み』を出版することができた。しかも、この本は、匿名で出版されたので、カントの著書だと誤解され、それによって逆にフィヒテの名声が上がった（こうしたトリックを仕掛けたのもカントである）。この本の名声によってゲーテなども推薦してくれて、フィヒテはイェナ大学に呼ばれた。カントはフィヒテに対して、直接的にケーニヒスベルク大学のポストを用意したわけではないが、間接的には、カントがイェナ大学のポストに近づけたことになる。イェナ大学にフィヒテが就職したことで、他の大学ではあるが、カントは大学人としての哲学上のひとりの弟子を持ったことになる。実際のところ、カントが1804年に亡くなって３年後の1807年には、フィヒテはケーニヒスベルク大学の教授となった。フィヒテはついに、師であるカントの大学の後継者となることができた。さらに、結果的に言うなら、哲学史の大きな流れにおいては、カントを継承したフィヒテたちがドイツ観念論哲学をたちあげたために、後世において、カント哲学がその重要性を増したことも事実であろう。カントもフィヒテから利益を得た。
　ふたりは双方ともに利益を得たが、より多くの利益を得たのはフィヒテのほうであろう。

第３位相　弟子の裏切り（フィヒテ→カント）
　ところが、フィヒテがイェナを出て、ベルリン時代に入ると、２人の関係は冷めたものになる。

タテマエ
　フィヒテはカント哲学を批判し、それによってオリジナルな自我哲学を確立した。フィヒテによると、カントの説には不統一がある。『純粋理性批判』においては「理論理性」だけを扱い、『実践理性批判』においては「実践理性」だけを扱っており、この２つの理性はただ並列的に並べられているだけであり、うまく統一されていない。フィヒテは、1797年に『知識学への第二序論』において、「どこにも哲学すべての基礎を扱っていない」と述べて、カント哲学を批判した。フィヒテはカントの不統一を克服して、カント哲学を補おうとしたのである。『全知識学の基礎』において、カントの「理性」を「自我」と置き換えて、フィヒテは「実践自我」と「理論自我」の関係を考えた。大元は能動的な「絶対的自我」である。絶対的自我から現れた「実践自我」は、「非我」を乗り越えようとする。しかし、乗り越えられなかったときに、「非我」を認識しようとして「理論自我」が現れる。こうしたダイナミックな動きとして実践自我と理性自我を統一的にとらえようとした。これによって、カント哲学の基礎を確立したと主張した。さらに、こうした動きを確固としたものにすべく、みずからの弟子であるシェリングをイェナ大学に呼んで、共同戦線を張った。

ホンネ
　フィヒテは、恩人である師のカントの哲学から逸脱して行った。フィヒテのいう「絶対的自我」には二面性がある。フィヒテによると、「絶対的自我」は、カントのいう「超越論的統覚」のことだという。「超越論的統覚」とは、われわれ人間の意識経験の根底にある「われ思う」という能動的働きのことであり、この意味では、確かにフィヒテはカント哲学の範囲内にある。ところが、フィヒテは、カント流に「神」や宗教を退けながらも、実は、裏では「神」や宗教を取り入れていた。フィヒテによると、「絶対的自我」は、無限のものであり、「非我」の制限も受けることはないという。どうみてもこれは「神＝絶対者」のことである。フィヒテ自身はそれを否定しているものの、この意味では、フィヒテはカント哲学を逸脱しているのである。せっかくカントが「神」学を哲学から切り離したのに、フィヒテは逆戻りしてしまった。実際、フィヒテの後期思想においては、自我哲学は捨てられ、「神＝絶対者」の哲学をとなえるようになる。こうした点をカントから批判されるとやり返した。

第４位相　師からの破門（カント→フィヒテ）

タテマエ

カントにとって、フィヒテがカントの哲学の矛盾を統一したと豪語したことは、許されざる逸脱であっただろう。カントは、1798年には、以下のように述べて、フィヒテを批判した。「単なる自己意識、しかも素材を持たない、したがってまたこれに対する反省は適用さるべき何らの対象を持たず、それ自身は論理学をも超越するというような単なる思惟形式だけの自己意識は読者に奇妙な印象を与える。すでに表題（知識学という）を見ただけではほとんどその成果を期待することができない。」（1798年ティーフトルンク宛の手紙）岩崎（1980）訳。

また、フィヒテは、カント哲学の「実践自我」と「理論自我」は矛盾すると批判するが、カントにとってはそれらは矛盾ではない。カントは、信仰（実践理性）に場所を与えるために、知識（理論理性）を取り除かねばならなかったという。75歳のカントは、1799年に、「フィヒテの知識学に関する声明 Beziehung auf Fichtes Wissenschaftslehre」を発表した。ここで、フィヒテの批判に対して反論し、フィヒテの「知識学」を「単なる論理学」にすぎないとして切り捨てた。カントからの反批判に対して、フィヒテは「一般学芸新報」誌上でこれに答えた。

ホンネ

すでに大哲学者として尊敬されていた75歳のカントにとって、自分より38歳も年下のフィヒテから、カントの哲学の矛盾を批判され、しかもそれを統一したと豪語されることは、プライドが許さないことだったろう。自分の哲学の後継者として期待したフィヒテが、カントの哲学を逸脱したことは、飼い犬に手をかまれたといった反発を覚えただろう。1799年のカントの批判に対してフィヒテは答えたが、これ以後、1804年にカントが死ぬまで、ふたりが交流することはなかった。実質的に、カントはフィヒテを破門したことになる。

このようにカントとフィヒテの師弟関係は崩れていくのである。ただし、カントとフィヒテは、同じ大学に勤めたわけでなく、哲学理論上の師弟関係にとどまったので、あまりドロドロした人間的な関係にはならなかった。しかし、もしふたりが同じ大学に勤めていたら、もっとドロドロとしたものになったかもしれない。

カントとフィヒテの師弟関係は、後述するフィヒテとシェリングの師弟関係、さらにはシェリングとヘーゲルとの師弟関係と全く同じ構造をしている。後二者の関係は、同じイェナ大学に勤めていたので、ドロドロした人間関係となったのである。

1798年　フィヒテがシェリングをイェナ大学に呼ぶ

フィヒテは、シェリングを自分の後継者とみなして、イェナ大学に呼んだ。

フィヒテとシェリングの関係は、1793年に遡る。この年、フィヒテはテュービンゲン大学に３日間滞在した。また、1794年には、イェナ大学の助教授となったフィヒテは、『知識学の概念』を公刊したが、シェリングはそれを読んだ。1794年に、フィヒテはテュービンゲン大学に半日滞在した。19歳のシェリングは、シェリングは、すぐに「哲学一般の形式の可能性について」という論文を書いて、フィヒテに送った。ここから、フィヒテとシェリングとの往復書簡が始まった。往復書簡は1802年まで続いた。

1795年、20歳の大学生だったシェリングは、『哲学の原理としての自我について』を出版した。フィヒテの学説は難解でまだ生成途上にあったが、シェリングは、フィヒテの学説の要点をすばやく的確に捉えて、この学説を的確に解説してみせたのである。この著作によってシェリングはドイツ観念論の哲学者として世に認められた。

この時期のシェリング哲学の特徴は、フィヒテのコピーであった。フィヒテは、「シェリングの本は､私の本の注釈書です」とし、「私の本よりも明快だ」と述べているほどである。フィヒテは13歳年下のシェリングを自分の後継者とみなしていた。

1795年、20歳でシェリングは、テュービンゲン大学を卒業し、家庭教師をしながらライプニッツ大学で学び、独自の自然哲学を打ち立てた。1795～1801年に次々と５冊の哲学的著作を発表し、哲学者として頭角をあらわした。1798年、フィヒテの推薦によって、イェナ大学に招かれた。また、『世界霊魂について』を読んだゲーテが感心し、シェリングを推薦した。

1798年　シェリングはフィヒテに呼ばれてイェナ大学の助教授になる

シェリングは、1795～1801年に次々と５冊の哲学的著作を発表し、哲学者として頭角をあらわした。

フィヒテの推薦もあり、イェナ大学に招かれることになった。また、『世界霊魂について』を読んだゲーテが感心し、シェリングを推薦した。

このシェリングを、フィヒテは自分の後継者とみなし、カントと対抗するために、イェナ大学に呼んだ。シェリングは、助教授（無給）として、フィヒテとともに、講義を始めた。「自然哲学」と「超越論的観念論」という２つの授業を持った。フィヒテの受講者は290～400名だったのに対し、シェリングの受講者は40名だったという。

1799年　フィヒテを襲った３つのトラブル

しかし、いろいろなトラブルをおこして、イエナ大学を追われてしまうのである。

①大学とのトラブル

フィヒテのイェナ大学の講義は、学生の人気は高かった。平日に大学の講義を入れると他の教授と重なってしまうので、フィヒテは、すべての学生が聞くことができる時間帯として、日曜日に講義をおこなった。しかし、日曜日は礼拝の時間と決まっていたので、大学評議会と対立した。それで正式の弁明書を提出させられた。

②学生組合とのトラブル

また、学生間の事件について、フィヒテは３つの学生団体と対立した。当時のドイツの大学には、学生組合（同郷人会など）があり、秘密結社のように徒党を組んでいた。この集団は粗暴で、ささいなことで決闘をした。フィヒテはこうした学生組合を解散させ、決闘を止めさせようとした。しかし、これがもとで学生と対立した。当時の大学生の乱暴な生活については、私のハイデルベルク編の「学生牢」の項を読んでいただければ、よく理解できるだろう。

学生の一部はフィヒテに敵意を持つようになり、1795年にはフィヒテの家が襲われ、一時避難しなければならないほどだった。1795年の夏学期の講義は中止となり、冬学期より再開した。

③無神論論争

さらに、1798年、フィヒテが36歳の時に、「無神論者」として誹謗された。

フィヒテの弟子のフォールベルクが、「宗教の概念の発展」という論文を哲学雑誌に発表しようとした。フィヒテは、この論文を読んで、無神論だと感じたので、論旨を和らげるため、「神の世界支配に対するわれわれの信仰の根拠」という論文を書いた。その中で、フィヒテは、多くの点ではフォールベルクと同感だが、多くの点では反対だ、と書いた。しかし、匿名の攻撃文書によって、この前半の部分が強調されて、フィヒテは無神論者だと誹謗されることになった。

翌1799年、ザクセン政府（ドレスデンの宗教局）は、フィヒテとフォールベルクの双方をとがめ、雑誌を没収し、ワイマール政府に処罰を要求した。ワイマール政府は、譴責で穏便に処理しようとしたのだが、フィヒテは黙っておらず、当局に反駁した。「もし私を罷免するならば、私は大学を辞めるが、大学の同僚たちもいっしょに辞めるだろう」と宣言したのである。

1799年　フィヒテはイェナ大学を追い出される

フィヒテの態度があまりに硬直的だったので、ついに大学評議会は、フィヒテの辞職を認めざるをえなくなった。フィヒテをイェナに呼んだゲーテでさえも、フィヒテの罷免を主張したという。学生たちは、フィヒテのために署名運動をして嘆願したが、覆らなかった。

フィヒテは、自分の味方をした同僚もいっしょに辞めるだろうと予期していたが、いっしょに辞めた同僚

はひとりもいなかった。いかにもフィヒテらしいエピソードである。
　こうして、1799年（37歳）、フィヒテは、イェナ大学を追い出された。

1799年　ヘーゲルが哲学をめざしシェリングに手紙を書く

　ヘーゲルは、フランクフルトで家庭教師の仕事をしていたが、1799年に父が亡くなった。
　遺産の分配で、ヘーゲルは3154グルデンを相続した。これはどのくらいの価値だろうか。後に、ヘーゲルはニュルンベルクの校長をつとめるが、その年収は1560グルデンだった、また、ハイデルベルク教授としての年収は1500グルデンだった。つまり、3154グルデンとは、当時の大学教授の年収の２年分くらいの価値であろう。29歳の家庭教師にとっては、かなり経済的に余裕ができたことになる。「これだけあれば、２度と家庭教師をしなくてもよい」。ヘーゲルは哲学者への道に専念しようと決め、イェナ大学に行くことに決めた。当時のイェナ大学には、親友のシェリングが助教授をつとめていたし、フィヒテやシュレーゲル兄弟、シラーなどの有名な学者が集まっていたからである。そうした学者をイェナに集めたのは、ワイマールの宰相だったゲーテであった。
　ヘーゲルは、イェナにいたシェリングに手紙を書いて、学者として立つ決意を伝えた。シェリングもイェナ行きを勧めてくれた。1801年、31歳のヘーゲルはイェナに引っ越した。それから６年間イェナに住むことになり、ヘーゲルを大きく羽ばたかせていくことになる。哲学者ヘーゲルの誕生である。

1800年　シェリングとフィヒテが対立しはじめる

　フィヒテが1799年にイェナを去ると、シェリングは、手のひらを返したように、フィヒテに冷たくするようになった。
　1800年、新しい雑誌の構想をめぐり、シェリングと異なる見解を持った。
　哲学上の考え方においても、ふたりの立場の違いが意識されるようになった。1800年に、シェリングは、『超越論的観念論の体系』を発表したが、これを読んだフィヒテは、はじめて、シェリングが自分の知識学の立場から逸脱していくのに気がついた。すぐにフィヒテはシェリングに手紙を書いて、先験哲学と自然哲学とを対立させることには同意できないと言った。その後文通が続くが、はじめの頃の手紙は、互いに相手を尊敬し、意見の調停に努めるという態度が保たれていた。しかし、しだいに論難するようになり、ついには感情的に対立した。
　この往復書簡によって、２人はみずからの哲学的立場の違いを自覚するようになった。こうして1801年に、フィヒテは『知識学の叙述』を書き、一方、同年、シェリングは『わが哲学体系の叙述』を出版した。これでフィヒテとの差がいよいよ明らかになった。この1801年の『わが哲学体系の叙述』こそが、シェリングが同一哲学を打ち立てた記念碑的な著作とされる。

1801年　シェリングはヘーゲルをイェナに呼んで援護させた　　成功はシェリングのおかげ

　フィヒテとシェリングが対立しはじめた1801年に、ヘーゲルがイェナ大学にやってきた。シェリングが、フィヒテとの対立の応援をさせるために、ヘーゲルを呼んだのである。
　ヘーゲルは論文を発表していたわけではないし、大学教員としての経験もなかった。そんな若者がすぐに大学教員になれるわけはない。そこで頼った友人がシェリングであった。当時シェリングは、23歳でイェナ大学の助教授となっていた。そのシェリングのコネを利用して、イェナ大学にもぐりこもうとした。
　1801年に、イェナに来たその年に、ヘーゲルは論文を書いて教授資格を取った。ヘーゲルの教授資格論文は『遊星の軌道についての哲学的論文』というものである。これは自然科学の論文ではなく、天文学に材料を取った形而上論文だという。ピタゴラスのような数の神秘主義にもとづいて、火星と木星の間には惑星は存在しないと予言したものである。しかし、実際の天文学的観測では、この年に火星と木星の間の小惑星が見つかった。このような間違いは、現代だと科学界のスキャンダルとなりうるが、当時は全く問題にされるどころか、ヘーゲルは教授資格 Habilitation を得て大学講師となった。ちなみにヘーゲルはダーウィンの進化論を認めなかったという。
　研究業績のないヘーゲルに教授資格を取ることを勧めたのはシェリングだったであろう。そもそも、ヘーゲルは自然哲学にはあまり興味がない。当時、自然哲学で売り出していたのはシェリングであった。ヘーゲルに「遊星の軌道」についての論文を書かせたのはシェリングかもしれない。ひょっとすると、論文のネタを与えたのはシェリングだったかもしれない。だとすれば、シェリングはよほどヘーゲルを大学のポストにつかせたかったということになる。
　実際、1801年の秋に、無名だったヘーゲルは、イェナ大学の私講師となることができた。これは幸運であったが、やはり当時助教授だったシェリングの強い推薦があったことは間違いがないだろう。
　ただ、私講師（無俸給教師）とは、大学からの給料が出るのではなく、学生の聴講料だけから収入を得る不安定な身分である。学生からの人気がなければ収入はゼロである。当時のイェナ大学には哲学の教員がたくさんおり、教授３名、助教授（員外教授）２名、私講師７名という構成だった。学生は30名ほどであり、私講師は聴講生を奪い合った。ヘーゲルはかなりお金に困ったようだ。
　ヘーゲルが担当したのは論理学、形而上学、自然法、数学などであった。1801～1803年の間は、シェリングといっしょに教えていて、はじめは「哲学演習」もシェリングと共同でおこなった。これもシェリングがいかにヘーゲルに思い入れていたかを示すエピソードである。
　イェナ時代のヘーゲルは、自分の講義に使うための教科書の準備をはじめた。その一部は『精神現象学』

として結実したが、もっと体系的な教科書が完成するのはニュルンベルク時代やハイデルベルク時代になってからであった。

1802年　シェリングとヘーゲルが組んでフィヒテを批判

ヘーゲルがイェナで最初にしたことは、『フィヒテとシェリングの哲学大系の相違』（1801年）という論文を書いて、フィヒテを批判し、それによってシェリングに味方することであった。当時は、シェリングが無名の若者（ヘーゲル）を故郷から連れてきて、「シェリングはすでにフィヒテを超えている」ことを宣伝させたのだといわれた。

1802年に、シェリングとヘーゲルは「哲学批判雑誌」という雑誌を出した。この雑誌は、シェリングとヘーゲルだけが執筆者であり、同人誌のようなものである。発表された論文には、署名がなかった。ヘーゲルはここに５本の論文を発表し、ここから学問的活動を始めた。この雑誌はフィヒテを批判したもので、フィヒテに送りつけられた。もちろん、シェリングにとっても、自説を肯定してくれるヘーゲルの存在は快かったであろうが、徳をしたのは、すでに有名だったシェリングよりも、無名だったヘーゲルのほうである。

1802年　シェリングはフィヒテと決別　　２人の交流は終わった

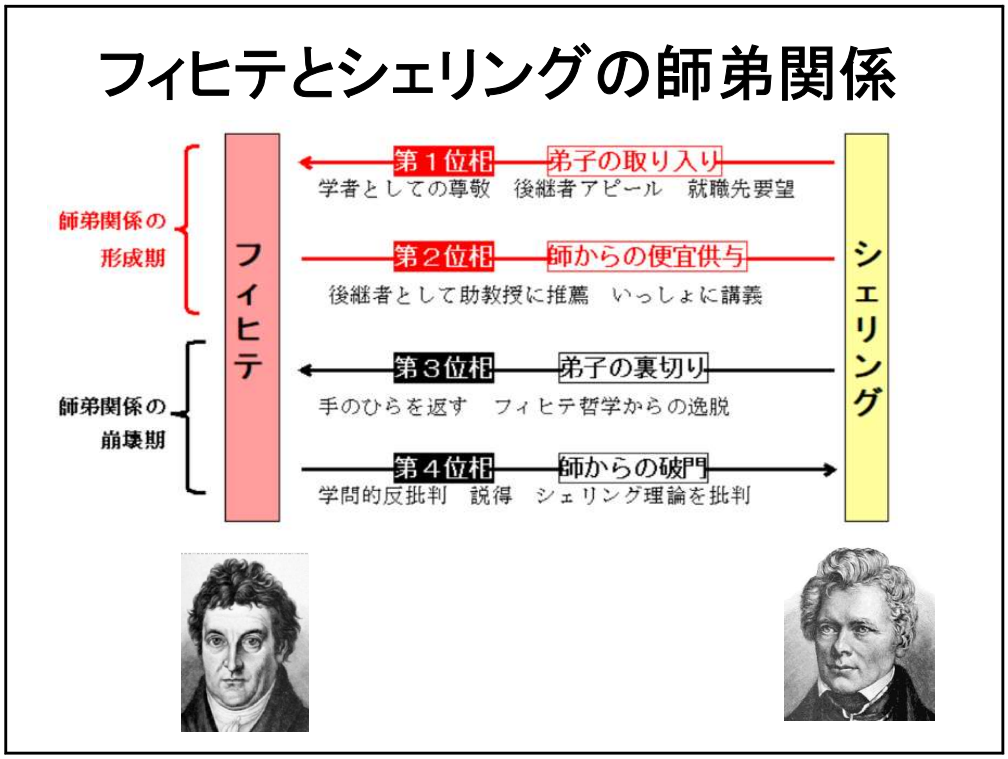
1802年１月のシェリングからの手紙で、フィヒテとシェリングは決別した。以後、ふたりの交流はなくなった。

のちに1806年になって、ミュンヘンにいたシェリングは、『改良されたフィヒテ説の自然哲学に対する真の関係についての説明』を書いて、フィヒテとの決裂を公然と表明した。

この論文に対して、フィヒテは、「知識学の概念ならびにその在来の運命に対する報告」を書いてシェリングを批判したが、生前は未発表であった。

以後、1814年にフィヒテが亡くなるまで、ふたりが交流することはなかった。

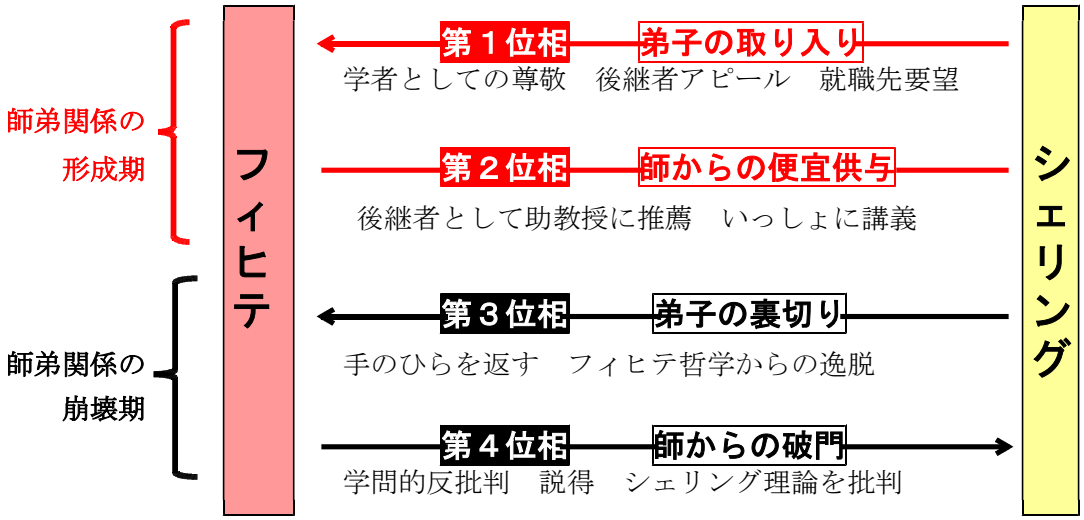
フィヒテとシェリングの師弟関係（まとめ）



ここでフィヒテとシェリングの師弟関係についてまとめておこう。

師弟関係は、形成期と崩壊期に分けられる。それらは、それぞれ、弟子から師への働きかけと、師から弟子への働きかけに分けられる。そこで、全体として４つの位相に分けられる。第１位相は「弟子から師への取り入り」であり、第２位相は「師からの便宜供与」、第３位相は「弟子による師への裏切り」、第４位相は「師から弟子への破門」である。

図２－２　フィヒテとシェリングの師弟関係



第１位相　弟子の師への取り入り（シェリング→フィヒテ）

タテマエ

その始まりは、1794年、フィヒテがテュービンゲン大学に滞在したことにある。19歳のシェリングは、フィヒテと出会い、著作を読んで感動し、「哲学一般の形式の可能性について」という論文を書いて、フィヒテに送った。学者としての尊敬を示し、フィヒテ理論を支持し、フィヒテの後継者たることをアピールした。ちょうど、４年前の1791年、29歳のフィヒテがカントに対しておこなったのと同じアピールを、今度はフィヒテがシェリングから受けたわけである。また、著書『哲学の原理としての自我について』を出版し、フィヒテの学説を的確に解説し、フィヒテの後継者たることをアピールした。この著作によってシェリングはドイツ観念論の哲学者として世に認められた。

ホンネ
　シェリングは、家庭教師をしながら大学の教員となることを望んでいた。イェナ大学のフィヒテから呼ばれたが、もし呼ばれなくても、シェリングは他の大学にいくらでも就職できただろう。シェリングはプライドが高く、フィヒテと対等に振る舞ったようだ。

第２位相　師から弟子への便宜供与（フィヒテ→シェリング）

タテマエ
　フィヒテは、シェリングの著書を読んで、「シェリングの本は､私の本の注釈書です。私の本よりも明快だ」と述べている。フィヒテはシェリングを自分の後継者とみなした。フィヒテはシェリングに手紙を書いて指導し、２人の間に長期間の往復書簡が始まった。フィヒテは、シェリングと協力して、カントに対抗しようという目論見があった（ちょうど、のちにシェリングがヘーゲルと組んでフィヒテ哲学を乗り越えようとしたように）。

ホンネ
　フィヒテは、シェリングから尊敬を受けたことを喜び、シェリングに対していろいろな援助を与えた。シェリングを後継者とみなして、イェナ大学の助教授として呼んだ。フィヒテの時と同じく、ゲーテの推薦もあった。はじめは蜜月状態だった。フィヒテは、はじめシェリングといっしょに講義もおこなったほどである。イェナ大学に就職した時点での哲学上の業績は、23歳のシェリングのほうが、32歳のフィヒテよりも圧倒的に上であった。他の大学から声がかかることも予想され、シェリングを後継者として「青田買い」しておきたいというフィヒテの心理もあったかもしれない。ただ、23歳で大学助教授として呼ばれたシェリングの利益も大きく、得た利益は五分五分だったといえるだろう。別の言い方をすれば、相互の打算のうえに成り立っていた。

第３位相　弟子の裏切り（シェリング→フィヒテ）

　しかし、フィヒテがイェナを出ると、２人の関係は冷めたものになる。

タテマエ
　シェリングは、フィヒテの自我哲学から独立しはじめた。①自然哲学、②汎神論、③自我哲学と自然哲学の同等性、④絶対者の哲学へ、⑤美的観念論という発展を辿って、⑥同一哲学を完成させたのである。師の自我哲学から始まって、師のフィヒテとは違った結論に達した。単純化すると、フィヒテが「自我がすべてである」としたのに対して、シェリングは「すべてが自我である」と主張するようになった。1806年、シェリングは、『改良されたフィヒテ説の自然哲学に対する真の関係についての説明』を書いて、フィヒテとの決裂を公然と表明した。フィヒテの倫理的観念論に対して、シェリングは美的観念論と呼ばれる。

ホンネ
　シェリングは、フィヒテがイェナから去ると、手のひらを返すように、フィヒテに冷たくなった。イェナ大学の教員になるという目的を果たしてしまえば、フィヒテに媚びる必要もなくなった。さらに、師を批判するようになった。ふたりの文通は1801年をもって終わった。シェリングは、対話篇『ブルーノ』（1802年）などの著作で暗にフィヒテを批判した。そして、1806年、シェリングは、『改良されたフィヒテ説の自然哲学に対する真の関係についての説明』を書いて、フィヒテとの決裂を公然と表明した。恩を裏切った。こうした過程も、フィヒテとカントの関係と同じである。
　シェリングの戦略として特徴的なのは、彼がヘーゲルを援軍としてイェナ大学に呼び、２人でタッグを組んで、フィヒテと戦ったことである。当時は、シェリングが無名の若者（ヘーゲル）を故郷から連れてきて、「シェリングはすでにフィヒテを超えている」ことを宣伝させたのだといわれた。これは３人の間のバトルにおいて特徴的であり、学問的な批判が攻撃であることを示すエピソードでもある。

第４位相　師からの破門（フィヒテ→シェリング）

タテマエ
　フィヒテは、シェリングの1800年の『超越論的観念論の体系』を読み、シェリングが自我哲学を逸脱していると感じた。そこで、すぐにフィヒテはシェリングに手紙を書いて、先験哲学と自然哲学とを対立させることには同意できないと批判した。しかし、この往復書簡によって、２人はみずからの哲学的立場の違いを自覚するようになった。1801年のシェリングの『私の哲学体系の叙述』に対して、フィヒテは、シャート宛の手紙でシェリングを批判した。また、フィヒテは、1801年にベルリンでの私的講義をもとに『知識学の叙述』を書き、シェリングとの差が明確になった。シェリングは、1802年の対話篇『ブルーノ』などの著作において、暗にフィヒテを批判した。シェリングは、1806年に「改良されたフィヒテの学説に関する自然哲学の真の関係の明示」を発表して、名指しでフィヒテを批判した。それに反論するために、フィヒテも、1806年に「知識学の概念ならびにその在来の運命に対する報告」を書いて、シェリングを批判したが、生前は未

発表に終わった。
　ただし、フィヒテは、シェリングを一方的に批判するだけではなかった。フィヒテは、ベルリンでの後期思想では、自我哲学からしだいに絶対者の哲学へと考え方を変えていくが、そうした変化をもたらした要因のひとつは、弟子のシェリングの絶対者の哲学からの影響だったとも言われる。フィヒテは、シェリングの哲学は批判していたが、シェリングが提起した問題の意義を十分に認めて、それを解決しようとした。それによって、フィヒテの思想は、前期から後期へと変わっていった。これは、のちにシェリングが、弟子のヘーゲルから批判を受け、ヘーゲルの死後もヘーゲルを徹底的に批判し続けたのとは違っている。３人の行動としては例外的である。

ホンネ
　フィヒテはシェリングの『超越論的観念論の体系』を読んで、飼い犬に手をかまれたという反感を持った。始めは手紙で説得しようとしたが、うまくいかなかった。はじめの頃の手紙は、互いに相手を尊敬し、意見の調停に努めるという態度が保たれていたが、しかし、しだいに論難するようになり、ついには感情的に対立した。互いの理論を批判する戦いが続いた。1802年１月のシェリングからの手紙で、ふたりの文通は終わった。フィヒテが弟子のシェリングを破門したことになる。ふたりは絶交し、以後、1814年にフィヒテが亡くなるまで、ふたりが交流することはなかった。

　こうして、フィヒテとシェリングの師弟関係は崩れたのであるが、前述のカントとフィヒテの関係と同じプロセスである。ただし、フィヒテとシェリングは同じイェナ大学の同僚なので、余計にドロドロとしたものに感じられるようになった。

1803年　シェリングがイェナを出る

1803年にシェリングがイェナを去った。第３部で詳しく述べたように、フィヒテはシュレーゲル（兄）の妻カロリーネと恋愛し、ふたりを離婚に追い込んだ。このスキャンダルにより、シェリングはヴュルツブルク大学へと去った。

ヘーゲルがシェリング批判をはじめた

ヘーゲルはもともとカロリーネをよく思わなかったという。そして、1805年にヘーゲルはイェナ大学の助教授となった。もうシェリングに頼る必要はない。こうして、手のひらを返したように、ヘーゲルはシェリングを批判するようになった。

ヘーゲルがイェナ大学の教員となれたのはシェリングのコネのおかげであり、シェリングは恩人であったが、その数年後にヘーゲルは一方的にシェリングを批判した。

無名のヘーゲルがイェナへ行ったときは、哲学教授シェリングのゴマをすり、その力を借りて、イェナ大学にもぐりこもうとした。シェリングを踏み台にして出世しようとする打算的な行為である。とはいえ、ヘーゲルは自分のことを「シェリングの弟子」と呼んでいた時期もあり、当時は本当にシェリングを尊敬していたのかもしれない。

後述のように、すでにフランクフルト時代には、ヘーゲルの内心ではシェリング哲学を乗り越えていた。したがって、イェナ大学の教員になるという目的を果たした後は、シェリングに媚びる必要もなくなった。何しろヘーゲルはシェリングより５歳年上である。年下のシェリングに弟子扱いされるのはプライドが許さない。

1807年　ヘーゲルが『精神現象学』の序文でシェリングを批判した

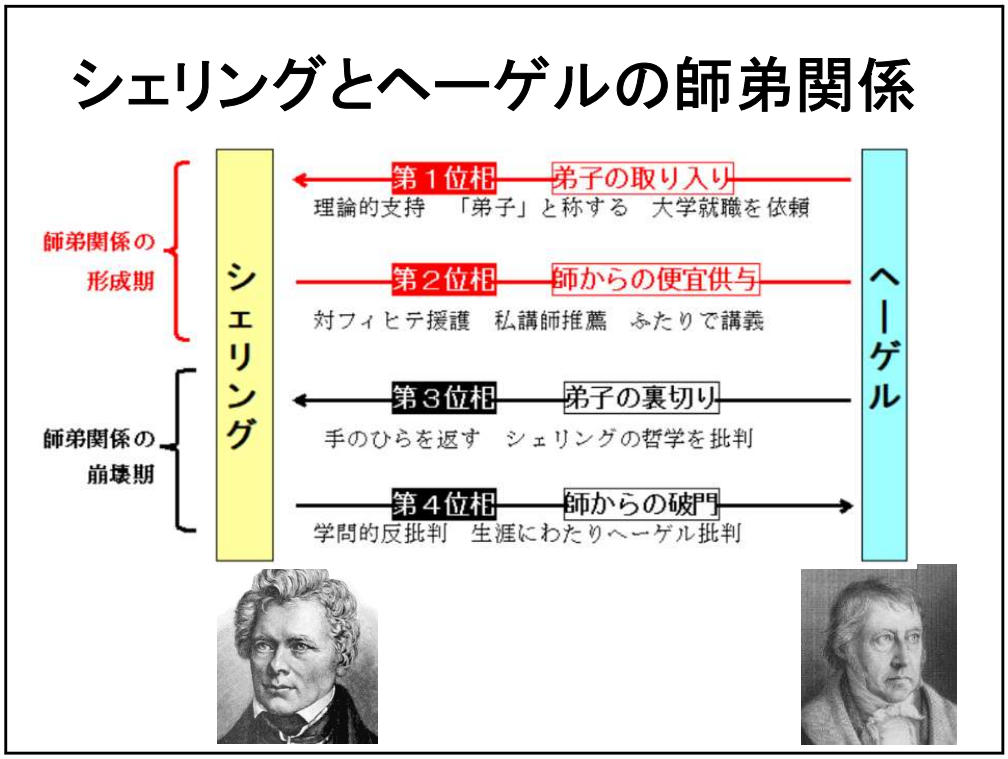
1807年に発表した『精神現象学』の序文において、ヘーゲルはシェリングを批判した。シェリングのいうように、もしすべてのものが絶対者であれば、他と差別がなくなり、善悪真偽の区別もなくなり、価値の実現に向かう人格の自由な活動も意義がなくなる。そして、絶対者から有限者が差別化して現れることを説明できない。シェリングの絶対者の考え方について、ヘーゲルは、『精神現象学』の序文に、名指しこそしていないが、「（シェリングのいう）絶対者は、その中においてはすべての牛が黒くなる闇夜のようなものである」と罵倒した。絶対者から有限者が現れることを説明できないという批判である。

ヘーゲルは平然とシェリングにこの本を送った。シェリングはこの本の序文を読んで、目を疑った。飼い犬に手を咬まれるようなショックだったろう。彼は序文だけしか読まなかった（といっても、シェリングだけのことではなく、『精神現象学』は難解すぎて、専門家ですら序文から先に進んだ人はほとんどいないという）。

1807年　シェリングとヘーゲルの交流は終わった

半年後に、シェリングはヘーゲルに不満の手紙を書き、それによって２人の友情は終わった。一方のヘーゲルは、シェリングを傷つけるなどどは夢にも思わなかったという。２人はのちに２回出会った。1812年にニュルンベルクで、1829年にカールスバーグで、シェリングは偶然ヘーゲルと出会ったが、ふたりとも冷たく分かれた。シェリングも一生ヘーゲルを恨んだ。シェリングは、ヘーゲルからの批判によって挫けてしまったわけではなく、逆にヘーゲルの批判に対して反批判をおこなうことによって、独自の後期思想を作っていった。

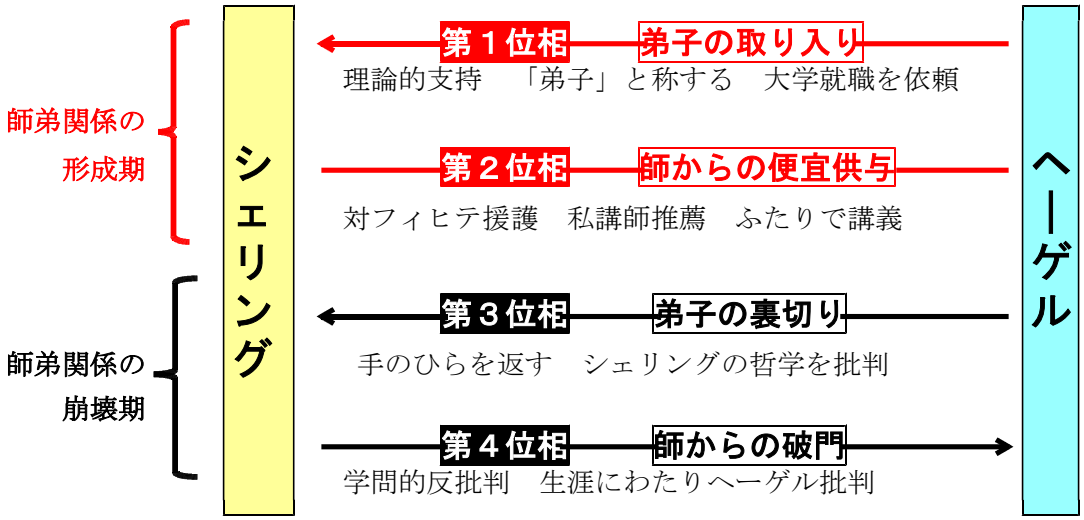
シェリングとヘーゲルの師弟関係（まとめ）



シェリングとヘーゲルの師弟関係についてまとめておこう。

シェリングとヘーゲルは、テュービンゲン大学の寄宿舎で同室になったことで知り合った。シェリング15歳、ヘーゲル20歳の時である。シェリングは５歳も年下であったが、もともとは同級生として平等の関係であった。しかし、1798年、23歳のシェリングはイェナ大学の助教授となり、そこから、年上のヘーゲルが、年下のシェリングの弟子となるという関係となった。

図２－３　シェリングとヘーゲルの師弟関係



第１位相　弟子の師への取り入り（ヘーゲル→シェリング）

タテマエ

ヘーゲルは、テュービンゲン大学で同級だった時から、早熟のシェリングの哲学の才能を尊敬していた。ヘーゲルは、５歳も年下のシェリングに対して、みずからを「シェリングの弟子」と呼んでいた。シェリングに呼ばれてイェナに行ったヘーゲルは、『フィヒテとシェリングの哲学大系の相違』（1801年）という論文を書いて、フィヒテを批判し、それによってシェリングを支持した。

ホンネ

ヘーゲルは、イェナ大学に来る前は、フランクフルトで家庭教師をしていた。1799年、父の遺産を相続し

たヘーゲルは、哲学で身を立てようとしたが、哲学の業績があるわけでもなく、大学のコネがあるわけでもなかった。ヘーゲルにとって、昔の同級生シェリングのコネだけが頼りだった。ヘーゲルは、大学への就職を依頼する手紙をシェリングに書いた。29歳のヘーゲルのほうから、24歳のシェリングに強くアピールしたのである。ヘーゲルは、３人のうちで就職の打算が最も強かっただろう。みずからを「シェリングの弟子」と呼んだのは、別の面から見ると、無名のヘーゲルが、助教授シェリングに取り入ってゴマをすり、その力を借りて、イェナ大学に就職したいという打算からだった。その作戦は見事にうまくいった。

第２位相　師からの便宜供与（シェリング→ヘーゲル）

タテマエ
　シェリングは、ヘーゲルとともに「哲学批判雑誌」という雑誌を出した。この雑誌は、シェリングとヘーゲルだけが執筆者であり、同人誌のようなものである。発表された論文には、署名がなかった。このように、シェリングは、ヘーゲルを弟子として指導した。

ホンネ
　シェリングは、年上のヘーゲルから「シェリングの弟子」と呼ばれて喜んだだろう。はじめは蜜月状態だった。シェリングはヘーゲルに対してきわめて多大な援助を与えた。ヘーゲルに教授資格を取らせ、イェナ大学の私講師のポストにつけた。ほかにも、①前述の雑誌「哲学批判雑誌」に５本の論文を発表し、ヘーゲルは研究業績を作ることができた。②イェナ大学でシェリングと共同で演習を出させてもらった（無名だったヘーゲルがシェナ大学で聴講学生を集めることができたのはシェリングのおかけである）。③ヘーゲルをイェナの学芸サークルに紹介した。④ヘーゲルは後に、ゲーテの推薦によって哲学科の助教授に昇格したが、ゲーテにヘーゲルを紹介したのはシェリングであった。⑤イェナに来たばかりの時は、シェリングは家にヘーゲルを同居させた。客観的にみても、シェリングはまさに恩人であった。
　このようなヘーゲルに対する援助の裏には、シェリングの目的があった。当時、シェリングはフィヒテからの理論的な独立を遂げようとしており、その援護を必要としていた。そこで、対フィヒテ援護のために、イェナ大学に来ることを勧めた。当時は、シェリングが無名の若者（ヘーゲル）を故郷から連れてきて、「シェリングはすでにフィヒテを超えている」ことを宣伝させたのだといわれた。ヘーゲルから理論的支持を得て、いっしょにフィヒテを批判してくれることはありがたいことだっただろう。シェリングとヘーゲルの連携は成功した。
　このように、シェリングとヘーゲルの利益は双方向的であるが、より多くの利益を得たのはヘーゲルのほうであろう。それまで全く哲学の業績もなく、大学での教職経験がなく、コネもなかったヘーゲルが、イェナ大学に就職することができたのは、全くシェリングのおかげである。

第３位相　弟子の裏切り（ヘーゲル→シェリング）
　ところが、シェリングがイェナ大学をやめて外に出ると、２人の関係は冷めたものになる。フィヒテ・シェリング関係と同じことが繰り返された。

タテマエ
　ヘーゲルは、イェナの前のフランクフルト時代にはすでに、フィヒテやシェリングの自我哲学を乗り越えていたとされる。シェリングは、神は「自我」だけにあるものではなく、あらゆるものに遍在するという汎神論の立場である。シェリングの同一哲学では、神はあらゆるものの根底に存在し、神は常に変化せずに、自己同一的に存在する。ヘーゲルは、はじめシェリングの影響を受けて、シェリングの汎神論の立場に同調していた。しかし、フランクフルト時代のヘーゲルは、「歴史の目的論的解釈」を考えるようになった。これは、歴史とは「神」という絶対者がその本質をしだいに実現する過程であるとするものである。つまり、神はしだいに自己を展開していくものである。ヘーゲルの神は、シェリングの神のように常に変化せずに自己同一的に存在するのではない。ヘーゲルの神は、歴史を通じて、動的にみずから展開していくものである。シェリングのいうように、もしすべてのものが神であれば、他と差別がなくなり、善悪真偽の区別もなくなり、価値の実現に向かう人格の自由な活動も意義がなくなる。そして、絶対者から有限者が差別化して現れることを説明できない。1807年に発表した『精神現象学』の序文において、名指しこそしていないが、「（シェリングのいう）絶対者は、その中においてはすべての牛が黒くなる闇夜のようなものである」と罵倒した。絶対者から有限者が現れることを説明できないという批判である。この『精神現象学』こそヘーゲルの前期の主著とされるのである。

ホンネ
　ヘーゲルは、シェリングがイェナから去ると、手のひらを返して、シェリングに冷たくなった。イェナ大学の教員になるという目的を果たした後は、シェリングに媚びる必要もなくなった。それに、５歳年下のシェリングに弟子扱いされるのはプライドが許さない。また、シェリングの愛人となったカロリーネに対して、ヘーゲルはよく思っていなかったという。
　そして、ヘーゲルはシェリング哲学に対して、遠慮のない批判を加えるようになった。ヘーゲルは『精神現象学』の序文において、名指しこそしていないが、シェリングを罵倒した。ヘーゲルは平然とシェリング

にこの本を送った。前述のように、イェナ大学に来たばかりのヘーゲルに数々の便宜をはかり多大な援助を与えたシェリングは、ヘーゲルにとって恩人のはずである。ヘーゲルに大学教授資格を取らせて大学の私講師にしたのもシェリングだし、いっしょの家に住ませたのもシェリングである。そうした恩を全く忘れたかのようなヘーゲルの裏切りの態度は理解に苦しむところである。まるで、シェリングの数々の便宜供与は、まるでシェリングの一人相撲であったとでもいわんばかりである。

しかも、前述のように、ヘーゲルは、イェナに来る前から、すでに内心ではシェリングを支持していなったようだ。カントをフィヒテが乗り越える過程や、フィヒテをシェリングが乗り越える過程は、最初からそうだったわけではなく、しだいに理論が変化することによって徐々に乗り越えていったのである。ところが、ヘーゲルがシェリングを乗り越える過程は、実はイェナの前の時代に終わっていた。つまり、大学のポストを得るという打算のために、シェリングを支持するフリをしていたことになる。そもそもシェリングを師として尊敬しなかったと考えると、シェリングがイェナを去って、ヘーゲルがシェリングに冷たくなり、裏切ったのも当然のことかもしれない。まさに打算と裏切りの過程である。もしそうなら、ヘーゲルは、３人のうちで最も悪質であるともいえるかもしれない。

第４位相　師からの破門（シェリング→ヘーゲル）

タテマエ

シェリングは、ヘーゲルの1807年の『精神現象学』において罵倒されたが、それに対する反批判を公けにしたのは、ヘーゲルの死後、1834年のことである。シェリングは、クーザンの著書に序文を寄せて、次のようにヘーゲルを批判した。「ヘーゲルの哲学は、シェリングの同一哲学を完成したものではあっても、これを一歩も前進させたわけではない。同一哲学によっては、あるものが何であるかということは説明できても、それが現にあるということは捉えられない。「現実存在」は「本質」に解消されるものではなくて、これに積極的に加わるものである。この積極的なものを問題にすることを標榜して、彼は後期の哲学を「積極哲学」と呼び、考えられぬものではないというだけの消極的本質を扱った前期の哲学を「消極哲学」と呼んで、両者をはっきり区別する。もちろん消極哲学そのものを無意味というのではない。しかし、ヘーゲルのように、論理的、観念的な限定をそのまま実在的な運動と主張するのは、明白な誤りである」（服部・井上、1955）『ブルーノ』訳者解説

1841年、シェリングはベルリン大学教授として呼ばれたが、シェリングは、ヘーゲル哲学を徹底的に批判した。ヘーゲルは、理性や概念にもとづいて存在を把握しようとしたために、存在を本質としてしか把握できない「消極哲学」にすぎない。存在を存在そのものとして、「現実存在」としてとらえる「積極哲学」を主張し、人々を動かした。シェリングのいう「消極哲学」とはヘーゲル哲学のことをさしている。つまり、積極哲学をめざすということは、ヘーゲルを批判することであった。ヘーゲルへの反批判がシェリングの後期哲学を生むことになった。

ホンネ

「本来ヘーゲルが前期のシェリング哲学に対する批判を基として新しい立場を開いたのに対し、今度は逆にシェリングがヘーゲル哲学を批判することによって、従来のシェリング哲学とは違った新しい立場を拓いた」　藤田（1962）

シェリングは、ヘーゲルが1807年の『精神現象学』においてシェリングを罵倒しているのを読んで、目を疑った。飼い犬に手を咬まれるようなショックだったろう。すぐにシェリングはヘーゲルに不満の手紙を書き、それによって２人の師弟関係は終わった。実質上の破門であり、絶交を言い渡したことになる。シェリングは一生ヘーゲルを恨んだ。しかも、1816年には屈辱が待っていた。1814年にベルリン大学の哲学教授だったフィヒテが病死すると、そのポストは空席のはままだった。1816年に後任として、３人の候補があげられた。シェリング、ヘーゲル、フリースの３人である。投票の結果、選ばれたのはヘーゲルであった。シェリングはヘーゲルに敗北を喫した。これは屈辱であっただろう。

1818年、ヘーゲルはベルリン大学教授として呼ばれた。ヘーゲルは次々と大著を出版し、ヘーゲル哲学はたちまちドイツ哲学界の主流をなしていった。これに対して、シェリングは、ミュンヘンにおいて、すっかり栄光から遠のき、今をときめくベルリンのヘーゲルを羨望の目で眺めつつ、落魄の日々を送ることになった。ヘーゲルよりも先に哲学界にデビューしフィヒテ以上の時代の寵児となった自分が、20年後にはすっかり栄光から遠のき、ヘーゲルに水をあけられてしまった。ミュンヘンに移ったシェリングのもとをハイネが尋ねた。その時に、シェリングは「わしのアイディアをヘーゲルは奪い取った」とぐちったという（バウムカルトナー『シェリング哲学入門』）。

シェリングとヘーゲルは絶交後、２回だけ偶然出会う機会があった。1812年にニュルンベルクで、1829年にカールスバーグで、シェリングは偶然ヘーゲルと出会ったが、ふたりとも冷たく分かれた。

1831年、ヘーゲルが亡くなった。シェリングはずくにはヘーゲル批判を公にはしなかったが、３年後の1834年、クーザンの著書に序文を寄せて、ひそかにヘーゲルを批判した。

1841年、シェリングは、ヘーゲル哲学の牙城のベルリン大学に呼ばれたが、そこでもヘーゲル哲学を徹底的に批判し続けた。シェリングは「ヘーゲル哲学は、私の同一哲学の延長にあるものにすぎない（私の哲学を盗んだもの）」と考えていた。学問の装いをとっているものの、シェリングの積極哲学の底には、ヘーゲルに対する恨みがあると思われる。シェリングのいう「消極哲学」とはヘーゲル哲学のことをさしている。

つまり、積極哲学をめざすということは、ヘーゲルを批判することであった。シェリングは、消極哲学を否定することで、みずからの同一哲学も否定している。いわば自爆テロである。たとえ自爆しても、ヘーゲルを否定したかったのかもしれない。すさまじい敵意である。

こうして、シェリングとヘーゲルの師弟関係は崩れた。カント→フィヒテ→シェリング→ヘーゲルという関係は、いずれも同じような形をとったことは興味深いことである。打算と裏切りの関係は連鎖したのである。

２－４．徹底比較　イェナ大学時代の３人

３人のイェナ大学時代には多くの共通点がある。それをまとめたのが、下の表２－２である。

表２－２　徹底比較　イェナ大学時代の３人

		共通点	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
A 就職前	前職・イェナ大学までの経歴	家庭教師から大学教員へ	貧困→苦学→自殺願望→家庭教師→無職。波瀾万丈の綱渡りの前人生	恵まれた家庭→飛び級で大学→家庭教師（３年間）。早熟の天才	大学でシェリングと同室→家庭教師（７年間）→父の遺産で哲学者を志す
	師との出会い	師への尊敬と取り入り【師弟関係　第１位相】	師カントへの傾倒。カントに会いに行き学者人生開ける	師フィヒテへの傾倒。師の継承者であるとアピール	年下シェリングの「弟子」と自称。師シェリングへの取り入り。
	就職前の業績	業績レベルはさまざま	○カント紹介で出版した著書１冊のみ	◎若くして多数の著書を出版	×著書・公刊論文なし 大学教授資格を取る
B 就職時の事情	就職人事の特徴	師弟関係を中心に展開。弟子が師のコネを利用するという打算	師カントとの師弟関係を利用してイェナ大学に就職	師フィヒテとの師弟関係を利用してイェナ大学に就職	師シェリングとの師弟関係を利用してイェナ大学に就職
	前任者・空席ポストの充当人事	間接的ないし結果的に、師のポストの後任	ラインホルトの後任。間接的にカントの後任	結果的にフィヒテのポストの後任	助教授昇格は、シェリングのポストの後任
	就職時の推薦 (1)師からの推薦	師からの人事推薦などの便宜供与【師弟関係　第２位相】	師カントからの間接的後押し	師フィヒテからの強力な推薦	師シェリングからの強力な推薦
	就職時の推薦 (2)ゲーテの推薦	ゲーテからの推薦あり。ゲーテは３人のイェナ招聘の仕掛け人	招聘時にゲーテからの推薦	自然科学に共鳴して招聘し親交を続けた	私講師から助教授への昇格時にゲーテからの推薦
C 在任中の特徴	大学での地位	助教授	助教授として採用	助教授として採用	私講師として採用され助教授に昇格
	在任期間	６～７年　短期間	1794～1799年　６年間	1798～1803年　６年間	1801～1807年　７年間
	年齢	23～37歳の血気盛んな若手	32歳～37歳	23歳～28歳	31歳～37歳
	在任期間の重なり	重なりがあり、ここから連鎖と因果応報のドラマが発生	シェリングと２年	フィヒテと２年 ヘーゲルと３年	シェリングと３年
	在任中の行動と感情の特徴	師との戦いの援護で弟子を呼び、３代続くバトルロイヤルに	師カントとの戦いの援護でシェリングを呼び補強	師フィヒテとの戦いの援護でヘーゲルを呼び補強	師シェリングとの１対１の戦い
	在任中の哲学の業績	各自オリジナルな理論を完成。ドイツ観念論哲学が成立。哲学史を変えた13年間	カント哲学から出発し、オリジナルな自我哲学を完成	自我哲学から出発し、自然哲学を取り入れ、オリジナルな同一哲学を完成	第１の主著『精神現象学』完成。ヘーゲル観念論の基本的な発想が固まる
D 師弟関係	師との関係・師への感情	師への恩を忘れ手の平返し。師へのライバル心。師への批判・攻撃・裏切り。無視と侮蔑。【師弟関係　第３位相】	師カントの哲学の不統一を統一したと豪語。カント哲学を補ったというプライド	師フィヒテへの手のひら返し。フィヒテとの闘争心。後に無視。フィヒテを批判（裏切り）	師シェリングへの手のひら返し。著書でシェリングを罵倒（裏切り）。師への侮蔑と無視
	弟子との関係・弟子への感情	弟子からの屈辱。憎しみと非難。弟子を破門し絶交【師弟関係　第４位相】	弟子シェリングを非難し反批判。弟子を破門し絶交	弟子ヘーゲルを非難し反批判。弟子を破門し絶交	（該当なし）
E 対人関係	対人トラブル	いくつかトラブルをかかえた	講義をめぐるトラブル、学生組合との対立、無神論論争	地元の新聞社の記事をめぐるトラブル	出版社との契約をめぐる小さなトラブル
	女性問題・家庭生活	恋愛がスキャンダルに発展することも	結婚し息子が生まれ、落ちついた生活	不倫スキャンダル。不倫相手の娘の死のスキャンダル	家政婦に手をつけ子も生まれるが母子を放置し逃げ婚約不履行
F 大学を去る	大学を去るきっかけ	スキャンダルを巻き起こしてイェナ大学を去る	無神論者との誹謗に対して、辞表を提出して受理された	トラブルとスキャンダルでイェナにいられなくなった	不倫スキャンダルによる。ナポレオンのイェナ侵入は口実
	大学を出た時のポスト	教授になれず、助教授で大学を去る	助教授	助教授	助教授
	大学を去った後	一時的に大学の外へ出て、ベルリン大学教授に返り咲く	大学のないベルリンで無職生活。講演で生活費をかせぐ。	ヴュルツブルク大後、大学を辞め「沈黙の時代」へ	バンベルクで新聞記者になり、その後高校校長へ

注）表１－２、表２－２、表６－５、表７－１は形式を揃えてある。

以下、表２－２にしたがって、以下のＡ～Ｆの６つの点から、３人を比較してみよう。この表２－２は大きすぎるので、Ａ～Ｆの６つに切り分けて、説明していくことにする。
Ａ．就職前
Ｂ．就職の事情
Ｃ．在任中の特徴
Ｄ．師弟関係
Ｅ．対人関係
Ｆ．大学を去る

Ａ．就職前

表２－２Ａ　徹底比較　イェナ大学時代の３人　　Ａ．就職前

		共通点	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
Ａ 就職前	前職・イェナ大学までの経歴	家庭教師から大学教員へ	貧困→苦学→自殺願望→家庭教師→無職。波瀾万丈の綱渡りの前人生	恵まれた家庭→飛び級で大学→家庭教師（３年間）。早熟の天才	大学でシェリングと同室→家庭教師（７年間）→父の遺産で哲学者を志す
	師との出会い	師への尊敬と取り入り【師弟関係　第１位相】	師カントへの傾倒。カントに会いに行き学者人生開ける	師フィヒテへの傾倒。師の継承者であるとアピール	年下シェリングの「弟子」と自称。師シェリングへの取り入り。
	就職前の業績	業績レベルはさまざま	○カント紹介で出版した著書１冊のみ	◎若くして多数の著書を出版	×著書・公刊論文なし大学教授資格を取る

前職・イェナ大学までの経歴
家庭教師から大学教員へ

３人とも、大学教員のポストに就いたのは、イェナ大学が初めてだった。
３人とも、イェナ大学に来る前は家庭教師をしていた。当時は、大学の教員になろうとする者は、貴族の家庭教師をしながら、研究をして、大学から招聘されるのを待つのが普通だった。カントは９年間、フィヒテは８年間、シェリングは３年、ヘーゲルは７年間、家庭教師をした。

フィヒテは、貧しい家に生まれ、貴族のミルティッツ男爵に才能を見い出され、学費を出してもらって教育を受け、イェナ大学とライプチヒ大学で学んだ。ミルティッツ家からの援助が途絶え、生活に苦労した。あちこちで家庭教師を続けながら苦学して勉強を続けた。お金がなくて大学の試験が受けられないため、牧師となる夢を捨てた。絶望し、26歳の誕生日の前日に、自殺を決意するほどであった。何とか家庭教師が決まって、自殺を思いとどまるほどだった。カント哲学に傾倒し、29歳のフィヒテは、ケーニヒスベルクのカントに会いに行き、出版先や家庭教師先が決まり、そこから彼の人生は変わった。しかし、家庭教師の口は不安定であり、カントに紹介してもらった家庭教師も終わり、無職となった。出版した本の評判によって、イェナ大学から招聘の手紙を受け取った。この就職が決まらなければ、フィヒテは路頭に迷っていただろう。26歳の誕生日のようにまた自殺を考えたかもしれない。フィヒテの前半生は、波瀾万丈の綱渡り人生である。学者として立ったのは32歳である。

シェリングは、学者の父を持ち、恵まれた家庭に育ち、才能を開花させた。15歳でテュービンゲン大学に飛び級で入学した早熟の天才であった。大学卒業後、21歳で貴族の家庭教師となり、ライプツィヒで家庭教師をしながら、ライプツィヒ大学で自然哲学を学んだ。こうした幸運もあり、シェリング独自の自然哲学を発展させ、旺盛な執筆活動を始めた。わずか３年間の家庭教師をしただけで、23歳でイェナ大学の助教授として呼ばれたのである。

ヘーゲルは、比較的恵まれた家庭に生まれ、牧師をめざしてテュービンゲン大学神学校に入学した。大学の寄宿舎でシェリングとヘルダリンと同室になったことが、ヘーゲルの人生の大きな幸運であった。大学卒業後、牧師になる自信がなく、哲学の教授になりたいと考え、家庭教師をすることにした。ベルン（スイス）やフランクフルトで７年間家庭教師をつとめた。父が亡くなって遺産が入ったため、「これだけあれば、２度と家庭教師をしなくてもよい」と考えて、哲学者への道に専念しようと決め、シェリングを頼って、イェナ大学に行くことにした。波瀾万丈のフィヒテや、恵まれた早熟の天才シェリングに比べると、ヘーゲルは努力家として地味な前半生を送った。

まとめると、フィヒテは波瀾万丈の綱渡り、シェリングは早熟の天才、ヘーゲルは地味な努力家と、三者

三様の前半生を経て、イェナ大学にやってきたのである。イェナでは、３人の人生だけでなく、哲学の歴史を変えた人間ドラマが展開されることになる。

師との出会い
師への尊敬と取り入り【師弟関係　第１位相】

３人とも、その後の人生に大きな影響を与える師と出会っており、それがイェナ大学への就職とつながった。師の哲学に傾倒した３人は、師を支持する論文を書いて、師にプローチした。それが成功して、イェナ大学に就職することができた。始めは純粋に学問的な尊敬からであったが、結果的には、就職活動という打算的行動の第一歩となった。

フィヒテは、28歳の時、ある学生から、カントの哲学を個人的に教えてくれるように頼まれ、それをきっかけにカントの３批判書を読んだ。当時のフィヒテは、スピノザの決定論の影響で、一切の事物の生起は、神によって必然的に決められているという考えにとりつかれていた。貧しい境遇と生活苦を変えることはできず、将来に絶望し自殺まで考えていた。カントの哲学は、フィヒテを「決定論」の絶望から救い出し、「自由」への道を示してくれた。カント哲学に傾倒したフィヒテは、29歳の時、ケーニヒスベルクのカントに会いに行った。論文『あらゆる啓示の批判の試み』をカントに見せて、学者として尊敬していることを示した。そこで、カントから出版先を紹介してもらい、フィヒテは著書『あらゆる啓示の批判の試み』を出版することができ、これが評判となって、フィヒテはイェナ大学に呼ばれたのである。

シェリングは、19歳の時、テュービンゲン大学でフィヒテの講演を聴き、著作を読んで傾倒した。論文「哲学一般の形式の可能性について」を書いてフィヒテに送り、自分はフィヒテの信奉者だと述べた。さらに、著書『哲学の原理としての自我について』を出版し、フィヒテの学説を的確に解説し、フィヒテの後継者たることをアピールした。この著作によってシェリングはドイツ観念論の哲学者として世に認められた。

ヘーゲルは、テュービンゲン大学神学校でシェリングと同室となり、シェリングとの交流が深まった。シェリングは早熟で大学時代から哲学への関心が強かった。ヘーゲルが神学から哲学へと関心を変えるようになったのは、シェリングの影響による。ヘーゲルは、シェリングの哲学の才能を尊敬しており、５歳も年下のシェリングに対して、みずからを「シェリングの弟子」と呼んでいた。イェナに行ったヘーゲルは、『フィヒテとシェリングの哲学大系の相違』（1801年）という論文を書いて、シェリングを支持し、フィヒテを批判した。

この段階は、師弟関係の第１位相に当たり、これについては後述する。

就職前の業績
業績レベルはさまざま

就職前の哲学上の業績についてみると、３人の業績レベルはさまざまである。

フィヒテは、カントの紹介で、著書『あらゆる啓示の批判の試み』を出版した。フィヒテの著書は、評判が高く、それによってイェナ大学に呼ばれた。イェナ大学に来る前のフィヒテの業績はこの１冊だけしかなかった。

シェリングは、23歳にして、自我哲学の著書や、自然哲学の著者など、すでに数冊を出版していた。

ヘーゲルは、31歳でイェナにやってくる前は、神学の論文は書いてはいたものの未発表であり、哲学の業績（著書や公刊論文）は全くなかった。1798年に、スイスの貴族支配を批判したカルの著書を翻訳し匿名で出版し、これが最初の出版であったが、哲学の業績というわけではなかった。イェナ大学の私講師となることができたのは、よほどの幸運である（シェリングの引きのおかげである）。
業績レベルからいえば、シェリング◎ ＞ フィヒテ○ ＞ ヘーゲル× の順である。

大学教授資格
学位にあたる教授資格 Habilitation については、フィヒテとシェリングは持っていない。教授資格がなくても、大学ポストにつける業績があったからである。
ヘーゲルも、教授資格を取っていなかった。イェナに来たその年に、「遊星の軌道」についての自然哲学の論文を書いて教授資格を取った。ヘーゲルが教授資格を取ったのはシェリングの勧めによるものだったであろう。そもそも、ヘーゲルは自然哲学にはあまり興味がない。当時、自然哲学で売り出していたのはシェリングであった。ヘーゲルに「遊星の軌道」についての論文を書かせたのはシェリングかもしれない。ひょっとすると、論文のネタを与えたのはシェリングだったかもしれない。シェリングはよほどヘーゲルを大学のポストにつかせたかったようだし、ヘーゲルにとってはよほどの幸運である。

Ｂ．就職時の事情

大学教員のポストにつくのは、いつの時代でも苦労がつきものである。
マックス・ウェーバーは、1919年の講演『職業としての学問』の中で次のように言っている。
大学での生活に特有の要因、つまり昇進の不条理さは昔のままであり、本質的にはむしろその不条理は増大しています。つまり、無給講師や研究所の助手が正教授や研究所の幹部となれるかどうかは、まるで宝くじに当たるようなものだということなのです。本当にそうなんです。ただ偶然が支配するなどというものではなくて、非常に高い確率で偶然が支配するのです。昇進においてこれほど偶然が支配的な役割を演ずる職業を私は他に知りません。

マックス・ウェーバー（三浦 展訳）『新装版[現代訳]職業としての学問』プレジデント社、2017.

こうしてみると、３人が若くしてイェナ大学の助教授の地位につけたことは、僥倖だった（運が良かった）といえるかもしれない。
大学のポストに就職するためには、上で述べた実力（専門の業績、教育歴）もさることながら、コネや人間関係といった運の要因も大きい。以下、３人のコネや人間関係についてみていこう。

表２－２Ｂ　徹底比較　イェナ大学時代の３人　　Ｂ．就職時の事情

		共通点	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
Ｂ 就職時の事情	就職人事の特徴	師弟関係を中心に展開。弟子が師のコネを利用するという打算	師カントとの師弟関係を利用してイェナ大学に就職	師フィヒテとの師弟関係を利用してイェナ大学に就職	師シェリングとの師弟関係を利用してイェナ大学に就職
	前任者・空席ポストの充当人事	間接的ないし結果的に、師のポストの後任	ラインホルトの後任。間接的にカントの後任	結果的にフィヒテのポストの後任	助教授昇格は、シェリングのポストの後任
	就職時の推薦 (1)師からの推薦	師からの人事推薦などの便宜供与 【師弟関係　第２位相】	師カントからの間接的後押し	師フィヒテからの強力な推薦	師シェリングからの強力な推薦
	就職時の推薦 (2)ゲーテの推薦	ゲーテからの推薦あり。ゲーテは３人のイェナ招聘の仕掛け人	招聘時にゲーテからの推薦	自然科学に共鳴して招聘し親交を続けた	私講師から助教授への昇格時にゲーテからの推薦

就職人事の特徴
師弟関係を中心に展開。弟子が師のコネを利用するという打算

３人のイェナ大学への就職の人事は、師との人間関係を中心に展開した。つまり、弟子が、師のコネを利用して就職を勝ちとったという打算の面があった。弟子は師に近づき、師弟関係を利用して、大学のポストを得たい、哲学界に地位を占めたいという打算が働く。野心の強い若者であれば当然のことである。

フィヒテは、カントとの師弟関係によって、イェナ大学に就職することができた。当時のフィヒテは、結婚したばかりで、家庭教師の口も不安定であり、無職で困っていた。ワルシャワやチューリヒへに行くときも、歩いて行かなければならないほど、お金がなかった。フィヒテはカントに借金を申し込んだほどである。大学のポストへの就職は喉から手が出るほど欲しかった。フィヒテの猛烈な売り込みによって、カントから著書の出版先や家庭教師先を紹介してもらうことができた。また、出版社を紹介してもらったおかけで、著書を出版することができ、カントの策略によって、その著書は高い評価を受けた。こうした師弟関係によって、フィヒテはイェナ大学に就職できた。それまで全く大学で教えた経験のなかったフィヒテが大学の教員になれたのは、カントのおかげである。もしカントに会いに行かなければ、フィヒテの学者人生はなかっただろう。別の面からみると、カントとの師弟関係を利用して大学に就職するという打算の行動であったともいえる。

シェリングは、フィヒテとの師弟関係によってイェナ大学に就職することができた。シェリングは家庭教師をしながら、大学の教員となることを望んでいた。この時期のシェリングはまだ若く、自分独自の体系を作ることを急がなかったので、ただフィヒテ哲学を理解することだけで満足していた。フィヒテ哲学の解説にとどまり、将来もフィヒテの哲学にとどまるつもりはなかった。事実、フィヒテの自我哲学を出発点として、自然哲学に踏み込み、師の哲学を乗り越えていった。ある意味では、フィヒテを踏み台として利用し、

フィヒテとの師弟関係を利用して大学に就職するという打算の行動であった。

ヘーゲルは、シェリングとの師弟関係を利用して、イェナ大学に就職できた。ヘーゲルは、父の遺産を相続することで家庭教師をやめることができ、哲学で身を立てようとした。ところが、哲学の著書や論文の業績があるわけでもなく、昔の同級生シェリングのコネだけが頼りだった。ヘーゲルは、大学への就職を依頼する手紙をシェリングに書いた。29歳のヘーゲルのほうから、24歳のシェリングに強くアピールしたのである。みずからを「シェリングの弟子」と呼んだのは、無名のヘーゲルが、助教授シェリングに取り入ってゴマをすり、その力を借りて、イェナ大学に就職したいという打算とも見える。その作戦は見事にうまくいった。ヘーゲルは、３人の中で、最も露骨な打算の行動をとったとも言えるかもしれない。

前任者・空席ポストの充当人事
結果的に師の空席ポストに昇格

３人が就職したポストの前任者については、フィヒテについてはわかっているが、シェリングとヘーゲルについては不明である。
３人とも師のポストを継いだことになる。ただし、フィヒテは間接的に、シェリングは結果的に、ヘーゲルは直接的に。

フィヒテは、ラインホルトの後任としてイェナ大学に呼ばれた。ラインホルト（Karl Leonhard Reinhold、1757～1823年）は、カント哲学を高く評価し、ドイツ哲学界にカントを最初に紹介した哲学者である。1787年にイェーナ大学教授として招かれて、イェナ大学をカント哲学研究の中心地にした。ラインホルトは、1789年の『表象能力の新理論の試み』において、カント哲学の理論理性と実践理性の不統一を指摘し、それを「意識」という点から一元化しようとした（根源哲学）。こうした問題意識が、フィヒテに影響を与えた。フィヒテも、カント哲学の理論理性と実践理性の不統一を統一しようとして、「自我」という点から一元化しようとした（自我哲学）。その意味で、ラインホルトは、カント哲学とフィヒテの自我哲学を橋渡しし、ドイツ観念論哲学への道筋をつけた重要な哲学者といえる。フィヒテは、1792年ころからラインホルトを研究するようになった。
ラインホルトは、1794年にキール大学から呼ばれて異動したので、イェナ大学のポストが空席となった。この頃、フィヒテは、著書『あらゆる啓示の批判の試み』をカントが推薦したことで名声を得ており、そのため、1794年、32歳にしてイェナ大学の助教授に招かれたのである。
ここでも、カントは間接的にフィヒテの就職を後押ししていることがわかる。第１に、ラインホルトによってイェナ大学をカント哲学研究の中心地となっていたこと。第２に、フィヒテの著書をカントが推薦したことである。極端にいうと、フィヒテは間接的にカントのポストを継いだことになる。

シェリングが、助教授となったとき、誰のポストの後任となったか、あるいは新設ポストだったのか、詳しいことは不明である。とはいえ、フィヒテがイェナ大学を辞めた後は、シェリングの助教授としてのポストは盤石になっただろう。13歳上の助教授のフィヒテが辞めたので、シェリングが次の教授ポストへの昇格が近づいたのは確かであろう。結果的に、シェリングはフィヒテの後任となったといってもよいかもしれない。もし、２人がずっとイェナ大学にいたら、先にフィヒテが教授となり、シェリングの教授昇格は遅れたかもしれない。

ヘーゲルが、私講師となったとき、誰のポストの後任となったのか詳しいことは不明である。ヘーゲルはその後、私講師から助教授に昇格した。これは直接的に、シェリングの後任としてであったろう。シェリングがイェナ大学を辞めた後は、シェリングの助教授ポストが空席となったわけだから、ヘーゲルは、その後任として、昇格したと思われる。

就職時の推薦（１）師からの推薦
師からの人事推薦などの便宜供与【師弟関係　第２位相】

３人とも、師から強い推薦を受けて、イェナ大学に就職できた。つまり、師から弟子への便宜供与があった。師のほうにも打算が働いたのは明らかである。弟子と師の両方に打算が働き、相互にズブズブの打算の関係となった。
弟子のフィヒテは、師カントの間接的後押しでイェナ大学に就職できたといえる。カントは、フィヒテがわざわざ遠くケーニヒスベルクまで会いに歩いて来てくれるほど尊敬されたことを喜んだであろう。67歳のカントは、押しも押されぬ大哲学者となっており、すでに哲学上の弟子はたくさんいたけれども、フィヒテに対して、自分の哲学の継承者となることを期待したであろう。それでいろいろな援助を与えたのだろう。家庭教師先を紹介し、出版社を紹介した。しかも、フィヒテは著書『あらゆる啓示の批判の試み』は、匿名で出版されたので、カントの著書だと誤解され、それによって逆にフィヒテの名声が上がった（こうしたトリックを仕掛けられるのは大カントしかいない）。この本の名声によってイェナ大学に呼ばれた。カントは、直接的にケーニヒスベルク大学のポストを用意したわけではないが、間接的に、カントがイェナ大学のポス

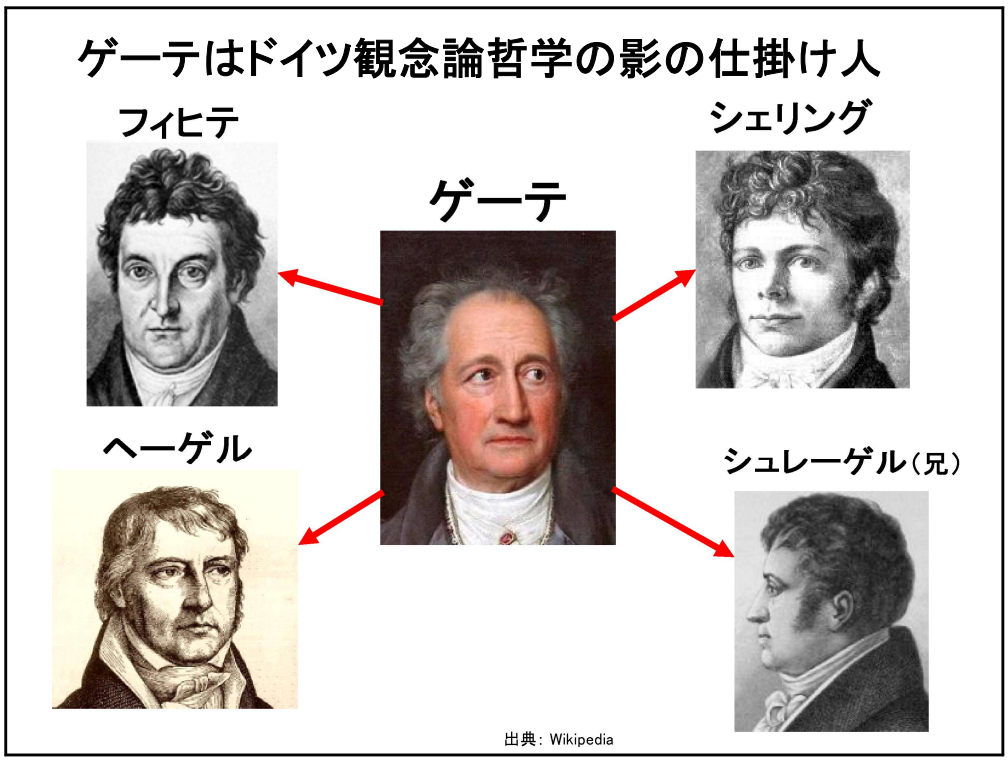
トに近づけたことになる。フィヒテが大学助教授となったことで、他の大学ではあるが、カントは大学人としての哲学上のひとりの弟子を持ったことになる。つまり、師から弟子への便宜供与があった。師のカントのほうにも打算が働いた。さらに、哲学史の大きな流れにおいては、結果的に言うなら、カントを継承したフィヒテ・シェリング・ヘーゲルがドイツ観念論哲学をたちあげたために、カント哲学がその歴史的重要性を増したことも事実であろう。カントも利益を受けたのである。

弟子のシェリングは、師フィヒテの強力な推薦によりイェナ大学に就職した。フィヒテは、シェリングの著書を読んで、「シェリングの本は､私の本の注釈書です。私の本よりも明快だ」と述べている。フィヒテはシェリングを自分の後継者とみなした。フィヒテはシェリングに手紙を書いて指導し、２人の間に長期間の往復書簡が始まった。フィヒテは、シェリングから尊敬を受けたことを喜び、シェリングに対していろいろな援助を与えた。シェリングを後継者とみなして、イェナ大学の助教授として呼んだ。シェリングがイェナ大学にやってきた時も、はじめは、フィヒテはシェリングといっしょに講義もおこなうなど、大学就職後も便宜供与が続いた。師フィヒテのほうにも打算が働いたのは明らかである。大学に就職したい弟子シェリングと、大学に就職させたい師フィヒテの利益は一致した。得た利益は五分五分だった。両者に打算があり、相互の打算の関係である。

弟子のヘーゲルは、師シェリングの推薦によりイェナ大学に就職した。シェリングは、年上のヘーゲルから「シェリングの弟子」と呼ばれて、悪い気はしなかっただろう。シェリングはヘーゲルに対してきわめて多大な援助を与えた。ヘーゲルに教授資格を取らせ、イェナ大学の私講師のポストにつけた。ヘーゲルがイェナ大学に就職した後も、シェリングの便宜供与は続いた。①前述の雑誌「哲学批判雑誌」に５本の論文を発表し、ヘーゲルは研究業績を作ることができた。②イェナ大学でシェリングと共同で演習を出させてもらった（無名だったヘーゲルがシェナ大学で聴講学生を集めることができたのはシェリングのおかけである）。③ヘーゲルをイェナの学芸サークルに紹介した。④ヘーゲルは後に、ゲーテの推薦によって哲学科の助教授に昇格したが、ゲーテにヘーゲルを紹介したのはシェリングであった。⑤イェナに来たばかりの時は、シェリングは家にヘーゲルを同居させた。客観的にみても、シェリングはまさに恩人であった。シェリングがヘーゲルに便宜供与した裏には、隠れた目的があった。つまり、ヘーゲルと連携して、フィヒテを批判したいという隠れた目的である。当時、シェリングはフィヒテからの理論的な独立を遂げようとしており、その援護のために、ヘーゲルを利用しようとした。当時は、シェリングが無名の若者（ヘーゲル）を故郷から連れてきて、「シェリングはすでにフィヒテを超えている」ことを宣伝させたのだといわれた。ヘーゲルもこれによく応え、連携は成功した。ここでも得た利益は、ヘーゲルのほうが大きかったかもしれないが、シェリングにも利益があったのは事実であろう。両者に打算があり、相互の打算の関係である。

この段階は、師弟関係の第２位相に当たり、これについては後述する。

就職時の推薦（２）ゲーテからの推薦



３人ともゲーテから強い推薦を受けたことも共通する。ゲーテは、ワイマール公国の宰相であり、イェナ大学の人事にも大きな力を持っていた。当時のイェナ大学は、ゲーテの政策によって、ドイツを代表する学

者たちが教授として招かれていた。

フィヒテは、著書『あらゆる啓示の批判の試み』がゲーテに気に入り、推薦を受けた。ただ、無神論論争で、フィヒテが、ワイマール政府やイェナ大学に対して硬直的な態度を取って辞職しようとしたときは、ゲーテさえも、フィヒテの罷免を主張したという。

シェリングは、著書『世界霊魂について』（1798年）において、昔から「世界霊魂 Weltseele」と呼ばれていたものについて、みずからの自然哲学の原理で説明した。この本を読んだゲーテは感心した。ゲーテ自身が自然哲学に強い関心を持っていたからである。ゲーテは、シェリングのタイトルそのままの詩「世界霊 Weltseele」という詩を書いたほどである（1803年）。その後、ゲーテはシェリングと書簡を交わす仲となり、シェリングをイェナ大学の助教授として呼ぶことにした。シェリングがイェナ大学に就職できたのは、フィヒテの推薦とともに、ゲーテの推薦も大きな力となった。

シェリングがイェナに来てからも、ゲーテとの親交は続いた。シュレーゲル（兄）と妻カロリーネの離婚に力添えしたのもゲーテであり、それによってシェリングはカロリーネと結婚できた。ただ、学者のシュレーゲル（兄）をイェナ大学助教授として呼んだのもゲーテであり、シュレーゲル（兄）の妻だったカロリーネとシェリングが知り合って不倫関係になるきっかけを作ったのもゲーテだということになる。さらに、カロリーネが病死したあと、シェリングの妻となったパウリーネは、ゲーテの友人の娘であり、ゲーテが紹介したとも言われる。ゲーテはあらゆる人間関係に顔を出す。彼はいつも誰にでも口を出すいっちょかみである。一方のシェリングもゲーテに対する尊敬を示す。その芸術哲学の中で、代表的な芸術家をあげて、哲学と芸術の関係について論じているが、近代劇の芸術家としてゲーテの名前をあげている。

ヘーゲルは、イェナ大学に来るときはゲーテの推薦はなかったが、イェナ大学で私講師から助教授に昇格する時に、ゲーテの推薦を受けた。ヘーゲルをゲーテに紹介したのは、シェリングであった。ヘーゲルはゲーテに連絡し、ゲーテから推薦書を得ることができた。ヘーゲルが家政婦との不倫で生ませた庶子のルートヴィヒに対して、ゲーテは関心を持って不幸を慰めた。彼を「小ヘーゲル」と呼び、彼に詩を送り、慰めたという記録が残っている。後に、ベルリン大学教授となったヘーゲルは、1827年にワイマールのゲーテを訪ねた。

ゲーテはドイツ観念論哲学の影の仕掛け人

ワイマールの宰相であったゲーテが、ドイツを代表する学者たちが教授として招いたことにより、この頃のイェナはドイツの学芸の中心地となった。中でも、「ロマン主義」と呼ばれる美学運動がおこり、『アテネウム』という機関誌が発行された。ロマン主義の中心となったのは、シュレーゲル兄弟、ティーク、ノヴァーリス、シュライアマハーなどであり、シェリングもこのサークルの理論的指導者となった。彼らは、ゲーテの疾風怒濤期の作品から影響を受けて、主観性や感受性を重視し、それまでの理性偏重、合理主義に反対した。

フィヒテやシェリングをイェナに呼んだのもゲーテである。私講師だったヘーゲルが助教授に昇格したのもゲーテの力添えがあったからである。ドイツ観念論哲学のビッグ３がイェナ大学に来たのは、ゲーテと関わりがある。もし、ゲーテの推薦がなければ、３人がイェナ大学に在席したかどうかは疑わしい。３人はイェナ大学でドイツ観念論哲学を確立するわけだから、ドイツ観念論哲学の影の仕掛け人はゲーテであるといってもよいだろう。

Ｃ．在任中の特徴

表２－２Ｃ　徹底比較　イェナ大学時代の３人　　Ｃ．在任中の特徴

		共通点	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
Ｃ 在任中の特徴	大学での地位	助教授	助教授として採用	助教授として採用	私講師として採用され助教授に昇格
	在任期間	６～７年　短期間	1794～1799年 ６年間	1798～1803年 ６年間	1801～1807年 ７年間
	年齢	23～37歳の血気盛んな若手	32歳～37歳	23歳～28歳	31歳～37歳
	在任期間の重なり	重なりがあり、ここから連鎖と因果応報のドラマが発生	シェリングと２年	フィヒテと２年 ヘーゲルと３年	シェリングと３年
	在任中の行動と感情の特徴	師との戦いの援護で弟子を呼び、３代続くバトルロイヤルに	師カントとの戦いの援護でシェリングを呼び補強	師フィヒテとの戦いの援護でヘーゲルを呼び補強	師シェリングとの１対１の戦い
	在任中の哲学の業績	各自オリジナルな理論を完成。ドイツ観念論哲学が成立。哲学史を変えた13年間	カント哲学から出発し、オリジナルな自我哲学を完成	自我哲学から出発し、自然哲学を取り入れ、オリジナルな同一哲学を完成	第１の主著『精神現象学』完成。ヘーゲル観念論の基本的な発想が固まる

大学での地位
助教授

３人とも助教授となったことは共通する。
フィヒテは、助教授（員外教授 außerordentlichen Professor）として採用された。

シェリングも、助教授として採用された。
助教授というポストは、正教授ではなく、地位は不安定であるが、収入は安定している。

ヘーゲルは、はじめ私講師（Privatdozent）として採用され、後に助教授に昇格した。
私講師は、無俸給であり、大学からの給料が出るのではなく、学生の聴講料だけが収入源である。学生の聴講がなければ収入はゼロである。当時のイェナ大学には学生は30名ほどしかおらず、私講師は聴講する学生を奪い合った。ヘーゲルはお金に困ったようだ。それでも家庭教師に比べると安定したポストである。
当時のイェナ大学の哲学部は、教授３名、助教授２名、私講師７名という構成だった。私講師から助教授に昇格するのは狭き門である。
マックス・ウェーバーは、『職業としての学問』の中で次のように言っている。
ドイツでは、職業として学問に専心する人の経歴は、普通「私講師」から始まる。かれはその著述、または多くのばあいたんに形式的な試験にもとづいてその学部の教授団の選考および承認を経て、ある大学に就職する。そして無給で、すなわち学生からの受講料を受けるだけで講義をおこなう。このばあい、講義科目は一定の許された範囲内で、かれみずからが選定する。
マックス・ウェーバー（尾高邦雄訳）『職業としての学問』岩波文庫、1980.
ここからすると、当時は、ヘーゲルのように私講師から始まるのがふつうであり、フィヒテやシェリングのように、いきなり助教授から始まるのは例外的であった。それだけフィヒテとシェリングは、哲学者としての業績や評判が高かったということだろう。

在任期間
短期間

３人がイェナ大学に在任した期間は、６年～７年と短い。この短期間で、３人ともオリジナルな理論を完成させ、ドイツ観念論哲学が成立したことは驚異に値する。

フィヒテは、1794～1799年まで、６年間在任した。

シェリングは、1798～1803年まで、６年間で在任した。

ヘーゲルの在任期間は、1801～1807年までの７年間であった。

年齢

20代～30代の血気盛んな若手

３人とも、イェナ大学に在任した年齢は23～37歳であり、恐いもの知らずの血気盛んな若手の時期であった。

フィヒテは、32～37歳まで在任した。

シェリングは、23～28歳まで在任した。何と23歳で大学の助教授となり、28歳でイェナを去ったのであり、いかに早熟だったかがわかる。

ヘーゲルの在任期間は、31～37歳であった。
他のふたりも30歳になったばかりの青年である。

在任期間の重なりがある

３人ともイェナ大学に勤務した期間は６年～７年と短いにもかかわらず、別々の時期に在席したのではない。３人は重なって在席した期間がある。フィヒテとシェリングは２年間、シェリングとヘーゲルは３年間の重なりがある。この重なりの時期こそがポイントであり、このために３人の交互作用が起こり、打算と裏切りのダイナミクスが発生した。ここが面白い。
さらに、シェリングはフィヒテとヘーゲルの橋渡しをしており、要の位置にいる。ここに、連鎖と因果応報が生じて、哲学史上最も面白い人間ドラマが生れたわけである。

在任中の行動と感情の特徴
師との戦いの援護で弟子を呼び、３代続くバトルロイヤルに

３人とも、師との理論的な議論において、援護してもらうために弟子をイェナ大学に呼んだ。これによって、プロレスのバトルロイヤルのような乱戦になった（詳しくは第５章参照）。

フィヒテは、師カントの哲学の不統一を補って自我哲学を主張したが、自我哲学を支持してくれるシェリングの論文を読んで、大いに心強かっただろう。そして、理論的に援護してもらうために、弟子のシェリングをイェナ大学に呼んだ。師カントとの理論闘争において、弟子のシェリングを呼んで、共同戦線を張ろうとした。哲学上の業績は、23歳のシェリングのほうが、32歳のフィヒテよりも圧倒的に上であった。他の大学から声がかかることも予想され、シェリングを後継者として「青田買い」しておきたいというフィヒテの心理もあったかもしれない。

シェリングは、当時、師のフィヒテからの理論的な独立を遂げようとしており、その援護を必要としていた。その援護のために、ヘーゲルにイェナ大学に来ることを勧めた。当時は、シェリングが無名の若者（ヘーゲル）を故郷から連れてきて、「シェリングはすでにフィヒテを超えている」ことを宣伝させたのだといわれた。ヘーゲルから理論的支持を得て、いっしょにフィヒテを批判してくれることはありがたいことだっただろう。シェリングとヘーゲルの連携は成功した。

ヘーゲルは、師シェリングの同一哲学を批判して、弟子を呼ぶということはなく、１対１で対峙した。

在任中の哲学の業績
各自オリジナルな理論を完成　ドイツ観念論哲学が成立　哲学の歴史を変えた13年間

３人とも、イェナ大学に、みずからのオリジナルな哲学を確立した。哲学の生産性が最も高く、最も脂が乗っていた時期であった。イェナ時代に、３人のドイツ観念論哲学が成立したと言っても過言ではない。つまり、３人がイェナにいた13年間は、哲学の歴史を変えた13年間であったと言える。

フィヒテは、イェナ大学時代に、オリジナルな自我哲学を確立した。フィヒテによると、カントの『純粋理性批判』においては「理論理性」だけを扱い、『実践理性批判』においては「実践理性」だけを扱っており、この２つの理性はうまく統一されていない。フィヒテは、『全知識学の基礎』において、カントの「理性」を「自我」と置き換えて、フィヒテは「実践自我」と「理論自我」の関係を考えた。大元は能動的な「絶対的自我」である。絶対的自我から現れた「実践自我」は、「非我」を乗り越えようとする。しかし、乗り越えられなかったときに、「非我」を認識しようとして「理論自我」が現れる。こうしたダイナミックな動きとして実践自我と理性自我を統一的にとらえようとした。

シェリングは、イェナ時代には、同一哲学の考え方を完成していた。彼は、テュービンゲン大学時代から

早熟の天才であり、その時にはすでに、①フィヒテの自我哲学を自分のものとして取り入れていた。そして、②自然哲学、③汎神論、④自我哲学と自然哲学の同等性、⑤絶対者の哲学、⑥美的観念論という発展を辿って、⑦同一哲学を完成させたのである。同一哲学はヘーゲルから根本的な批判を受けて、イェナ大学以降、シェリングは啓示と神話の哲学に向かい、「後期思想」の時代にはいる。晩年には、同一哲学を捨て、積極哲学へと向かい、それは実存主義哲学の先駆となった。

ヘーゲルは、イェナ大学時代の30歳で、第１の主著『精神現象学』を完成させた。この本は、意識・自己意識・理性という３段階の構成をとる。人間が「意識」から始まって、挫折を通して、自己意識、理性という高い段階に進んでいく過程を示している。しかし、よく整理された内容ではなく、きわめて読みにくい本となった。その後、ニュルンベルク時代の第２の主著『論理学』、ハイデルベルク大学時代の第３の主著『哲学のエンチクロペディ』を出版し、高い評価を得ていくことになるが、ヘーゲルの観念論の基本的な発想はイェナ時代の『精神現象学』にあると言われている。３人の中でヘーゲルは最も晩熟である。

哲学的主張

ここで、３人の哲学的主張を要約しておこう。それぞれの哲学的主張については、第２部フィヒテ論、第３部シェリング論、第４部ヘーゲル論を参照いただきたい。
表２－３は、彼らの主張をダイジェストしておきたい。

表２－３　　ドイツ観念論のビッグ４の主張　　ダイジェスト

哲学者	主張	共通点
カント	形而上学の否定：「理論理性」が認識できるのは現象に限られ、形而上学（神学）の問いは学問ではない。 実践的理性：「実践理性」は、現象界ではなく、超感性界（信仰の世界、神）に属するので「自由」がある。実践理性にもとづいた普遍的な道徳を実現することが人間の使命である。	カントとフィヒテの共通点は、人間の理性的な実践を重んじる啓蒙主義的な立場
フィヒテ	絶対自我説：人間の基本にあるのは、能動的な「絶対的自我」である。絶対的自我から能動的な実践自我（カントの実践理性）があらわれる。そこから受動的な理論自我（カントの理論理性）が派生する。人は絶対的自我に到達すべく行為するべき。絶対自我は「神」であり、形而上学へ逆戻り。	フィヒテとシェリングの共通点は、絶対者＝神を重視する点
シェリング	汎神論：絶対的自我は「自我」だけではなくあらゆるものに遍在する。自我と自然に共通する「絶対的自我」とは「絶対者＝神」である 同一哲学：絶対者＝神は、あらゆるものの根底に常に変化せずに、同一的に無差別に存在する。	シェリングとヘーゲの共通点は、汎神論（神は自我だけではなく、あらゆるものに遍在する）
ヘーゲル	歴史の目的論的解釈：歴史とは神という絶対者がその本質をしだいに実現する過程である。これは人間の力でどうすることもできない法則である。 神の自己実現：神は人間という有限者を使って徐々に自己実現をはかる。これによって神の存在は少しずつ変化する。	

カントの哲学が出発点

カントは、1781年に『純粋理性批判』を発表して、形而上学を批判した。理論理性が認識できるのは「現象」（経験のおよぶ範囲）に限られるのであって、現象の背後にある超感性界（物自体、神の世界）については認識することはできない。このようにカントは理論理性の認識の限界を強調する。「神は存在するか」といった形而上学（神学）の問いは、答えの出ない問題であり、学問としては成立しないとした。
また、カントは1788年の『実践理性批判』においては、物自体つまり「神」などは、認識はできないが、実践理性が要請するものであるとした。つまり、実践理性は、現象界に属するものではなく、超感性界（すなわち信仰の世界、神）に属するので、「自由」がある。ここでは、「物自体」は「神」ということになる。実践理性にもとづいた普遍的な道徳があり、この道徳を実現することが人間の義務であるとした。
カント哲学は哲学に大きな影響を与えた。フィヒテ・シェリング・ヘーゲルをはじめ、当時の哲学者・神学者の多くはカントから出発している。

フィヒテの絶対自我

フィヒテはカント哲学の不統一を補おうとした。カントの『純粋理性批判』では「理論理性」だけを扱い、『実践理性批判』では「実践理性」だけを扱っており、この２つの理性は、片や受動的であり、片や能動的であり、うまく統一されていない。フィヒテは、『全知識学の基礎』において、カントの「理性」を「自我」と置き換えて、「実践自我」と「理論自我」の関係を考えた。人間の基本にあるのは、能動的な「絶対的自我」である。絶対的自我から現れた「実践自我」は、「非我」を乗り越えようとする。しかし、乗り越えられなかったときに、「非我」を認識しようとして「理論自我」が派生する。こうしたダイナミックな動きとして実践自我と理性自我を統一的にとらえようとした。
フィヒテは、人間は「絶対的自我」に到達するべく行為するべきであるとする。こうした実践理性的な考

え方はカントと同じである。つまり、カントとフィヒテの共通点は、人間の理性的な実践を重んじるという啓蒙主義的な立場である。
　しかし、フィヒテは、「絶対的自我」をしだいに「絶対者＝神」と捉えるようになった。せっかくカントが形而上学を哲学から追い出したのに、フィヒテはまた形而上学に逆戻りしてしまった。ここがカントとの違いである。

シェリングの汎神論と同一哲学

　シェリングは、もともとは①フィヒテの自我哲学から出発し、「絶対的自我」を重視していた。シェリングは、②自然哲学を取り入れて、フィヒテの哲学を補おうとした。その背景には、スピノザの③汎神論の影響があり、④自我哲学と自然哲学の同等性の立場に行き着いた。これにより、人間と自然に共通する「絶対的自我」とは、「絶対者＝神」であると考えるようになり、⑤絶対者の哲学へと導かれたのである。さらに、⑥美的観念論（芸術哲学）をへて、⑦同一哲学を完成させた。ここでは、自我と非我、主観と客観といった対立の根底に「絶対者」を考える。絶対者は、精神や自然の根底にある共通的なものであり、絶対的な同一性である。絶対者は、常に変化せずに、同一的に無差別に存在する。このために「同一哲学」と呼ばれる。絶対的な無差別としての絶対者は、唯一であり、無限でなければならず、絶対者のほかには何ものも存在しない。
　フィヒテの自我哲学とシェリングの同一哲学の共通点は、「絶対的自我」を重視し、その根底に「絶対者＝神」を想定する点である。シェリングも、せっかくカントが形而上学を哲学から追い出したのに、また形而上学に逆戻りしてしまった。
　シェリングは、フィヒテから始まったが、フィヒテとは違った結論に達した。フィヒテが「自我がすべてである」としたのに対して、シェリングは「すべてが自我である」と考えるようになった。フィヒテは、絶対者＝神は「自我」であるとして、絶対的自我の実現をめざして主体的に行為すべきだとした。これに対し、シェリングによると、絶対者＝神は「自我」だけにあるのではなく、あらゆるものに遍在する（汎神論）。だから、絶対者＝神は、フィヒテのように到達すべき目標ではなくなり、芸術によって直観すべきものとなる（美的観念論）。

ヘーゲルの目的論的解釈と神の自己実現

　ヘーゲルは、はじめシェリングに同調した。シェリングとヘーゲの共通点は、汎神論（神は「自我」だけにあるもののではなく、あらゆるものに遍在するという考え方）である。
　しかし、イェナ時代にヘーゲルはシェリングとの違いに気がつくようになった。ヘーゲルの「歴史の目的論的解釈」では、歴史とは「神」がその本質をしだいに実現する過程である。神はしだいに自己を展開していくものである。ヘーゲルの神は、シェリングの神のように常に変化せずに自己同一的に存在するのではない。ヘーゲルの神は、歴史を通じて、動的にみずから展開していくものである。
　ヘーゲルは、フィヒテの絶対自我説と、シェリングの同一哲学と格闘して、それらを乗り越え、神の自己実現という目的論的解釈に行き着いた。
　ヘーゲルがドイツ観念論の道筋（ストーリー）を作った。
　しかし、現代からみると、シェリングのフィヒテ批判や、ヘーゲルのシェリング批判について、あまり大した対立ではないように感じる。「神」とはどういうものかという点にかかわるので、言葉の違いにすぎず、どちらが正しいか決着がつくわけではない。フィヒテは神は自我であるといい、シェリングは神はあらゆるものに存在するといい、ヘーゲルは神は人間を使って自己実現するという。それぞれ言い方が違うだけで、結局は同じく「神」のスペキュレーションをしているにすぎない。ちょうどＳＦとかファンタジーのようなものである。ストーリーは作者が勝手に決められる。誰が正しくとも、実生活上では何の違いもない。誰が正しいかは決められないので、何もお互いを批判する必要もない。誰が正しいか決められないので、互いに「自分が正しい、相手が間違い」と罵り合うしかないのかもしれない。互いに傷つけ合うだけの結果となる。

Ｄ．師との関係

表２－２Ｄ　徹底比較　イェナ大学時代の３人　　Ｄ．師弟関係

		共通点	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
Ｄ 師弟関係	師との関係・師への感情	師への恩を忘れ手の平返し。師へのライバル心。師への批判・攻撃・裏切り。無視と侮蔑。【師弟関係　第３位相】	師カントの哲学の不統一を統一したと豪語。カント哲学を補ったというプライド	師フィヒテへの手のひら返し。フィヒテとの闘争心。後に無視。フィヒテを批判（裏切り）	師シェリングへの手のひら返し。著書でシェリングを罵倒（裏切り）。師への侮蔑と無視
	弟子との関係・弟子への感情	弟子からの屈辱。憎しみと非難。弟子を破門し絶交【師弟関係　第４位相】	弟子シェリングを非難し反批判。弟子を破門し絶交	弟子ヘーゲルを非難し反批判。弟子を破門し絶交	（該当なし）

師との関係・師への感情
弟子から師への裏切り　【師弟関係　第３位相】

３人とも、大学に呼んでくれた師への恩を忘れて、 手の平を返したように、師に冷たくなった。 師へのライバル心をむき出しにして、師を踏み台にして、自分の哲学をアピールした。師を批判したり攻撃したり、無視したり、侮蔑したり、結果的に師を裏切ることになった。これは、哲学史では、「弟子が師の理論を批判することでオリジナルな理論が発展する」という学問のタテマエで片づけられてきた。しかし、人間としては、最も理解しにくい闇の部分である。

弟子のフィヒテは、師カントの哲学には不統一があるとして、オリジナルな自我哲学を確立し、恩人であるカントの哲学から逸脱して行った。フィヒテのいう「絶対的自我」には二面性がある。フィヒテによると、「絶対的自我」は、カントのいう「超越論的統覚」のことだという。この意味では、確かにフィヒテはカント哲学の範囲内にある。ところが、フィヒテは、カント流に「神」を退けながらも、実は、裏では「神」を取り入れていた。この意味では、フィヒテはカント哲学を逸脱しているのである。せっかくカントが「神」学を哲学から切り離したのに、フィヒテは逆戻りしてしまった。実際、フィヒテの後期思想においては、自我哲学は捨てられ、「神＝絶対者」の哲学をとなえるようになる。ここにはカントへのライバル心と、カント哲学を補ったというプライドがある。ある意味では、フィヒテはカント哲学を踏み台にして、みずからの自我哲学をアピールしたとも言える。

弟子のシェリングは、師フィヒテを批判した。シェリングは、フィヒテがイェナから去ると、手のひらを返すように、フィヒテに冷たくなった。イェナ大学の教員になるという目的を果たしてしまえば、フィヒテに媚びる必要もなくなった。さらに、シェリングは、1806年に「改良されたフィヒテの学説に関する自然哲学の真の関係の明示」を発表して、名指しでフィヒテを批判した。ふたりの文通は1801年をもって終わった。シェリングは、対話篇『ブルーノ』（1802年）などの著作で暗にフィヒテを批判した。そして、1806年、シェリングは、『改良されたフィヒテ説の自然哲学に対する真の関係についての説明』を書いて、フィヒテとの決裂を公然と表明した。師への恩を忘れて、師を踏み台にして、師を批判した。

弟子のヘーゲルは、師シェリングを批判し、裏切った。ヘーゲルも、シェリングがイェナから去ると、手のひらを返して、シェリングに冷たくなった。イェナ大学の教員になるという目的を果たした後は、シェリングに媚びる必要もなくなった。それに、５歳年下のシェリングに弟子扱いされるのはプライドが許さない。そして、ヘーゲルは『精神現象学』の序文において、シェリングを罵倒した。師への恩を忘れて、師を踏み台にして、師を批判した。その後は、シェリングに対する侮蔑と無視が続いた。しかも、ヘーゲルは、イェナに来る前から、すでに内心ではシェリングを支持していなったようだ。ヘーゲルがシェリングを乗り越える過程は、実はイェナの前の時代に終わっていた。つまり、大学のポストを得るという打算のために、シェリングを支持するフリをしていたことになる。師シェリングへの尊敬はとっくに消え去り、イェナ大学に就職するためにシェリングに取り入るという打算だけが残っていた。シェリングに手の平返しをして裏切ったのも当然だったかもしれない。まさに打算と裏切りの過程である。もしそうなら、ヘーゲルは、３人のうちで最も悪質であるともいえるかもしれない。

この段階は、師弟関係の第３位相に当たり、これについては後述する。

弟子との関係・弟子への感情
師から弟子への破門　【師弟関係　第４位相】

３人とも、裏切った弟子に対しては、飼い犬に手を咬まれたような屈辱を感じ、強い憎しみを持ち、非難した。ついには、弟子を破門し、絶交に至る。３人とも、絶交後は、どちらかが死ぬまで口もきかない関係

となったのである。

師カントは、弟子のフィヒテに対し、非難し反批判を加えた。すでに大哲学者として尊敬されていた75歳のカントにとって、自分より38歳も年下のフィヒテから、カントの哲学の矛盾を批判され、しかもそれを統一したと豪語されることは、許されざる逸脱であっただろう。フィヒテは、カント哲学の「実践自我」と「理論自我」は矛盾すると批判するが、そもそも、カントにとってはそれらは矛盾ではない。自分の哲学の後継者として期待したフィヒテが、カントの哲学を逸脱したことは、飼い犬に手をかまれたといった反発を覚えただろう。1799年にカントはフィヒテを批判し、これ以後、1804年にカントが死ぬまで、ふたりが交流することはなかった。実質的に、カントはフィヒテを破門したことになる。

師フィヒテは、弟子シェリングに対し、非難し、反批判を加えた。フィヒテはシェリングの『超越論的観念論の体系』を読んで、飼い犬に手をかまれたという反感を持った。始めは手紙で説得しようとしたが、うまくいかなかった。はじめのうちは説得しようとしたが、しだいに論難するようになり、ついには非難した。互いの理論を批判する戦いが続いた。1802年１月にふたりの文通は終わった。フィヒテは弟子のシェリングを破門したことになる。ふたりは絶交し、以後、1814年にフィヒテが亡くなるまで、ふたりが交流することはなかった。この続きは、後半のベルリン大学へと持ち越しとなる。

師シェリングは、弟子ヘーゲルに対し、非難し、反批判を加えた。シェリングは、ヘーゲルが『精神現象学』においてシェリングを罵倒しているのを読んで、目を疑った。飼い犬に手を咬まれるようなショックだったろう。すぐにシェリングはヘーゲルに不満の手紙を書き、それによって２人の師弟関係は終わった。実質上の破門であり、絶交を言い渡したことになる。シェリングは一生ヘーゲルを恨んだ。この後、弟子ヘーゲルに対する師シェリングの反批判（積極哲学）は、死者のカラダにムチ打つ激しい憎しみにみちたものとなるが、この続きは、後半のベルリン大学に持ち越しとなる。

この段階は、師弟関係の第４位相に当たり、これについては後述する。

打算と裏切りの連鎖　因果応報性

面白いのは、３組が全く同じ打算と裏切りの師弟関係パタンを繰り返したことである。彼らは全く学習しない。経験に学ばずに、同じ泥沼を繰り返したのである。自分が加害者として裏切り、後に同じ手口で後で裏切られ、被害者になる。因果応報というか、天に向かって吐いた唾が、自分の顔に落ちてくるような関係である。この連鎖が信じられないところである。

Ｅ．対人関係

表２－２Ｅ　徹底比較　イェナ大学時代の３人　　E. 対人関係

		共通点	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
E 対人関係	対人トラブル	いくつかトラブルをかかえた	講義をめぐるトラブル、学生組合との対立、無神論論争	地元の新聞社の記事をめぐるトラブル	出版社との契約をめぐる小さなトラブル
	女性問題・家庭生活	恋愛がスキャンダルに発展することも	結婚し息子が生まれ、落ちついた生活	不倫スキャンダル。不倫相手の娘の死のスキャンダル	家政婦に手をつけ子も生まれるが母子を放置し逃げ婚約不履行

対人トラブル
いくつかトラブルをかかえた

３人とも、イェナ時代にはいくつか対人的・社会的なトラブルを抱えた。

フィヒテは、いろいろなトラブルをおこした。①礼拝の時間とされる日曜日に講義をおこなったため大学評議会と対立した。②粗暴な学生組合を解散させようとして、３つの学生団体と対立し、フィヒテの家が襲われた。③「無神論者」として誹謗され、自分から大学を辞めた。受動的に何かのトラブルに巻き込まれたといったものではなく、自己主張を貫く強いパーソナリティが周囲から反発を買ったものであった。
シェリングは、次に述べるように、同僚の妻カロリーネと不倫関係となったが、妻の娘アウグステの死について主治医とトラブルがおこった。また、イェナの『文学新聞』にシェリングの著書を批判する記事が載り、抗議したシェリングと編集部の間で感情的な対立となった。これがエスカレートし、アウグステの死についてシェリングとを誹謗する匿名のパンフレットが出されることになった。シェリングは反論することができなかった。
ヘーゲルは、『精神現象学』の原稿を書くという契約を結んだが、なかなか書かなかったので、出版社から契約を打ち切られそうになったが、友人のニートハンマーが間に入ってくれて何とか収まった。これは、上のふたりに比べるとそれほど大きなトラブルではないが、イェナ時代のヘーゲルの深刻なトラブルは、次に述べる家政婦との不倫スキャンダルであった。

女性問題・家庭生活
恋愛がスキャンダルに発展することも

３人とも、20～30代の血気盛んな若者だったので、女性問題もおこった。とくに、シェリングとヘーゲルはスキャンダルに発展した。

フィヒテは、チューリッヒ時代に、ラーン家に出入りし、娘ヨハンナ・ラーンと知り合って、婚約した。フィヒテが26歳、ヨハンナは７歳年上だった。その後、ヨハンナに結婚を希望を伝えたが、ラーン家の経営危機で延期されてしまった。やっと結婚できたのは、イェナ大学に就職する前年であった。イェナ大学につとめて３年後にひとり息子が生まれた。フィヒテは、女性関係はまじめで、ひとりの女性ヨアンナと添い遂げた。
シェリングは、イェナ大学の助教授シュレーゲル（兄）の妻だったカロリーネと不倫関係となり、スキャンダルとなった。ロマン主義の雰囲気では、不倫や離婚などは当然のこととされた。さらに、カロリーネが温泉で療養中に、16歳の娘アウグステが赤痢で急死した。その時、シェリングはカロリーネとともに、この温泉でアウグステの死を看取ったため、ふたりの不倫は明らかになってしまった。さらに、シェリングがアウグステに処方された薬を批判したために、医師とのトラブルをおこした。シェリングの学者としての信用に関わる不用意な行為であった。
ヘーゲルは、イェナ時代に、下宿先の家政婦だったブルクハルト夫人と性的な関係を持った。当時、彼女は夫に捨てられていたが、離婚していたわけではない。ヘーゲルは、夫が死んだら正式に結婚しようと約束していた。ブルクハルト夫人はヘーゲルの子を産み、ルートヴィヒと名づけられた。ヘーゲルは母子とともに住んでいたので、スキャンダルがイェナで噂になった。ヘーゲルは、スキャンダルに困り、何と、イェナを逃げ出したのである。婚約不履行であり、母子を置き去りにして放置したのは虐待である。かなり悪質な行為である。

Ｆ．大学を去る

表２－２Ｆ　　徹底比較　イェナ大学時代の３人　　Ｆ．大学を去る

		共通点	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
Ｆ 大学を去る	大学を去るきっかけ	スキャンダルを巻き起こしてイェナ大学を去る	無神論者との誹謗に対して、辞表を提出して受理された	トラブルとスキャンダルでイェナにいられなくなった	不倫スキャンダルによる。ナポレオンのイェナ侵入は口実
	大学を出た時のポスト	教授になれず、助教授で大学を去る	助教授	助教授	助教授
	大学を去った後	一時的に大学の外へ出て、ベルリン大学教授に返り咲く	大学のないベルリンで無職生活。講演で生活費をかせぐ。	ヴュルツブルク大後、大学を辞め「沈黙の時代」へ	バンベルクで新聞記者になり、その後高校校長へ

大学を去るきっかけ
スキャンダルを巻き起こしてイェナ大学を去る

３人とも、大きなスキャンダルを巻き起こして、それがイェナ大学を去るきっかけとなった。ドイツ観念論哲学のビッグ３がイェナ大学を去った理由は、意外にも、学問的な理由というよりは、対人関係や下半身のスキャンダルであったのも面白い。

フィヒテがイェナ大学を去る直接のきっかけとなったのは、有名な「無神論論争」である。フィヒテの弟子のフォールベルクが、無神論の論文を哲学雑誌に発表しようとした。フィヒテは、この論文を読んで、無神論だと感じたので、論旨を和らげるため、別の論文を書いた。その中で、フィヒテは、多くの点ではフォールベルクと同感だが、多くの点では反対だ、と書いた。しかし、匿名の攻撃文書によって、この前半の部分が強調されて、フィヒテは無神論者だと誹謗された。政府は穏便に処理しようとしたのだが、フィヒテは黙っておらず、「もし私を罷免するならば、私は大学を辞めるが、大学の同僚たちもいっしょに辞めるだろう」と宣言したのである。フィヒテがあまりに硬直的だったので、ついに大学評議会は、フィヒテの辞職を認めざるをえなくなった。こうして、37歳のフィヒテは、イェナ大学を追い出されたのである。

シェリングは、カロリーナとの不倫スキャンダルと、カロリーネの娘アウグステの死のスキャンダルを引き起こし、周囲から非難された。さらに、イェナの『文学新聞』にシェリングの著書を批判する記事で編集部と対立し、エスカレートし、アウグステの死についてシェリングとを誹謗する匿名のパンフレットが出されることになった。こうした数々のスキャンダルによって、シェリングはイェナにいられなくなった。

ヘーゲルは、家政婦との不倫関係で子も生まれ、そのスキャンダルでイェナにいられなくなった。ハイデルベルク大学のポストを打診したが、うまくいかなかった。ちょうどその時に、ナポレオン軍が侵入し、イェナを占領したのである。一部には、「ナポレオン軍によってイェナ大学が封鎖されたために、大学で教えることができなくなったのでヘーゲルはイェナ大学を出た」のように書かれているものもあるが、実際にはイェナ大学は封鎖されたわけではなく、ナポレオンが去ってすぐ大学は再開したはずである。ナポレオンは口実にすぎない。ヘーゲルはやむをえずイェナを去ったのではなくて、みずから進んでバンベルクへ行ったのである。ヘーゲルがイェナ大学を去った理由は、母子とのスキャンダルから逃げ出したかったためである。ナポレオンという良い口実ができて、これ幸いとばかりに、母子を置き去りにして、夫人との婚約を破棄して、逃げだした。ナポレオンが侵入しなくても、ヘーゲルは遅かれ早かれ、イェナを逃げ出していたに違いない。つまり、イェナに侵略して逃亡の口実を与えてくれたナポレオンは、ヘーゲルにとって、逆の意味で、恩人であったとも言える。

大学を出た時のポスト
教授になれず、助教授で大学を去る

３人とも助教授で大学を去る。つまり、教授になれずにイェナを去ったことになる。教授に昇格する前に、早々と、別の理由でイェナ大学を出てしまった。

フィヒテは、無神論論争によって、教授に昇格する前に、早々とイェナ大学を追い出されてしまった。フィヒテの講義は、学生から人気があったと言われるが、教授にはなれなかった。大学での昇格は、学生からの人気とは無関係なのがふつうである。

シェリングは、カロリーネとのスキャンダルのために、イェナ大学で教授に昇格することは難しかっただろう。そこで、ヴュルツブルク大学から教授ポストとして呼ばれた時に、これに飛びついた。ヴュルツブル

クにおいて、カロリーネは夫のシュレーゲル（兄）と離婚が成立し、シェリングはカロリーネと結婚した。ところが、６年後、カロリーネは赤痢にかかって亡くなった。

シェリングがイェナ大学の教授となったと書いてある本（岩崎、1967、24頁）や、シェリングが「フィヒテの後任としてイェナ大学の教授の地位についた」と書いてある本（澤田､2015、192頁）があるが、シェリングの経歴を調べても、イェナ大学で教授に昇格した事実はない。

ヘーゲルは、家政婦とのスキャンダルのために、イェナ大学で教授に昇格することは難しかっただろう。ハイデルベルク大学のポストを打診したが、うまくいかなかった。ちょうどその時に、ナポレオン軍がイェナを占領したので、これを口実にイェナを逃げ出した。大学で静かに研究し主著『精神現象学』も完成して順調だった助教授が、その地位をあっさり投げ出し、何の経験もない新聞記者になるというのは、いかにも唐突であり、よほど切羽つまった事情があったわけである。それだけヘーゲルの行為は不道徳であり、スキャンダルも強力なものだった。

大学を去った後
一時的に大学の外へ出て、ベルリン大学教授に返り咲く

３人とも、イェナを出た後は、一時的に大学の外に出た。３人とも、ある意味では大学をはみ出した人格だったとも言える。とはいえ、３人とも、何年後かには大学に戻り、ベルリン大学教授として返り咲くことになる。

フィヒテは、37歳でイェナ大学を追い出され、ベルリンに行き、無職の生活に戻ってしまった。ベルリンに就職の当てがあったわけではない。フィヒテを罷免したザクセン政府やワイマール政府に比べると、プロイセンの政府がフィヒテに好意的だったからと言われる。無神論者というレッテルを貼られたフィヒテは、ベルリンでも、はじめのうち当局の監視のもとに置かれたが、後にベルリン滞在を許可された。当時、ベルリンには大学がなかったので、哲学者たちは、自宅で、社会人を相手に有料の講義をして生活をしていた。フィヒテもそうしてお金を稼いだ。有名な講演『ドイツ国民に告ぐ』もそうした講義のひとつである。

シェリングは、３年間ヴュルツブルク大学で教えたが、その後、ミュンヘンに行き、大学をやめて、文化行政に携わった。当時、ミュンヘンには大学がなかった。それ以降、シェリングは亡くなるまで、著書を発表しなくなった。これ以降のシェリングは「沈黙の時代」と呼ばれる。これによって、シェリングは哲学の第一線を退き、哲学界から一時忘れられた。「沈黙の時代」に入った最大の理由は、やはり大学を離れたことであろう。15歳で大学に入り、ずっと大学ですごしてきた根っからの大学人であるシェリングは、大学で、若い学生を前に講義をしてこそ学問の能力を発揮できたのである。だから、大学を離れてしまうと、学問の生産性が低下したのは当然である。大学こそ学問の創造を生む場であるという当然のことが、シェリングの「沈黙の時代」から、逆に証明される。

ヘーゲルは、家政婦とのスキャンダルから逃げて、イェナ大学を逃げだし、バンベルクに落ち延びて、新聞記者で糊口を凌ぐ。２年間バンベルグに隠れ、ほとぼりが冷め、噂が消えるのを待って、教職（高等学校の校長）に戻った。イェナ逃亡から４年後、ヘーゲルは、スキャンダルを隠して、20歳年下の良家の娘マリー・トゥヘルと結婚した。そして、３人の子供をさずかり、落ちついた家庭生活を送った。これに対し、ヘーゲルに捨てられたブルクハルト夫人は一人寂しく若死にした。ヘーゲルの隠し子は、あちこち転々とし、海外で亡くなった。ヘーゲルは、本論で登場する学者の中で、一番のワルである。これについては、第４部『ブラックヘーゲル入門』を参照いただきたい。

第３章　裏切りと打算の師弟関係

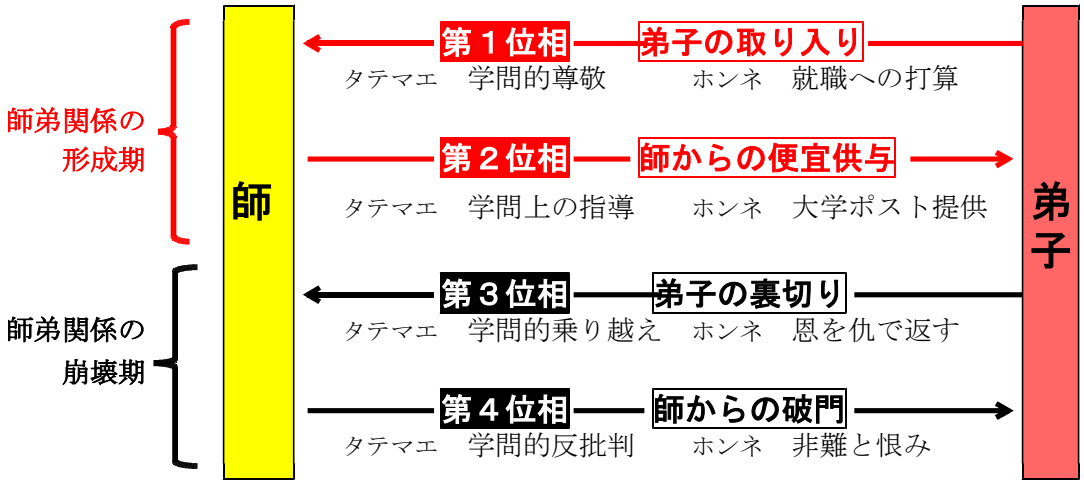
３人のイェナ大学時代の行動は、多くが師弟関係にかかわっており、それが人間ドラマを生んだ。
上にあげた表２－２から、師弟関係の４つの位相の部分を抜き出すと、次の表３－１になる。

表３－１　徹底比較　イェナ大学時代の３人　　師弟関係

		共通点	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
師弟関係	【第１位相】弟子の取入り	師への尊敬と取り入り	師カントへの傾倒。カントに会いに行き学者人生開ける	師フィヒテへの傾倒。師の継承者であるとアピール	年下シェリングの「弟子」と自称。師シェリングへの取り入り。
	【第２位相】師からの便宜供与	師からの人事推薦などの便宜供与	師カントからの間接的後押し	師フィヒテからの強力な推薦	師シェリングからの強力な推薦
	【第３位相】弟子の裏切り	師への恩を忘れ手の平返し。師へのライバル心。師への批判・攻撃・裏切り。無視と侮蔑。	師カントの哲学の不統一を統一したと豪語。カント哲学を補ったというプライド	師フィヒテへの手のひら返し。フィヒテとの闘争心。後に無視。フィヒテを批判（裏切り）	師シェリングへの手のひら返し。著書でシェリングを罵倒（裏切り）。師への侮蔑と無視
	【第４位相】師からの破門	弟子からの屈辱。憎しみと非難。弟子を破門し絶交	弟子フィヒテを非難し反批判。弟子を破門し絶交	弟子ヘーゲルを非難し反批判。弟子を破門し絶交	（該当なし）

また、前述の図２－１、図２－２、図２－３を見ると、３組とも全く同じ構造をしていることがわかる。そこで、３組の共通点を抜き出してみると、下の図３－１のようになる。

図３－１　カント・フィヒテ・シェリング・ヘーゲル間の師弟関係の形成と崩壊



以下、この図３－１にしたがって、詳しく見ていこう。
まず、師弟関係の形成期がある。第１位相は、「弟子から師への取り入り」であり、第２位相は、「師からの便宜供与」である。
そして、師弟関係が崩壊する時期がくる。第３位相は、「弟子による師への裏切り」であり、第４位相は、「師から弟子への破門」である。
それぞれの位相において、「タテマエ」と「ホンネ」という２つの側面に分けて描いた。
「タテマエ」とは、学問上の理論の関係である。哲学史の教科書では、師弟関係は純粋に学問上の進歩として美談風に描かれる。
「ホンネ」とは、感情面での人間関係である。人間関係という面からみると、師弟関係の裏には、打算的なホンネの感情がある。扱う方法は心理学ということになる。これまでこうした試みは少なく、未開拓であった（表０－１を参照）。
以下では、とくに心理学からの「ホンネ」の側面を中心として描き出してみたい。こうしたホンネの部分は、哲学研究という観点からは見えてこない。それによって、師弟関係の二面性を明らかにしてみたい。

師弟関係の形成期

第１位相（師←弟子）　弟子の取り入り

タテマエ（哲学）　学問的尊敬
　３組とも、アピールしたのは弟子の方からである。弟子は、師の著書を読んだり講義を聴いて、師の哲学に純粋に感動した。カントもフィヒテもシェリングも、当時のヨーロッパ哲学の最高峰であり、感動したのも当然であろう。弟子はすぐに師の哲学を支持する論文を書いて、師に送った。弟子として理論的に支持し、師の哲学を発展させたいという尊敬心があった。

弟子フィヒテ→師カント
　始まりは、1791年、29歳のフィヒテが、ライプツィヒからわざわざケーニヒスベルク大学のカントを尋ねたことにある。フィヒテはカントの著作を読んで感動し、学者として尊敬していることを示した。しかし、はじめは無名のフィヒテは相手にされなかった。そこでケーニヒスベルクに滞在して論文『あらゆる啓示の批判の試み』を５週間で書きあげた。これをカントに見てもらい、カントの後継者たることをアピールした。フィヒテの論文を読んだカントはフィヒテの実力を認めた。

弟子シェリング→師フィヒテ
　始まりは、1794年、シェリングが、テュービンゲン大学において、フィヒテの講演を聴いたことにある。19歳のシェリングは、フィヒテの講演を聴きまた著作を読んで感動し、「哲学一般の形式の可能性について」という論文を書いて、フィヒテに送った。学者としての尊敬を示し、フィヒテ理論を支持し、フィヒテの後継者たることをアピールした。ちょうど、４年前の1791年、29歳のフィヒテがカントに対しておこなったのと同じアピールを、今度はフィヒテがシェリングから受けたわけである。また、著書『哲学の原理としての自我について』を出版し、フィヒテの学説を的確に解説し、フィヒテの後継者たることをアピールした。この著作によってシェリングはドイツ観念論の哲学者として世に認められた。

弟子ヘーゲル→師シェリング
　ヘーゲルは、テュービンゲン大学で同級だった時から、早熟のシェリングの哲学の才能を尊敬していた。ヘーゲルは、５歳も年下のシェリングに対して、みずからを「シェリングの弟子」と呼んでいた。シェリングに呼ばれてイェナに行ったヘーゲルは、『フィヒテとシェリングの哲学大系の相違』（1801年）という論文を書いて、フィヒテを批判し、それによってシェリングを支持した。

ホンネ（心理）　就職への打算
　しかし、師弟関係は美しい面ばかりではない。一方で、打算も働いただろう。弟子は師に近づき、師弟関係を利用して、哲学界に地位を占めたいと思う。野心の強い若者であれば当然のことである。さらには、それによって、大学に就職したい、就職先を確保したいという打算が働く。ポストについてしまえば、もうこちらのものだ。師を尊敬するフリをしたり従順でいる必要もなくなる。

弟子フィヒテ→師カント
　当時のフィヒテは、結婚したばかりで、家庭教師の口もなく、無職で困っていた。ワルシャワやチューリヒへに行くときも、歩いて行かなければならないほど、お金がなかった。そこで、フィヒテはカントに借金を申し込んだほどである。大学のポストへの就職は喉から手が出るほど欲しかった。フィヒテの猛烈な売り込みによって、カントから著書の出版先や家庭教師先を紹介してもらうことができた。それまで全く大学で教えた経験のなかったフィヒテが、イェナ大学に就職することができたのは、カントのおかげである。もしイェナ大学の就職が決まらなければ、フィヒテは路頭に迷っていただろう。

弟子シェリング→師フィヒテ
　シェリングは、家庭教師をしながら大学の教員となることを望んでいた。イェナ大学のフィヒテから呼ばれたが、もし呼ばれなくても、シェリングは他の大学にいくらでも就職できただろう。シェリングはプライドが高く、フィヒテと対等に振る舞ったようだ。

弟子ヘーゲル→師シェリング
　ヘーゲルは、イェナ大学に来る前はフランクフルトで家庭教師をしていた。1799年、父の遺産を相続したヘーゲルは、哲学で身を立てようとしたが、哲学の業績があるわけでもなく、大学のコネがあるわけでもなかった。ヘーゲルにとって、昔の同級生シェリングのコネだけが頼りだった。ヘーゲルは、大学への就職を依頼する手紙をシェリングに書いた。29歳のヘーゲルのほうから、24歳のシェリングに強くアピールしたのである。ヘーゲルは、３人のうちで就職の打算が最も強かっただろう。みずからを「シェリングの弟子」と呼んだのは、別の面から見ると、無名のヘーゲルが、助教授シェリングに取り入ってゴマをすり、その力を借りて、イェナ大学に就職したいという打算からだった。その作戦は見事にうまくいった。

第２位相（師→弟子）　師からの便宜供与

タテマエ（哲学）　学問上の指導
師弟関係は相互的・互恵的である。師は、その弟子の学問的才能を見抜き、自分の後継者として育てようとした。学問の発展のために、弟子を指導し、学問のノウハウを伝達する。これは学者として当然である。

師カント→弟子フィヒテ
カントとフィヒテの利益は双方向的である。フィヒテがやってきたとき、カントは67歳、ケーニヒスベルク大学の教授であり、すでに哲学上の弟子はたくさんいた。とはいえ、フィヒテに対して、哲学上の実力を認め、自分の哲学の継承者のひとりを見いだしたという師弟関係を感じ取ったので、いろいろな援助を与えたのだろう。

師フィヒテ→弟子シェリング
フィヒテは、シェリングの著書を読んで、「シェリングの本は､私の本の注釈書です。私の本よりも明快だ」と述べている。フィヒテはシェリングを自分の後継者とみなした。フィヒテはシェリングに手紙を書いて指導し、２人の間に長期間の往復書簡が始まった。フィヒテは、はじめ、シェリングと協力して、カント哲学の不統一を補おうという目論見もあったかもしれない（ちょうど、のちにシェリングがヘーゲルと組んでフィヒテ哲学を乗り越えようとしたように）。

師シェリング→弟子ヘーゲル
シェリングは、ヘーゲルとともに「哲学批判雑誌」という雑誌を出した。この雑誌は、シェリングとヘーゲルだけが執筆者であり、同人誌のようなものである。発表された論文には、署名がなかった。このように、シェリングは、ヘーゲルを弟子として指導した。

ホンネ（心理）　大学ポスト提供
また、師も、弟子に対して、打算的な感情を持っていたことは明らかである。師の学問の後継者となることを期待して、いろいろな便宜供与をはかる。弟子に大学のポストを与えた。それによって、弟子は師に対していわゆる「学恩」を感じる。
「学恩」とは、今では死語となったが、育ててもらった師への「恩」のことで、弟子はその「恩返し」のために師に対して従順になる。これはしばしば行き過ぎることがある。大学のポストが実力で評価されなくなり、学閥が発生する。師が弟子に「学恩」を与えた分だけ、弟子からの「恩返し」を期待するようになる。従順でない弟子や、師の説を逸脱する弟子に対するアカデミック・ハラスメントがおこる。

師カント→弟子フィヒテ
カントは、わざわざ遠くケーニヒスベルクまで会いに来てくれるほど尊敬されたことを喜んだであろう。フィヒテに対して、後継者となることを期待して、好意を持った。借金の申しこみは断わったものの、家庭教師先を紹介した。また、カントは出版社を紹介した。このために、フィヒテは著書『あらゆる啓示の批判の試み』を出版することができた。しかも、この本は、匿名で出版されたので、カントの著書だと誤解され、それによって逆にフィヒテの名声が上がった（こうしたトリックを仕掛けたのもカントである）。この本の名声によってゲーテなども推薦してくれて、フィヒテはイェナ大学に呼ばれた。カントがフィヒテに対して、直接的にケーニヒスベルク大学のポストを用意したわけではないが、間接的には、カントがイェナ大学のポストに近づけたことになる。イェナ大学にフィヒテが就職したことで、他の大学ではあるが、カントは大学人としての哲学上のひとりの弟子を持ったことになる。実際のところ、カントが1804年に亡くなって３年後の1807年には、フィヒテはケーニヒスベルク大学の教授となった。フィヒテはついに、師であるカントの大学の後継者となることができた。さらに、結果的に言うなら、哲学史の大きな流れにおいては、カントを継承したフィヒテたちがドイツ観念論哲学をたちあげたために、カント哲学がその重要性を増したことも事実であろう。

師フィヒテ→弟子シェリング
フィヒテは、シェリングから尊敬を受けたことを喜び、シェリングに対していろいろな援助を与えた。シェリングを後継者とみなして、イェナ大学の助教授として呼んだ。フィヒテの時と同じく、ゲーテの推薦もあった。フィヒテは、はじめシェリングといっしょに講義もおこなったほどである。イェナ大学に就職した時点での哲学上の業績は、23歳のシェリングのほうが、32歳のフィヒテよりも圧倒的に上であった。他の大学から声がかかることも予想され、シェリングを後継者として「青田買い」しておきたいというフィヒテの心理もあったかもしれない。ただ、23歳で大学助教授として呼ばれたシェリングの利益も大きく、得た利益は五分五分だったといえるだろう。別の言い方をすれば、相互の打算のうえに成り立っていた。

師シェリング→弟子ヘーゲル
シェリングは、年上のヘーゲルから「シェリングの弟子」と呼ばれて喜んだだろう。シェリングはヘーゲ

ルに対してきわめて多大な援助を与えた。ヘーゲルに教授資格を取らせ、イェナ大学の私講師のポストにつけた。ほかにも、①前述の雑誌「哲学批判雑誌」に５本の論文を発表し、ヘーゲルは研究業績を作ることができた。②イェナ大学でシェリングと共同で演習を出させてもらった（無名だったヘーゲルがシェナ大学で聴講学生を集めることができたのはシェリングのおかけである）。③ヘーゲルをイェナの学芸サークルに紹介した。④ヘーゲルは後に、ゲーテの推薦によって哲学科の助教授に昇格したが、ゲーテにヘーゲルを紹介したのはシェリングであった。⑤イェナに来たばかりの時は、シェリングは家にヘーゲルを同居させた。客観的にみても、シェリングはまさに恩人であった。

このようなヘーゲルに対する援助の裏には、シェリングの目的があった。当時、シェリングはフィヒテからの理論的な独立を遂げようとしており、その援護を必要としていた。そこで、対フィヒテ援護のために、イェナ大学に来ることを勧めた。当時は、シェリングが無名の若者（ヘーゲル）を故郷から連れてきて、「シェリングはすでにフィヒテを超えている」ことを宣伝させたのだといわれた。ヘーゲルから理論的支持を得て、いっしょにフィヒテを批判してくれることはありがたいことだっただろう。シェリングとヘーゲルの連携は成功した。

このように、シェリングとヘーゲルの利益は双方向的であるが、より多くの利益を得たのはヘーゲルのほうであろう。それまで全く哲学の業績もなく、大学での教職経験がなく、コネもなかったヘーゲルが、イェナ大学に就職することができたのは、全くシェリングのおかげである。

以上のように、３人とも師から得られた援助はきわめてあついものであった。哲学史の教科書では、師の心の広さのように美談のように描かれることがある。しかし、これらは純粋に学問上の指導の域を超えているように思える。師から弟子への過剰な期待が感じられる。後継者になってほしいという打算の感情が働いている。相互的に利益を得るという打算の関係である。つまり相互打算の関係である。

ふつうこれだけ「恩」を売っておけば、その「恩返し」を期待するのが人間だろう。ところが、そうした師の期待は裏切られることになる。

師弟関係の崩壊期

こうして相互的に作られた師弟関係であったが、すぐに崩壊していく。
そのきっかけは、師がイェナを去ったことである。フィヒテは1799年、シェリングは1803年に、弟子を残してイェナ大学を去った。
（フィヒテとシェリングがイェナを去ったことは、結果的に大きな意味を持っていた。もし、彼らが弟子を残してイェナを去ることがなかったら、弟子の裏切りはなかっただろうし、ドイツ観念論哲学はずいぶん奥行きがなくなったであろう。）

第３位相（師←弟子）　　弟子による裏切り

タテマエ（哲学）　学問的乗り越え
師がいなくなったことで、弟子は、師に対して気兼ねすることなく、自分の哲学を発展させた。そして、師の哲学を乗り越え、師の哲学を批判するようになり、師弟関係は崩れた。
哲学史においては、４つの位相のうちで、最も強い関心が向けられたのはこの位相である。フィヒテはカントをどのように乗り越えて自我哲学を完成させたのか。シェリングはフィヒテの自我哲学をどのように乗り越えて同一哲学を打ち立てたのか。ヘーゲルはシェリングの同一哲学をどのように乗り越えて、ドイツ観念論哲学を完成させたのか。哲学の教科書はこの記述に重点をおく。
哲学史の教科書で暗黙の前提となっているのは、弟子は、師を学問的に批判することによって、新たな哲学を進歩させるものだというステレオタイプである。弟子は、オリジナルな学説を発展させて、成長し、やがて、師と対決して、師から独立していく。師との対決は、学問の進歩のための産みの苦しみである。哲学はオリジナリティや純粋性こそ大事であり、ソクラテスやプラトンの時代から、哲学の基本は議論にある。批判によって弁証法的な発展が生まれる。批判こそ進歩の原動力である。学問は戦いであって、妥協が入ってはならない。どんなに冷酷のように見えようと、師弟関係などの雑音に惑わされるべきではない。こうした美化された学者の世界のステレオタイプが暗黙のうちにある。

弟子フィヒテ→師カント
フィヒテはカント哲学を批判し、それによってオリジナルな自我哲学を確立した。フィヒテによると、カントの説には不統一がある。『純粋理性批判』においては「理論理性」だけを扱い、『実践理性批判』においては「実践理性」だけを扱っており、この２つの理性はただ並列的に並べられているだけであり、うまく統一されていない。フィヒテは、1797年に『知識学への第二序論』において、「どこにも哲学すべての基礎を扱っていない」と述べて、カント哲学を批判した。フィヒテはカントの不統一を克服して、カント哲学を補おうとしたのである。『全知識学の基礎』において、カントの「理性」を「自我」と置き換えて、フィヒテは「実践自我」と「理論自我」の関係を考えた。大元は能動的な「絶対的自我」である。絶対的自我から現れた「実践自我」は、「非我」を乗り越えようとする。しかし、乗り越えられなかったときに、「非我」を認識しようとして「理論自我」が現れる。こうしたダイナミックな動きとして実践自我と理性自我を統一的にとらえようとした。これによって、カント哲学の基礎を確立したと主張した。

弟子シェリング→師フィヒテ
シェリングは、フィヒテの自我哲学から独立しはじめた。①自然哲学、②汎神論、③自我哲学と自然哲学の同等性、④絶対者の哲学へ、⑤美的観念論という発展を辿って、⑥同一哲学を完成させたのである。師の自我哲学から始まって、師のフィヒテとは違った結論に達した。単純化すると、フィヒテが「自我がすべてである」としたのに対して、シェリングは「すべてが自我である」と主張するようになった。1806年、シェリングは、『改良されたフィヒテ説の自然哲学に対する真の関係についての説明』を書いて、フィヒテとの決裂を公然と表明した。フィヒテの倫理的観念論に対して、シェリングは美的観念論と呼ばれる。

弟子ヘーゲル→師シェリング
ヘーゲルは、イェナの前のフランクフルト時代にはすでに、フィヒテやシェリングの自我哲学を乗り越えていたとされる。シェリングは、神は「自我」だけにあるものではなく、あらゆるものに遍在するという汎神論の立場である。シェリングの同一哲学では、神はあらゆるものの根底に存在し、神は常に変化せずに、自己同一的に存在する。ヘーゲルは、はじめシェリングの影響を受けて、シェリングの汎神論の立場に同調していた。しかし、フランクフルト時代のヘーゲルは、「歴史の目的論的解釈」を考えるようになった。これは、歴史とは「神」という絶対者がその本質をしだいに実現する過程であるとするものである。つまり、神はしだいに自己を展開していくものである。ヘーゲルの神は、シェリングの神のように常に変化せずに自己同一的に存在するのではない。ヘーゲルの神は、歴史を通じて、動的にみずから展開していくものである。シェリングのいうように、もしすべてのものが神であれば、他と差別がなくなり、善悪真偽の区別もなくなり、価値の実現に向かう人格の自由な活動も意義がなくなる。そして、絶対者から有限者が差別化して現れることを説明できない。1807年に発表した『精神現象学』の序文において、名指しこそしていないが、「（シェリングのいう）絶対者は、その中においてはすべての牛が黒くなる闇夜のようなものである」と罵倒した。絶対者から有限者が現れることを説明できないという批判である。この『精神現象学』こそヘーゲ

ルの前期の主著とされるのである。

ホンネ（心理）　恩を仇で返す

哲学史では、弟子が師を学問的に乗り越えたという美談になっているが、しかし、その裏には、もっと人間的な動機もあっただろう。

師がイェナ大学にいるうちは従順な関係でいるが、それは、師が上司として昇格のカギを握っているからである。しかし、師がイェナを去ると、上司ではなくなり、昇格とは無関係な人にすぎないわけだ。もう遠慮したりゴマをする必要はなくなる。冷たい仕打ちをしても平気となる。手の平返しである。

さらに、師を批判し始める。師を学問的に乗り越えたとしても、自説を強調すればよいだけのことであって、師を批判までする必要はない。シェリングとヘーゲルはそれぞれの師への批判に踏み込んだ。これが弟子の裏切りである。学問的な批判の裏には、師への人格的な批判がある。

弟子は師に対して、恩を仇で返した。相応の礼を返すのではなく、逆に相手を害したり攻撃した。あれだけの師から便宜供与を受けた恩があるのに、師がいなくなったとたんに、弟子は手のひらを返すように冷たくなった。ここまで来たのは自分の実力のためであって、師からの助けではないと言いたいのかもしれない。もはや師より自分が優れている。一流の哲学者である師の哲学を批判して、自分の哲学のほうが優れていると証明し、世にアピールしたい。師を踏み台にしてでも上をめざしたい。自分の哲学が主流になるためには、師の哲学はむしろ邪魔になる。自分が一番優れているというナルシシズムや自己中心的なパーソナリティもあるのかもしれない。

弟子フィヒテ→師カント

フィヒテは、恩人である師のカントの哲学から逸脱して行った。フィヒテのいう「絶対的自我」には二面性がある。フィヒテによると、「絶対的自我」は、カントのいう「超越論的統覚」のことだという。「超越論的統覚」とは、われわれ人間の意識経験の根底にある「われ思う」という能動的働きのことであり、この意味では、確かにフィヒテはカント哲学の範囲内にある。ところが、フィヒテは、カント流に「神」や宗教を退けながらも、実は、裏では「神」や宗教を取り入れていた。フィヒテによると、「絶対的自我」は、無限のものであり、「非我」の制限も受けることはないという。どうみてもこれは「神＝絶対者」のことである。フィヒテ自身はそれを否定しているものの、この意味では、フィヒテはカント哲学を逸脱しているのである。せっかくカントが「神」学を哲学から切り離したのに、フィヒテは逆戻りしてしまった。実際、フィヒテの後期思想においては、自我哲学は捨てられ、「神＝絶対者」の哲学をとなえるようになる。こうした点をカントから批判されるとやり返した。

弟子シェリング→師フィヒテ

シェリングは、フィヒテがイェナから去ると、手のひらを返すように、フィヒテに冷たくなった。イェナ大学の教員になるという目的を果たしてしまえば、フィヒテに媚びる必要もなくなった。さらに、師を批判するようになった。ふたりの文通は1801年をもって終わった。シェリングは、対話篇『ブルーノ』（1802年）などの著作で暗にフィヒテを批判した。そして、1806年、シェリングは、『改良されたフィヒテ説の自然哲学に対する真の関係についての説明』を書いて、フィヒテとの決裂を公然と表明した。恩を裏切った。こうした過程も、フィヒテとカントの関係と同じである。

シェリングの戦略として特徴的なのは、彼がヘーゲルを援軍としてイェナ大学に呼び、２人でタッグを組んで、フィヒテと戦ったことである。当時は、シェリングが無名の若者（ヘーゲル）を故郷から連れてきて、「シェリングはすでにフィヒテを超えている」ことを宣伝させたのだといわれた。これは３人の間のバトルにおいて特徴的であり、学問的な批判が攻撃であることを示すエピソードでもある。

弟子ヘーゲル→師シェリング

ヘーゲルも、シェリングがイェナから去ると、手のひらを返して、シェリングに冷たくなった。イェナ大学の教員になるという目的を果たした後は、シェリングに媚びる必要もなくなった。それに、５歳年下のシェリングに弟子扱いされるのはプライドが許さない。また、シェリングの愛人となったカロリーネに対して、ヘーゲルはよく思っていなかったという。

そして、ヘーゲルはシェリング哲学に対して、遠慮のない批判を加えるようになった。ヘーゲルは『精神現象学』の序文において、名指しこそしていないが、シェリングを罵倒した。ヘーゲルは平然とシェリングにこの本を送った。前述のように、イェナ大学に来たばかりのヘーゲルに数々の便宜をはかり多大な援助を与えたシェリングは、ヘーゲルにとって恩人のはずである。ヘーゲルに大学教授資格を取らせて大学の私講師にしたのもシェリングだし、いっしょの家に住ませたのもシェリングである。そうした恩を全く忘れたかのようなヘーゲルの裏切りの態度は理解に苦しむところである。まるで、シェリングの数々の便宜供与は、まるでシェリングの一人相撲であったとでもいわんばかりである。

しかも、前述のように、ヘーゲルは、イェナに来る前から、すでに内心ではシェリングを支持していなったようだ。カントをフィヒテが乗り越える過程や、フィヒテをシェリングが乗り越える過程は、最初からそうだったわけではなく、しだいに理論が変化することによって徐々に乗り越えていったのである。ところが、ヘーゲルがシェリングを乗り越える過程は、実はイェナの前の時代に終わっていた。つまり、大学のポストを得るという打算のために、シェリングを支持するフリをしていたことになる。そもそもシェリングを師と

して尊敬しなかったと考えると、シェリングがイェナを去って、ヘーゲルがシェリングに冷たくなり、裏切ったのも当然のことかもしれない。まさに打算と裏切りの過程である。もしそうなら、ヘーゲルは、３人のうちで最も悪質であるともいえるかもしれない。

第４位相（師→弟子）　師からの破門

タテマエ（哲学）　学問的反批判

師から弟子の非難と関係拒絶

弟子からの学問的批判を受けて、師も黙ってはいない。弟子に対して学問的な反批判をおこなう。弟子といえども、一人前の哲学者であり、学問上のライバルである。「弟子からの批判は受けて立とう。反批判で返り討ちにしてやる。哲学はそうして発展してきた。」といった具合である。批判こそ進歩の原動力である。学問は戦いであって、妥協が入ってはならない。どんなに冷酷のように見えようと、師弟関係などの雑音に惑わされるべきではない。ここにも美化された学者のステレオタイプが見られる。

師カント→弟子フィヒテ

カントにとって、フィヒテがカントの哲学の矛盾を統一したと豪語したことは、許されざる逸脱であっただろう。カントは、1798年には、以下のように述べて、フィヒテを批判した。「単なる自己意識、しかも素材を持たない、したがってまたこれに対する反省は適用さるべき何らの対象を持たず、それ自身は論理学をも超越するというような単なる思惟形式だけの自己意識は読者に奇妙な印象を与える。すでに表題（知識学という）を見ただけではほとんどその成果を期待することができない。」（1798年ティーフトルンク宛の手紙）、岩崎（1980）訳。

また、フィヒテは、カント哲学の「実践自我」と「理論自我」は矛盾すると批判するが、カントにとってはそれらは矛盾ではない。カントは、信仰（実践理性）に場所を与えるために、知識（理論理性）を取り除かねばならなかったという。75歳のカントは、1799年に、「フィヒテの知識学に関する声明 Beziehung auf Fichtes Wissenschaftslehre」を発表した。ここで、フィヒテの批判に対して反論し、フィヒテの「知識学」を「単なる論理学」にすぎないとして切り捨てた。カントからの反批判に対して、フィヒテは「一般学芸新報」誌上でこれに答えた。

師フィヒテ→弟子シェリング

フィヒテは、シェリングの1800年の『超越論的観念論の体系』を読み、シェリングが自我哲学を逸脱していると感じた。そこで、すぐにフィヒテはシェリングに手紙を書いて、先験哲学と自然哲学とを対立させることには同意できないと批判した。しかし、この往復書簡によって、２人はみずからの哲学的立場の違いを自覚するようになった。1801年のシェリングの『私の哲学体系の叙述』に対して、フィヒテは、シャート宛の手紙でシェリングを批判した。また、フィヒテは、1801年にベルリンでの私的講義をもとに『知識学の叙述』を書き、シェリングとの差が明確になった。シェリングは、1802年の対話篇『ブルーノ』などの著作において、暗にフィヒテを批判した。シェリングは、1806年に「改良されたフィヒテの学説に関する自然哲学の真の関係の明示」を発表して、名指しでフィヒテを批判した。それに反論するために、フィヒテも、1806年に「知識学の概念ならびにその在来の運命に対する報告」を書いて、シェリングを批判したが、生前は未発表に終わった。

ただし、フィヒテは、シェリングを一方的に批判するだけではなかった。フィヒテは、ベルリンでの後期思想では、自我哲学からしだいに絶対者の哲学へと考え方を変えていくが、そうした変化をもたらした要因のひとつは、弟子のシェリングの絶対者の哲学だったとも言われる。フィヒテは、シェリングの哲学は批判していたが、シェリングが提起した問題の意義を十分に認めて、それを解決しようとした。それによって、フィヒテの思想は、前期から後期へと変わっていった。これは、のちにシェリングが、弟子のヘーゲルから批判を受け、ヘーゲルの死後もヘーゲルを徹底的に批判し続けたのとは違っている。３人の行動としては例外的である。

師シェリング→弟子ヘーゲル

シェリングは、ヘーゲルの1807年の『精神現象学』において罵倒されたが、それに対する反批判を公けにしたのは、ヘーゲルの死後、1834年のことである。シェリングは、クーザンの著書に序文を寄せて、次のようにヘーゲルを批判した。「ヘーゲルの哲学は、シェリングの同一哲学を完成したものではあっても、これを一歩も前進させたわけではない。同一哲学によっては、あるものが何であるかということは説明できても、それが現にあるということは捉えられない。「現実存在」は「本質」に解消されるものではなくて、これに積極的に加わるものである。この積極的なものを問題にすることを標榜して、彼は後期の哲学を「積極哲学」と呼び、考えられぬものではないというだけの消極的本質を扱った前期の哲学を「消極哲学」と呼んで、両者をはっきり区別する。もちろん消極哲学そのものを無意味というのではない。しかし、ヘーゲルのように、論理的、観念的な限定をそのまま実在的な運動と主張するのは、明白な誤りである」（服部・井上、1955）『ブルーノ』訳者解説

1841年、シェリングはベルリン大学教授として呼ばれたが、シェリングは、ヘーゲル哲学を徹底的に批判

した。ヘーゲルは、理性や概念にもとづいて存在を把握しようとしたために、存在を本質としてしか把握できない「消極哲学」にすぎない。存在を存在そのものとして、「現実存在」としてとらえる「積極哲学」を主張し、人々を動かした。シェリングのいう「消極哲学」とはヘーゲル哲学のことをさしている。つまり、積極哲学をめざすということは、ヘーゲルを批判することであった。ヘーゲルへの反批判がシェリングの後期哲学を生むことになった。
「本来ヘーゲルが前期のシェリング哲学に対する批判を基として新しい立場を開いたのに対し、今度は逆にシェリングがヘーゲル哲学を批判することによって、従来のシェリング哲学とは違った新しい立場を拓いた」　藤田（1962）

ホンネ（心理）　　非難と恨み
師が弟子に反批判を加えるたのは、学者としての学問上の行動だけではなく、感情的反発もあったに違いない。弟子からの批判に合って、「飼い犬に手をかまれた」という反発を覚えただろう。せっかく後継者として大学ポストを用意してやったり、あらゆる便宜をはかってやったのに、その恩を忘れて、裏切るとはけしからん。師を踏み台にして裏切るのは恩知らずなやつだ。
師は、弟子を非難し、恨みの感情を抱く。もし、同じ大学であったら、弟子へのいじめ（アカデミックハラスメント）が起こっただろう。師はすでに外に出て行ったので、アカハラへの悲劇は避けられただけのことである。
弟子が自分の説を盗んだと思うこともある。シェリングはヘーゲルに対してそうした強い感情をいだいた。そもそもフィヒテもシェリングもヘーゲルも、師の哲学に感動してそれを取り入れたのだから、あながち妄想とばかりも言えない。
師は弟子を破門する。関係を拒絶し、絶交し、生涯、口もきかない関係となる。
現実世界の師弟関係を考えてみても、うまくいかず、師弟がケンカするケースもよく見られる。

師カント→弟子フィヒテ
すでに大哲学者として尊敬されていた75歳のカントにとって、自分より38歳も年下のフィヒテから、カントの哲学の矛盾を批判され、しかもそれを統一したと豪語されることは、プライドが許さないことだっただろう。自分の哲学の後継者として期待したフィヒテが、カントの哲学を逸脱したことは、飼い犬に手をかまれたといった反発を覚えただろう。1799年のカントに批判に対して、フィヒテは答えたが、これ以後、1804年にカントが死ぬまで、ふたりが交流することはなかった。実質的に、カントはフィヒテを破門したことになる。

師フィヒテ→弟子シェリング
フィヒテはシェリングの『超越論的観念論の体系』を読んで、飼い犬に手をかまれたという反感を持った。始めは手紙で説得しようとしたが、うまくいかなかった。はじめの頃の手紙は、互いに相手を尊敬し、意見の調停に努めるという態度が保たれていたが、しかし、しだいに論難するようになり、ついには感情的に対立した。互いの理論を批判する戦いが続いた。1802年１月のシェリングからの手紙で、ふたりの文通は終わった。フィヒテが弟子のシェリングを破門したことになる。ふたりは絶交し、以後、1814年にフィヒテが亡くなるまで、ふたりが交流することはなかった。

師シェリング→弟子ヘーゲル
シェリングは、ヘーゲルが1807年の『精神現象学』においてシェリングを罵倒しているのを読んで、目を疑った。飼い犬に手を咬まれるようなショックだったろう。すぐにシェリングはヘーゲルに不満の手紙を書き、それによって２人の師弟関係は終わった。実質上の破門であり、絶交を言い渡したことになる。シェリングは一生ヘーゲルを恨んだ。しかも、1816年には屈辱が待っていた。1814年にベルリン大学の哲学教授だったフィヒテが病死すると、そのポストは空席のはままだった。1816年に後任として、３人の候補があげられた。シェリング、ヘーゲル、フリースの３人である。投票の結果、選ばれたのはヘーゲルであった。シェリングはヘーゲルに敗北を喫した。これは屈辱であっただろう。
1818年、ヘーゲルはベルリン大学教授として呼ばれた。ヘーゲルは次々と大著を出版し、ヘーゲル哲学はたちまちドイツ哲学界の主流をなしていった。これに対して、シェリングは、ミュンヘンにおいて、すっかり栄光から遠のき、今をときめくベルリンのヘーゲルを羨望の目で眺めつつ、落魄の日々を送ることになった。ヘーゲルよりも先に哲学界にデビューしフィヒテ以上の時代の寵児となった自分が、20年後にはすっかり栄光から遠のき、ヘーゲルに水をあけられてしまった。ミュンヘンに移ったシェリングのもとをハイネが尋ねた。その時に、シェリングは「わしのアイディアをヘーゲルは奪い取った」とぐちったという（バウムカルトナー『シェリング哲学入門』）。
シェリングとヘーゲルは絶交後、２回だけ偶然出会う機会があった。1812年にニュルンベルクで、1829年にカールスバーグで、シェリングは偶然ヘーゲルと出会ったが、ふたりとも冷たく分かれた。
1831年、ヘーゲルが亡くなった。シェリングはずくにはヘーゲル批判を公にはしなかったが、３年後の1834年、クーザンの著書に序文を寄せて、ひそかにヘーゲルを批判した。
1841年、シェリングは、ヘーゲル哲学の牙城のベルリン大学に呼ばれたが、そこでもヘーゲル哲学を徹底的に批判し続けた。シェリングは「ヘーゲル哲学は、私の同一哲学の延長にあるものにすぎない（私の哲学

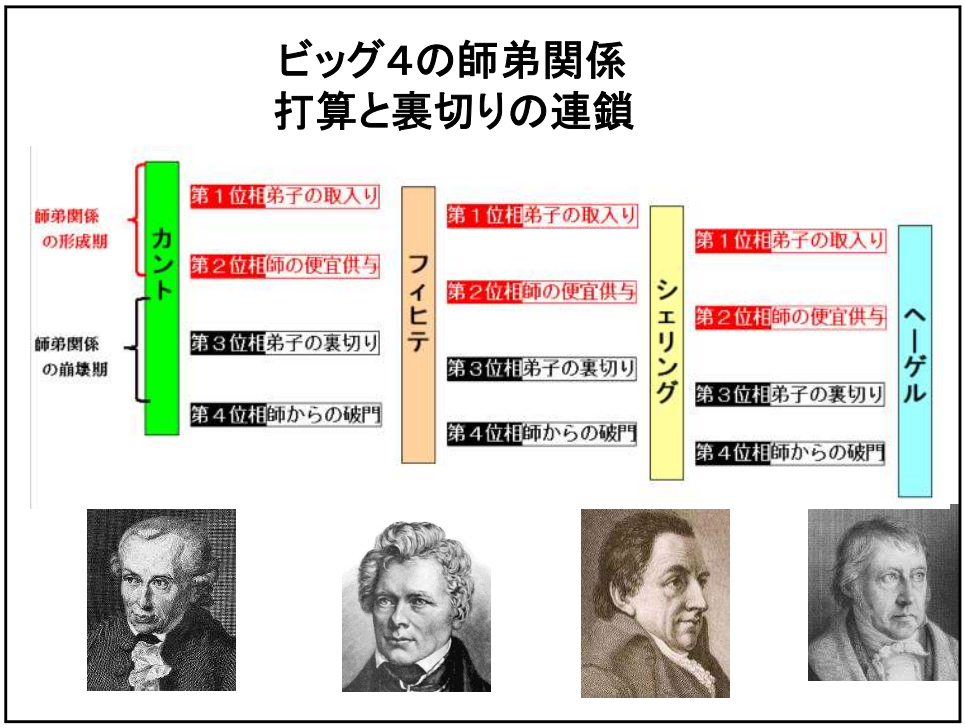
を盗んだもの）」と考えていた。学問の装いをとっているものの、シェリングの積極哲学の底には、ヘーゲルに対する恨みがあると思われる。シェリングのいう「消極哲学」とはヘーゲル哲学のことをさしている。つまり、積極哲学をめざすということは、ヘーゲルを批判することであった。シェリングは、消極哲学を否定することで、みずからの同一哲学も否定している。いわば自爆テロである。たとえ自爆しても、ヘーゲルを否定したかったのかもしれない。すさまじい敵意である。

こうして、シェリングとヘーゲルの師弟関係は崩れた。

第４章　３代続く悪の連鎖と因果応報

これまで、３組の師弟関係、カントとフィヒテ、フィヒテとシェリング、シェリングとヘーゲルについて、それぞれ４つの位相に分けて見てきた。これを合わせて書くと、下の図４－１のように表すことができる。

図４－１　ビッグ４の師弟関係　打算と裏切りの連鎖

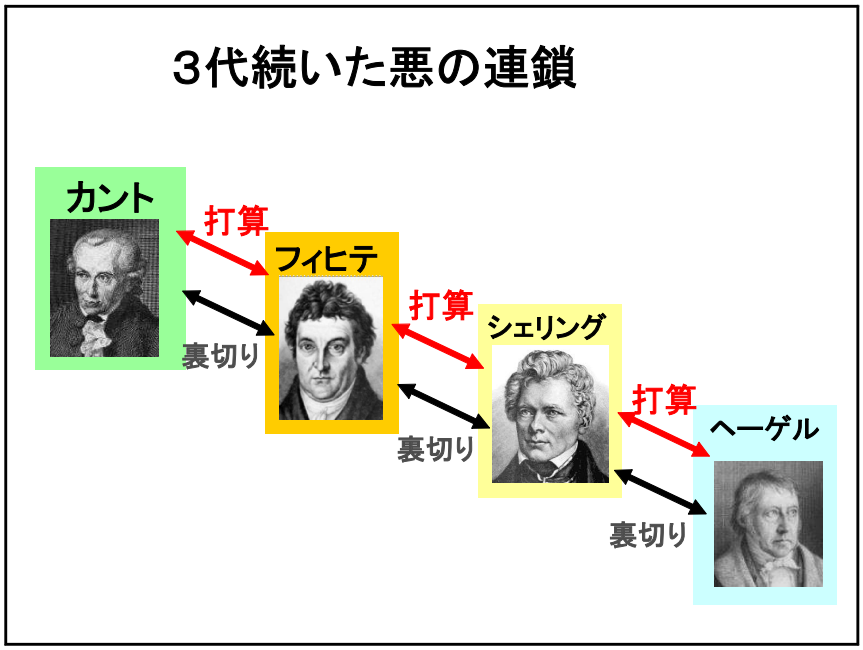


カント→フィヒテ→シェリング→ヘーゲルという関係は、いずれも同じような形をとったことは興味深いことである。哲学史のタテマエを剥ぎ取ってみると、３組の師弟関係には、ドロドロした人間関係が見えてくる。３組の師弟関係を特徴づけるのは、師弟間の相互の「打算と裏切り」の関係である。弟子からの打算と師からの打算がかみ合い、そして、弟子の裏切りと師の破門が噛み合った。相互の打算と裏切りの関係である。ドイツ観念論哲学は、こうした打算と裏切りから展開した。

３代続いた悪の連鎖

しかも、面白いのは、３組の師弟が、全く同じ「打算と裏切りの師弟関係」パタンを繰り返したことである。彼らは全く学習しない。経験に学ばずに、同じ泥沼を繰り返した。フィヒテとシェリングは、みずからは弟子として師を裏切っておきながら、数年後、今度は、師の立場になると弟子から裏切られた。上の世代の連鎖を見ていれば、やがて弟子から裏切られることはわかっているのに、あえて弟子に入れ込んだ。

図４－２　３代続く悪の連鎖



因果応報の関係　天に向かって吐いた唾

しかも、面白いのは、３組の師弟関係には因果応報性があることである。

弟子が師に打算で取り入り、後に裏切るという行動においては、自分が加害者である。ところが、自らが師となると、弟子から裏切られて、しっぺ返しを受け、その被害者となる。かつての加害者が、後に同じ手口で被害者となった。天に向かって吐いた唾が、自分の顔に落ちてくるような因果応報である。フィヒテは、恩師カントにおこなった裏切りを、４年後に、弟子シェリングから受けた。そのシェリングは、恩師フィヒテにおこなった裏切りを、10年後に弟子ヘーゲルから受けた。加害者と被害者を入れ替えて、全く同じパタンが繰り返された。

３人はイェナ大学にとって誇りなのか恥部なのか

イェナ大学は、ドイツ観念論哲学のビッグ３が教員をつとめたことを誇っている。哲学史の業績からいえば当然のことである。しかし、こうした打算と裏切りの悪の連鎖を見れば、果たして、３人が在任したことは、イェナ大学にとって誇るべきことなのだろうか。「哲学者の道」を作ったり、ヘーゲルの銅像を建てたりするほどのものなのだろうか。

むしろ、この３人は隠しておきたい恥部とも言えるのではなかろうか。しかも、シェリングとフィヒテの女性関係を見れば、とても子供には聞かせられないようなスキャンダルである。

３組の師弟関係の特徴は、打算と裏切りの相互関係、３代続く悪の連鎖、因果応報性というだけにとどまらない。
彼らは、１対１で師と対決したのではない。
①師との理論闘争において、援護してもらうために、弟子をイェナ大学に呼んだ。
②３人がイェナ大学に集まったのは偶然ではない。
③弟子と共同戦線を張って師と戦うという形式が３代続いた。

①師との戦いの援護のため弟子をイェナ大学に呼んだ　師の便宜供与は弟子のためではなく、自分のため

師との理論闘争において、援護してもらうために、弟子をイェナ大学に呼んだ。この点が３組の師弟関係の独特なところである。フィヒテは、師カントとの理論闘争において、弟子のシェリングをイェナ大学に呼んで、援護してもらい共同戦線を張った。シェリングも、師フィヒテとの理論闘争において、弟子のヘーゲルをイェナ大学に呼んで、援護してもらい共同戦線を張った。
だから、師は弟子に便宜供与を図ったのである。単に弟子を作りたかっただけではない。師との戦いにおいて、援護してくれる弟子は必要だったのである。弟子のためを思って便宜供与したのではなく、師自身のために弟子が必要だったのである。師の利己的行為とも言える。
弟子にとっては、呼んでくれた恩よりも、師を援護してやったのは自分だという自負心が大きかったのかもしれない。だから、簡単に師を裏切ったのかもしれない。

②３人がイェナ大学に集まったのは偶然ではない

フィヒテがシェリングを呼び、シェリングがヘーゲルを呼んだ。だから、３人がイェナ大学に集まったのは偶然ではないのである。それぞれを意図的に呼んだので、３人とも同じイェナ大学の教員となったのである。ここにイェナ大学の必然性が生じた。

③弟子との共同戦線の「連鎖」

弟子と共同戦線を張って師と戦うという形式が３代続いた。つまり、この共同戦線の形式も連鎖したのである。

非情の戦い

注目すべきは、戦った相手が、外敵なのではなくて、昨日までの恩師だという点である。自分に大学のポストを与えてくれた恩師に対して、その恩を仇で返したという非情さである。ここが理解に苦しむところである。これが３組の師弟関係の本質である。

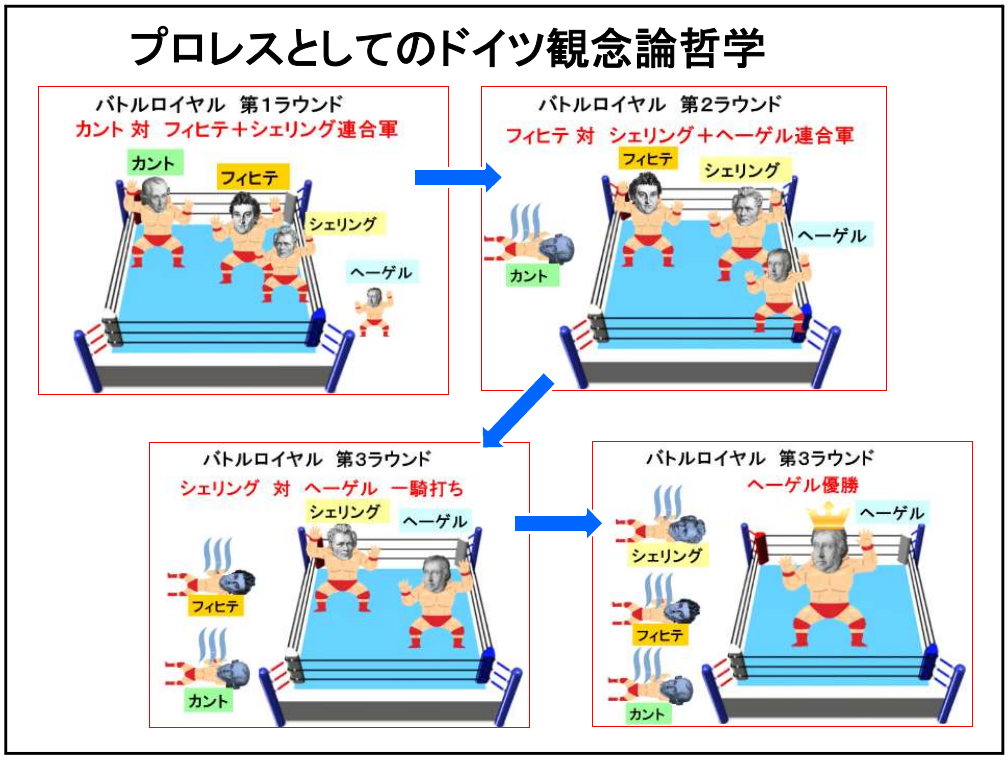
バトルロイヤルとなった

３人とも、師との戦いにおいて、弟子とタッグを組んだ。その結果、３ラウンドの戦いとなった。

プロレスでいえば、バトルロイヤルである。バトルロイヤルは、「３名以上が同時に戦って、自分以外はすべて敵という状況の中で、最後まで生き残った者を勝者と認める」形式である。強い者は早く潰されるので、勝つとは限らない。悪知恵を働かせた者が勝つ。最初は弱いフリをして、タッグを組んで強者を潰し、最後に２人だけになると、仲間だった相手を裏切って潰す。

このバトルロイヤルの図式こそが、ドイツ観念論哲学の３人の本質を最もよく表していると私には思える。だから、少し品がないとは思ったが、本稿第５部のタイトルを『プロレスとしてのドイツ観念論哲学』としたのである。

図５－１　プロレスとしてのドイツ観念論哲学

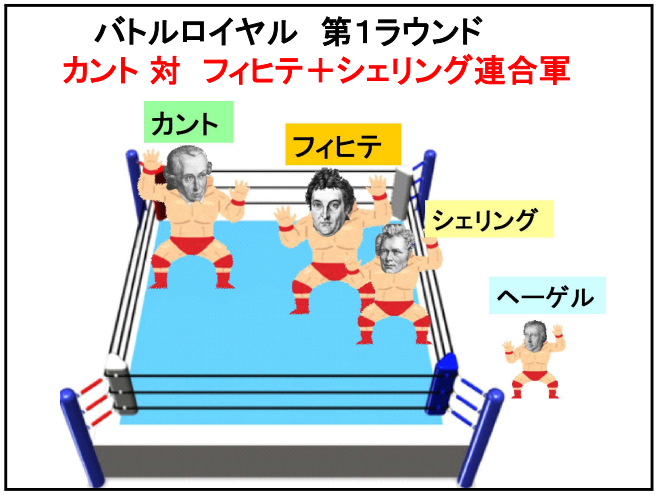


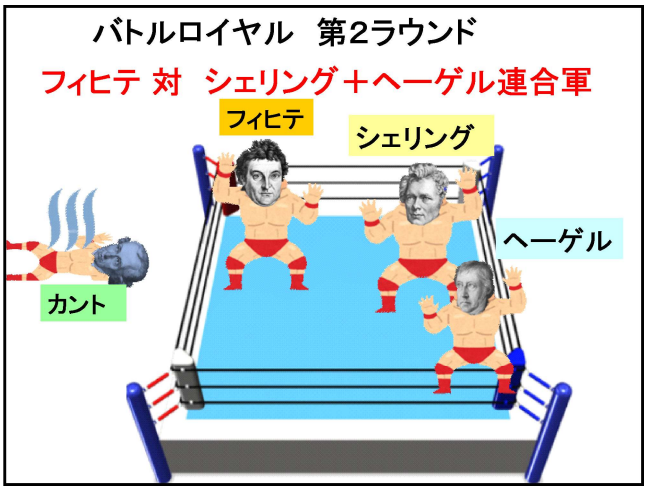
哲学者はバトル好き

学問上の論争がバトルである（プロレスと似ている）ことを示している。ソクラテスやプラトンの時代から、哲学の基本は「対話」であり、オープンな「議論」であり、「批判」である。哲学は戦いである。哲学の基本にある「議論」や「批判」の底には、人間の攻撃性や憎しみの感情がある。

バトルロイヤル３ラウンド
　このバトルロイヤルは、３ラウンドからなる。

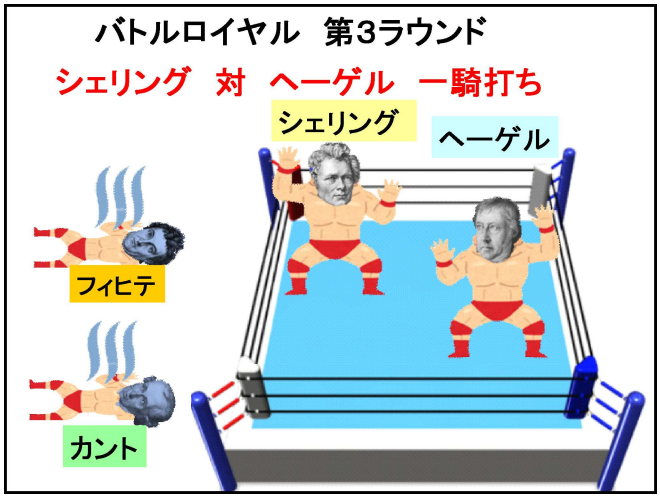
図５－２　バトルロイヤルとしてのドイツ観念論哲学　３ラウンド

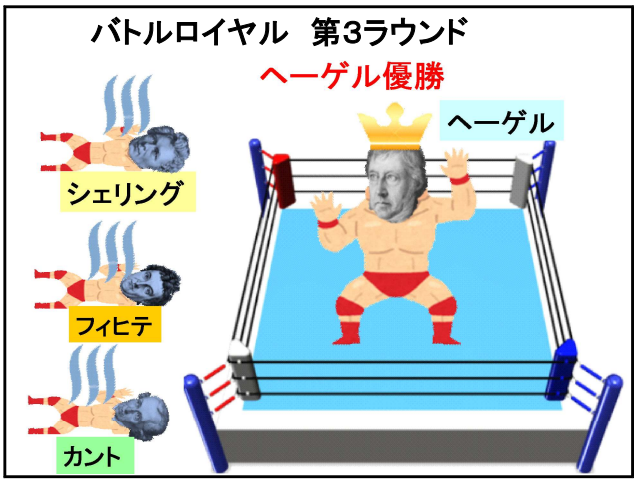




　第１ラウンドは、フィヒテが、師カントとの戦いのため、弟子のシェリングを呼んで、タッグを組んだ。

　第２ラウンドは、シェリングが、師フィヒテとの戦いで、弟子のヘーゲルを呼んで、タッグを組んだ。
　この戦いでは、フィヒテが無神論論争で大学を追われたために、シェリングとヘーゲルが勝ち残った。





　第３ラウンドは、最後に残ったシェリングとヘーゲルの一騎打ちの戦いとなった。すさまじい仲間割れである。
　この戦いでは、シェリングがスキャンダルでイェナ大学を出たために、ヘーゲルが勝ち残った。

　そして、バトルロイヤルの乱闘を生き残ったヘーゲルが、ドイツ観念論哲学のチャンピオンとなった。

そして誰もいなくなった
　とはいえ、そのヘーゲルも、スキャンダルのためイェナ大学を出たので、結局、イェナ大学には誰もいなくなった。これも皮肉なことである。
　バトルロイヤルはゲームであり、観客はこの人間模様をショーとして笑いながら見ている。しかし、この３人は、プロレスラーとしてショーを演じたわけでなく、学者として真剣に批判し合ったわけであり、少し背筋が寒くなる話ではある。

第６章　ベルリン大学時代　（1810～1846年）

＜目次＞
６－１．３人の年表
６－２．ベルリン大学時代（1810～1846年）の歴史的・政治的背景
６－３．ベルリン大学時代の３人の行動（編年体）
６－４．徹底比較　ベルリン大学の３人

６－１．３人の年表

ベルリン大学時代は、フィヒテがベルリン大学教授となった1810年から、シェリングがベルリン大学を辞めた1846年までの36年間である。1818年にはヘーゲルが教授となり、1841年にはシェリングが教授となった。

下の表６－１は、３人の足取りを年表にしたものである。色を塗ったところがベルリン大学にいた時期である。

表６－１　ベルリン大学時代のフィヒテ・シェリング・ヘーゲルの年表

西暦	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
1810	48　ベルリン大学教授		
11	49　ベルリン大学学長		
12	50　学長を辞任		
13	51		
14	52　死亡		
15～17			４年の空白
18			48　ベルリン大学教授
19～28			49～58
29			59　ベルリン大学学長
30			60
31			61　死亡
32～40		10年の空白	
41		66　ベルリン大学教授	
42～45		67～70	
46		71　ベルリン大学を辞す	
47～53			
54		79　死亡	

３人の項目の数字は年齢

３人の連鎖人事の政治的意図

上の表に示すように、３人の在任期間には時間差があり、同時に在任した期間はない。この点で、テュービンゲン大学時代やイェナ大学時代とは異なっている。年表を見くらべてみると、形は明らかに違う。３人はベルリン大学でバラバラの活動をしたように見える。

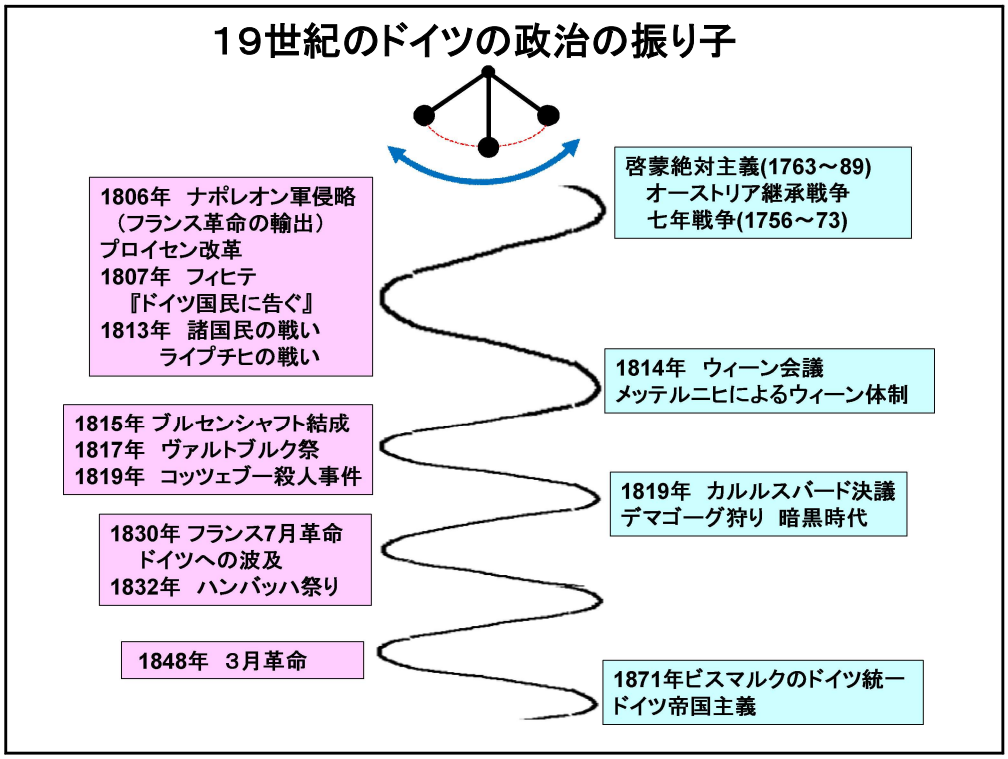
イェナ大学での３人の関係は、哲学の教科書でも語られ、よく知られているのに対し、ベルリン大学での３人の関係は、教科書で触れられることはなく、ほとんど知られていない。その理由は、ベルリン大学時代には、３人の在任に時間差があったために、３人の間に派手な人間ドラマがなかったように思われているからである。

しかし、３人のつながりには、プロイセン政府の意図がある。政府は、フィヒテの死後のポストにヘーゲルを呼び、ヘーゲルの死後のポストにシェリングを呼んだ。このつながりの必然性に哲学史的・政治史的ドラマが潜んでいる。

また、確かに３人の間に目立つような顕在的な人間ドラマはなかったが、よく調べると、実はイェナ大学以上に深いもうひとつの人間ドラマが潜んでいたのである。それは死んだ相手の体にボディブローを入れるような執念深い恨みのドラマである。

このような哲学史では関心が向けられないことが見てくるのは、大学論という視点をとったからである。

６－２．ベルリン大学時代（1810～1846年）の歴史的・政治的背景



この時代の歴史的・政治的背景について知っておくと、３人の行動を理解しやすくなる。この1810～1846年という時期は、ナポレオン戦争→ウィーン体制→３月革命と、左→右→左に大きく揺れた政治の時代だった。

プロイセン改革と反ナポレオンの戦い

プロイセン王国は、1806年にナポレオン軍に宣戦したが、イェナ・アウエルシュタットの戦いに大敗し、ベルリンを占領された。これに対して、プロイセンは、国王フリードリヒ・ヴィルヘルム３世のもと、宰相シュタインやハルデンベルクらの官僚によって、プロイセン改革がおこなわれた。この過程でベルリン大学創設の計画がおこり、1810年に創設され、フィヒテが哲学部長として呼ばれた。1813年、プロイセンは諸国民の戦い（ライプチヒの戦い）に勝ち、ナポレオン軍を追い出した。

ウィーン体制

ナポレオン失脚後、1814年のウィーン会議によって保守的な政治体制ができた。「ドイツ連邦」が成立し、これをプロイセンとオーストリアが守護するという「ウィーン体制」ができた。その中心になったのが、オーストリアの宰相メッテルニヒである。

ブルセンシャフト運動

ドイツをナポレオン軍から解放する「諸国民の戦い」には多くの学生たちが参加したが、戦争から帰ってきた学生たちは、意気が上がり、自由で愛国的な政治を期待した。ところが待っていたのは保守的なウィーン体制であった。これに反発した学生たちは、「ブルセンシャフト」という学生組合を作り、政治的な運動を始めた。そして、1817年の「ヴァルトブルク祭」でその頂点に達した。そして、運動は政治的に過激化し、あちこちで事件がおこった。1819年のコッツェブー殺人事件もそのひとつである。ヘーゲルがベルリン大学に呼ばれた背景には、このような学生運動の過激化があった。

カルルスバード決議とデマゴーグ狩り

こうした学生運動を反体制運動として弾圧したのが、メッテルニヒであった。彼は、1819年には「カールスバードの決議」を取りつけて、ブルセンシャフト運動を禁止した。言論は統制され、ブルセンシャフトのリーダーを「デマゴーグ」と呼んで、デマゴーグ狩りがおこなわれた。政治的な暗黒時代といわれる。こうした動きにヘーゲルも巻き込まれ、シュライアマハーとの対立に至ることになる。

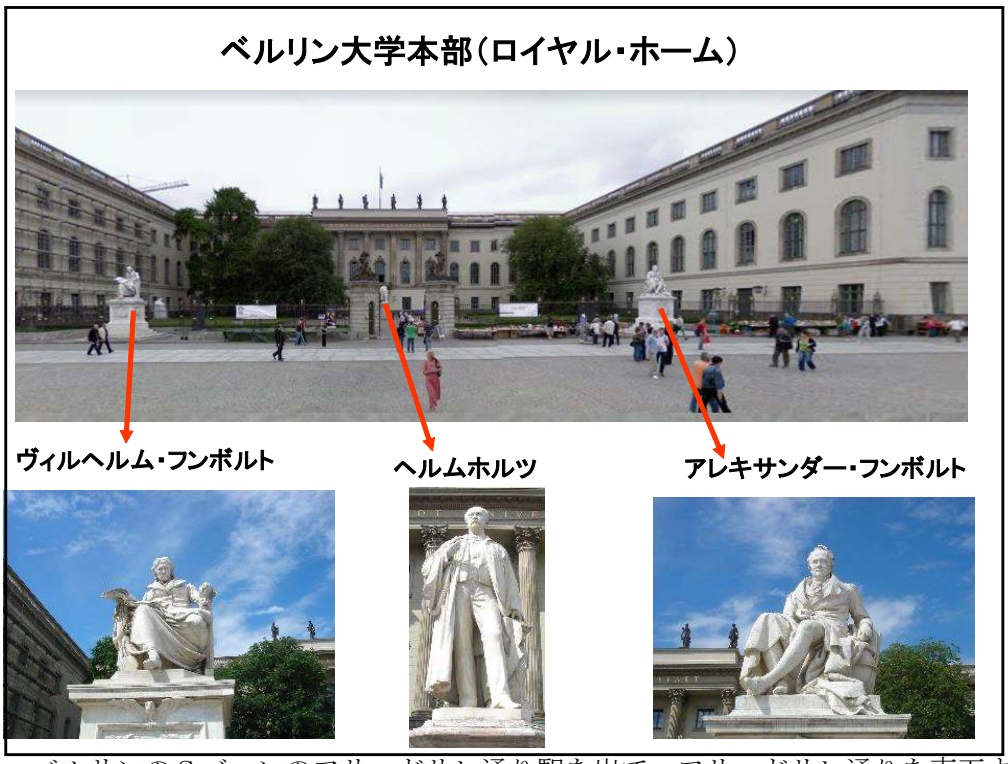
フランス７月革命とドイツ３月革命

暗黒時代はしばらく続いたが、1830年にフランスで７月革命がおこり、ドイツにも波及した。1831年には、ヘーゲルが亡くなり、ヘーゲル左派の政治的な運動が強くなった。1832年にはハンバッハ祭りが開かれた。シェリングがベルリン大学に呼ばれたのは、このような社会的な動きに対抗するためであった。

1848年にもヨーロッパで革命が広がった。ドイツでも３月革命が起こり、ベルリンで市街戦がおこった。この1848年の革命によって、ヘーゲル左派は消滅した。これは、社会のほうがヘーゲル左派の思想に追いつ

いて当たり前のことになり、左派思想が取り立てて目立たなくなったからであった。

ベルリン大学本部　ウンター・デン・リンデン通りのベルリン大学本部



ベルリンのＳバーンのフリードリヒ通り駅を出て、フリードリヒ通りを南下すると、ウンター・デン・リンデン通りと交わる。ウンター・デン・リンデン通りは、西端にはブランデンブルク門、東は博物館島に達し、ベルリンの中心をなす大通りであり、森鴎外の『舞姫』にも描かれているほどである。この通りに、ベルリン大学本部がある。

ベルリン大学の本部（ロイヤル・ホーム）の正面の建物には、金色で大きくフンボルト大学ベルリンと書かれているのでよく目立つ。ウンター・デン・リンデン通りはいつも観光客であふれているので、宣伝効果は大きい。

入口の門の両側には、フンボルト兄弟の全身像が立つ。左側が兄ヴィルヘルム・フォン・フンボルト、右側が弟アレグザンダー・フォン・フンボルトである。兄は座って本を読んで、考え事をしている。いかにもまじめに勉強しているという感じ。

中央にはヘルムホルツの像が立つ。

このように、建物だけ見ると華やかでおごそかであるが、その歴史を見ると、政治に翻弄された波乱の歴史を持っている。

ベルリン大学は当時は新興大学にずきなかった

下の表は、本論に登場する大学の設立年である。

ベルリン大学は、1810年に創設され、ドイツでは新しい大学であった。1477年創設のテュービンゲン大学や、1558年創設のイェナ大学と比べても、250～300年の差がある。ハイデルベルク大学やライプツィヒ大学は伝統のある古典大学であったが、当時のベルリン大学は海のものとも山のものともわからない新興大学にすぎなかった。プロイセン王国の威信がかかっていたので、結果的には成功して、ベルリン大学は栄光の歴史を辿ることになる。テュービンゲン大学やイェナ大学は、静かな地方都市を形成していたのに対し、ベルリン大学は大都会ベルリンのド真ん中に作られた近代的な都市大学であった。創設にはフンボルト兄弟、フィヒテ、シュライアマハーといったドイツ学問の大立て者が関わった。これについては第１部を参照。

しかし、フィヒテ・シェリング・ヘーゲルの時代には、この新興大学に赴任しても大丈夫という保証はなく、３人がベルリン大学に赴任したのは賭けをするようなものであったろう。

なお、表に示すように、フランス・イタリア・イギリスの大学が12世紀に創設された（日本が平安時代だった頃）のに対し、ドイツ語圏の大学は、1347年のプラハ大学が最初であり、200年も遅れていた。ドイツ人は文化的後進国であり、劣等感を持っていた。後にドイツ観念論哲学がヨーロッパの哲学を主導する立場になったことは、ドイツ人に大きな自信を与えた。

表６－２　本論に登場する大学の設立年

	他地域	ドイツ語圏	その頃日本では
１２世紀	1150年？パリ大学（フランス） 1158年　ボローニャ大学（イタリア） 1167年　オクスフォード大学（イギリス）		平安時代
１３世紀	1209年　ケンブリッジ大学（イギリス） 1222年　パドヴァ大学（イタリア）		鎌倉時代
１４世紀		1347年　プラハ大学 1365年　ウィーン大学 1385年　ハイデルベルク大学	室町時代
１５世紀		1402年　ヴュルツブルク大学 1409年　ライプツィヒ大学 1459年　インゴール大学 （後にミュンヘン大学） 1477年　**テュービンゲン大学**	室町時代
１６世紀		1527年　マールブルグ大学 1544年　ケーニヒスベルク大学 1558年　**イェナ大学**	戦国時代
１７世紀		1665年　キール大学 1694年　ハレ大学	江戸時代
１８世紀		1737年　ゲッティンゲン大学 1743年　エルランゲン大学	江戸時代
１９世紀	1836年　ロンドン大学	1810年　**ベルリン大学**	江戸時代

赤字はフィヒテ・シェリング・ヘーゲルが在任した大学

６－３．ベルリン大学時代の３人の行動（編年体）

以下、表６－１の年表にしたがって、３人の行動を編年体で見ていこう。

1810年　フィヒテが初代哲学部長となる　第２のドラマの始まり

1810年にベルリン大学が創設され、48歳のフィヒテは、教授として招かれ、哲学部の初代学部長となった。

イェナ大学時代がフィヒテのイェナ大学赴任から始まったのと同じく、ベルリン大学時代も、フィヒテのベルリン大学赴任から始まった。

1810年　ベルリン大学が開学　　フンボルト理念は神話

ベルリン大学が作られたプロセスは複雑であり、本論の第１部「**創立の謎　フンボルト理念のウソとシュライアマハー**」で詳しく述べたとおりである。まとめると、下の表６－３のような３段階を経て創設された。

表６－３　ベルリン大学の創設への３段階

段階	構想案	年代	代表的人物	構想内容	教授人事
第１段階	**ハレ大学ベルリン移転案**	1806年10月～	ハレ大学の大部分の教授（学長シュマルツ、フロリーヴ）	ハレ大学のベルリン完全移転	ハレ大学のすべての教員
			ハレ大学の進歩派教授（ヴォルフ、シュライアマハー）	ベルリンに新しい大学を作る	ハレ大学の優秀な教員のみ。ハレ大学以外に広く人材を求める
第２段階	**バイメ構想**	1807年９月～1808年６月	バイメ	ベルリンに新しい高等職業教育施設を作る	ハレ大学の優秀な教員のみ。ハレ大学以外に広く人材を求める
第３段階	**フンボルト＝シュライアマハー構想**	1809年２月～1810年４月	フンボルト、シュライアマハー	ベルリンに新しい大学を作る	ハレ大学の優秀な教員のみ。ハレ大学以外に広く人材を求める

ベルリン大学は、ナポレオン戦争によって荒廃したプロイセンのハレ大学の再建として作られたが、これに加えて、プロイセン改革の中心の官僚のひとりだったバイメの構想が加わった。バイメは、ハレ大学のような神学中心の地方小都市型の大学ではなく、国のための高等職業教育施設を首都ベルリンに作りたいと考えた。

フィヒテは愛国的な講演『ドイツ国民に告ぐ』で知られており、バイメ構想の段階から創設の中心メンバ

ーであった。有名な論文「ベルリンに設立予定の、科学アカデミーと緊密に結びついた、高等教授施設の演繹的プラン」を発表した。しかし、バイメの失脚によりこの構想は挫折した。
これを引き継いだのが、ベルリンに新しい大学を作るというフンボルトとシュライアマハーの構想であった。高等職業教育施設というドライな構想とはならなかったが、従来の大学像とは違う新しい大学像をめざして作られた。ベルリン大学の創設理念として「フンボルト理念」と言われているが、それは神話にすぎない。フンボルトは、開学の時にはベルリンを離れてウィーンで別の仕事をしていた。実際の教育・研究のシステムを作ったのはシュライアマハーであった。
フィヒテもこの構想に残り、教授として招かれることになった。

1811年　フィヒテがベルリン大学の初代公選学長になる

翌1811年には、ベルリン大学学長は初めて選挙で決められることになり、この選挙でフィヒテが学長に選ばれた。
ベルリン大学の歴代の学長は、下の表６－４のとおりである。初代はシュマルツ、第２代（公選初代）はフィヒテ、第３代はザヴィニー、第４代はルドルフィと続く。学長の任期は１年である（学長ポストが単年度であり長期間でないのは、学長に権限を与えず、政府の意向を維持するためかもしれない）。
第６代はシュライアマハー、飛んで第18代がヘーゲルである。
よく「ベルリン大学の初代学長はフィヒテである」と書かれる。Wikipedia日本語版にもそう出ている。しかし、正確にはフィヒテは第２代学長であり、正しくは「選挙で選ばれた初代学長」つまり「初代の公選学長」である。

表６－４　ベルリン大学学長

代		在位	名前	専門
1	初代	1810～11年	シュマルツ Theodor Schmalz	法学
2	公選初代	1811～12年	フィヒテ　Johann Gottlieb Fichte	哲学
3	公選２代	1812～13年	ザヴィニー　Friedrich Karl von Savigny	法学
4		1813～14年	ルドルフィ　Karl Asmund Rudolphi	医学
5		1814～15年	ゾルガー　Karl Wilhelm Ferdinand Solger	哲学
6		1815～16年	シュライアマハー Friedrich Ernst Schleiermacher	神学
7		1816～17年	リンク　Heinrich Friedrich Link	生物学
｜		｜		
18		1829～30年	ヘーゲル　Georg Wilhelm Friedrich Hegel	哲学

1811年　フィヒテ学長の管理主義宣言

フィヒテが学長に就任した時、「大学の自由を妨げるただひとつの可能性について」という演説をおこなった。これはなかなか現実的な演説である。学生への管理主義宣言でもある。
ベルリン大学は大学の自由を保証するが、その「大学の自由」を妨げるものこそ、大学生の乱暴行為である。大学生と称して、大学に乗り込んでくるならず者集団がいる。自由をいいことに、勉学もせず、酒を飲んで大暴れし、やたらに決闘ばかりする。決闘で命を落とす者が戦争中よりも多いのは何たることか。それを大学が取り締まろうとすると、ストライキをおこして、集団退去して、町に迷惑をかける。彼らは与太者集団である。学生が大学に対して脅しがきくと思ったら大間違いである。ベルリン大学はならず者をビシビシ取り締まる、とフィヒテはいう。管理主義宣言である。
学長が説教しなければならないほど、当時の学生組合はひどく粗暴で独善的な集団であった。これについては、私のハイデルベルク編の「学生牢」の項を参照いただきたい。
昔、フィヒテは、イェナ大学時代に、粗暴な学生組合（同郷人会）を解散させようとして、学生から恨まれた。ベルリン大学でも同じように、フィヒテは学生組合を禁止しようとして、学生組合から恨まれた。

1812年　フィヒテ学長を辞任

フィヒテは、学生たちの決闘や乱暴行為（下級生いじめのペンナリズム）や、独善的な学生組合について、「大学の自由」を妨げるものとして否定した
これに対し、神学部長シュライアマハーは、学生組合に対しては妥協的な態度をとっていたので、フィヒテと対立することになった。
案の定、学生たちはケンカをして、大学当局から処罰を受けた。これに対して学生組合はフィヒテを恨み、これに教員集団も巻き込まれ、フィヒテ派とシュライアマハー派に二分された。シュライアマハーは、フィヒテの講義と同じ時間帯に自分の講義時間をぶつけたという。
1812年、業を煮やしたフィヒテは、ついに学長を辞任せざるを得なくなった。
フィヒテは教授として哲学に打ち込むことができるようになった。フィヒテがベルリン大学でおこなった講義は、「意識の事実」「知識学」「超越論的論理学」「法律論」「道徳論」であった。フィヒテの聴講生としてショーペンハウアーがいる。

1814年　フィヒテ急死する

1812年に、プロイセンはナポレオン軍に宣戦し、戦争が始まった。フィヒテは、国境守備隊に入ろうとするが、断られた。代わりに、妻が篤志看護師として働いたが、彼女はチフスに感染してしまった。妻は回復したのだが、今度はフィヒテが感染し、1814年に死亡した。享年52。これから哲学者として活躍するという年齢である。

フィヒテの人生は、『ドイツ国民に告ぐ』といい、ベルリン大学初代公選学長といい、反ナポレオン戦争での死といい、ドイツの歴史と深く関わったものであったといえる。

1816年　フィヒテ後任人事の投票でヘーゲル勝つ

フィヒテの死後、その後任を決めようとして、1816年に人事投票がおこなわれた。ヘーゲル、シェリング、フリースの３人が候補となり、投票の結果ヘーゲルが決まった。

1816年　招聘のゴタゴタでヘーゲルはハイデルベルク大学教授に

ところが、大臣のシュックマン（Friedrich von Schuckmann; 1755～1834年）は躊躇した。当時のヘーゲルは、高校（ギムナジウム）の校長であった。大学の教壇を離れて10年以上たつので、その教授としての能力に確信が持てないからだった。ライマーをはじめ、いろいろな人を介して、ヘーゲルの評判を調べた。あげくの果てに、シュックマンはヘーゲルに手紙を出した。「あなたはベルリン大学教授として名前があがっているが、しかし、大学の教壇を離れて10年以上たっている。そこであなたが大学教授としてふさわしい能力があるか説明してほしい」と。このようなゴタゴタがあったため、ヘーゲルは、面倒なベルリン大学よりも、ハイデルベルク大学を選んだ。

1818年　ヘーゲルがベルリン大学に呼ばれる

その後、1818年になって、文部大臣アルテンシュタイン（1770～1840年）がヘーゲルに惚れこんで、ベルリン大学に招聘した。アルテンシュタインは、学生のブルセンシャフト（学生組合）の運動に手を焼き、権力で学生たちを弾圧するのではなく、冷静な哲学を身につけさせることで、この運動を沈静化しようとした。そのために最もふさわしいのが、理性を重視するヘーゲルの哲学だと考えたのである。

前回1816年のヘーゲル招聘では、大臣のシュックマンが躊躇したために、ハイデルベルク大学に先を越されてしまった。翌1817年には、プロイセンに宗教・教育・医務省が作られ、シュックマンにかわって、初代文部大臣に任命されたアルテンシュタインが大学の人事を担当することになった。これも幸いだった。彼は「哲学する大臣」と呼ばれるほどの人物で、フィヒテの哲学に親しんでいた。アルテンシュタインは、ヘーゲルの哲学を気に入り、ヘーゲルに手紙を書いて、プロイセンの首都であるベルリン大学に来てほしいと頼んだのである。確かに２年前は、ヘーゲルはギムナジウムの校長ではあっても大学教授としての経験がなかったのでシュックマンが躊躇したが、今やハイデルベルク大学教授として哲学者の業績も認められたので、ベルリンに呼ばれたのである。

1818年　ヘーゲルがベルリン大学教授に

1818年（48歳）、ヘーゲルは、ベルリン大学の哲学部教授として赴任した。ヘーゲルが呼ばれた理由は、哲学者としての業績が認められたという単純なものではない。その裏には、学生の過激な政治運動をヘーゲルの理性の哲学で鎮めようという政治的背景があった。ヘーゲルは、「学生運動の火消し役」というな政治

・教育的な自分の役割を理解し、教育・研究に当たった。『法の哲学』を出版し、その内容を学生たちに何回も講義したのは、そのあらわれであろう。この本ではやたら「理性」ということが強調されるのである。ヘーゲルがベルリン大学でおこなった講義は、自然法と国家学、哲学のエンチクロペディ、論理学、哲学史、自然哲学、人間学と心理学、美学、芸術哲学、宗教哲学など、実に広範囲である。週に10時間は講義をした。

「学生運動の火消し役」というヘーゲルの立場については、賛否両論がある。

ヘーゲルは権力に迎合してプロイセン国家の御用学者に成り下がったと批判する人は多い。その代表は、ハイムの『ヘーゲルとその時代』（1857年）である。また、科学哲学者のカール・ポパーも『開かれた社会とその敵』の中でこの時代のヘーゲルを批判している。一方で、ヘーゲルの伝記作者によると、ヘーゲルはフランス革命のような自由な政治をプロイセン国家に認めて、積極的に協力したのであり、権力に迎合したのではないという。当時のドイツは小国に別れて対立しており、こうした状況では自由は実現できず、ドイツが統一されて「国家」という形ができてはじめて「自由」が実現される。シュタインやハルデンベルクのプロイセン改革は、そうした自由を実現する国家を作るためであり、ヘーゲルはそれに期待してベルリン大学に行ったのだとする。ヘーゲルは、フィヒテと同じように、ブルセンシャフトの過激な運動は「自由」とは折り合わない非理性的なものだとして批判した。この立場は、『法の哲学』の中のフリースへの罵倒によくあらわれている。

1819年　ヘーゲルはシュライアマハーと対立

ヘーゲルとシュライアマハーの関係ははじめ良好であった。しかし、1819年におこったコッツェブー殺人事件をめぐって、２人は対立するようになった。この殺人事件は、学生運動でおこった内ゲバ事件である。イェナ大学のブルセンシャフトのメンバーであったコッツェブーが、ギーセン大学のザントによって暗殺された。ザントは死刑となった。この事件を反体制運動として弾圧したのが、オーストリアの宰相メッテルニヒであり、1819年のカールスバードの決議によって、ブルセンシャフトは禁止された。また、言論は統制され、ブルセンシャフトのリーダーを「デマゴーグ」と呼んで、デマゴーグ狩りがおこなわれた。この中で、ベルリン大学教授だったデ・ヴェッテが、コッツェブー殺人者ザントの母親に慰めの手紙を出したことで逮捕されてしまう。このデ・ヴェッテを弁護したのがシュライアマハーである。彼は政府の動きに対抗したので、さまざまな圧力が加えられた。フィヒテの時代からシュライアマハーは学生組合には妥協的であった。

一方、ヘーゲルは、デ・ヴェッテの免職を受けいれようとした。これよってシュライアマハーと対立するようになった。ヘーゲルは、フィヒテと同じく、学生組合を禁止する大学側に立った。

さらに、シュライアマハーがベルリン科学アカデミーの改革をおこなうようになると、アカデミーに入れなかったヘーゲルはシュライアマハーと対立するようになる。そもそも２人は哲学のスタイルも違う。ヘーゲルは体系的な思考こそが哲学としたのに対して、シュライアマハーは生き生きと哲学することこそが大切だとした。ふたりの対立は1831年のヘーゲルの病死まで続いた。

シュライアマハーは、ベルリン大学において、フィヒテやヘーゲルとやり合ったライバルである。ある意味では、シュライアマハーがスパーリング・パートナーをつとめたからこそ、ドイツ観念論哲学は鍛えられたといえる。シュライアマハーについては、第１部で詳しく述べた。

1823年　ヘーゲル学派が形成される

ベルリン時代の13年間は、ヘーゲルの栄光の時代である。ヘーゲルの哲学は学生の心を引きつけ、彼の講義には学生だけでなく、公務員や政府高官も聴講した。1823年からは、ヘーゲルの弟子が、ヘーゲルの著作を教科書として、教科書通りにヘーゲル哲学を講義することもおこなわれた。ドイツの各大学では、ヘーゲル的な哲学が講義されるようになり、ドイツだけでなくヨーロッパ各地にも広がった。ヘーゲルを信奉する哲学者が増えて、1823年頃から、いわゆる「ヘーゲル学派」が形成された。

1829年　ヘーゲルがベルリン大学学長に

1829年には、59歳のヘーゲルは、第18代ベルリン大学学長に選ばれ、１年間つとめた。

晩年は、ブリュッセル、ウィーン、パリなどヨーロッパ各地を休暇旅行した。1827年には、パリ旅行の帰途、ワイマールのゲーテを訪ねた。1830年にフランスで７月革命がおこり、ドイツにも波及したが、ヘーゲルはあまり関心を持たなかった。

1831年　ヘーゲル急死する

1831年、アジア・コレラがドイツで流行した。ヘーゲル一家は郊外に避難したが、流行がおさまったのでベルリンに戻ってきた。ヘーゲルは講義を始めたが、急に体調を崩して死亡した。享年61。

ヘーゲルは、ベルリンのドロテーエンシュタット墓地に埋葬された。ヘーゲル夫妻の墓石は、フィヒテ夫妻の墓石と隣り合って立っている。

1831年～　　ヘーゲル学派の分裂

1831年にヘーゲルが亡くなると、彼の弟子たちは、３つの派閥に分かれた。

①ヘーゲル右派（老ヘーゲル派）

ヘーゲル右派は、ヘーゲルの主張をそのまま肯定し、哲学と宗教とを区別しない。彼らは、ヘーゲル哲学をそのまま保存すべく、彼の著作の刊行・解説につとめた。「老ヘーゲル派」「正統派」「保守的ヘーゲル

主義者」「Hegeliter」とも呼ばれる。代表的な学者は表に示すとおりである。ダウプはヘーゲルをハイデルベルク大学に呼んだ学長である。

②ヘーゲル中央派

ヘーゲル中央派は、哲学と宗教とを区別して扱った。自由主義的ヘーゲル主義者である。ローゼンクランツ（『ヘーゲル伝』の作者）、エルトマン、ミヘレット、マールハイネケ、ガンス、シャラー、ファトケ、シャスラーらがこの派に属した。また、中央派は、教会史のテュービンゲン学派（バウル、ケストリン、ツェラー）に連なる。また、次の世代の歴史主義にもつながる。

③ヘーゲル左派（青年ヘーゲル派）

ヘーゲル左派は、キリスト教を否定し、また、ヘーゲル哲学を批判した人たちである。「青年ヘーゲル派」「Hegelinge」とも呼ばれる。ヘーゲル死後の論争の主導権はこの派にあり、社会的にはこの派の動きが有名である。ヘーゲルのキリスト教の考え方を否定したのが、シュトラウス、シュトラウス、フォイエルバハ、ルーゲ、バウアーらである。また、ヘーゲル哲学の批判から、理性と現実の矛盾を革命で取り除こうとするラサールやマルクスらもこの派に属する。また、「青年ドイツ派」の詩人ハイネも左派につらなる。一方、革命とは逆に、実存主義につながるシュティルナーやキルケゴールも左派につらなる。このように、マルクス主義と実存主義という20世紀の哲学の潮流の出発点にヘーゲル哲学があげられている。「もしヘーゲル哲学が存在しなかったら、マルキシズムも、実存哲学も、分析哲学も生まれてこなかっただろう」（中埜, 1968）という人もいる。

1840年　シェリングをベルリン大学に呼ぶ計画がおこる

ヘーゲルが死亡すると、ヘーゲル学派が分裂し、とくにヘーゲル左派が台頭した。彼らは、一切の既成宗教を否定する傾向があり、プロイセン政府は危機感を強めた。そこで、1840年、ヘーゲルと対決していたシェリングをベルリン大学に呼んで、ヘーゲル学派の力を弱めたいという計画がおこった。シェリングの「積極哲学」が既成宗教を哲学的に基礎づけることを期待した。

1841年　シェリングがベルリン大学教授に

プロイセンのフリードリヒ・ヴィルヘルム４世（在位1840～1861年）が、シェリングをベルリン大学哲学教授として正式に招聘し、1841年にシェリングは、ミュンヘン大学からベルリン大学に移った。ヘーゲルの死後、10年以上も経っていた。この時シェリングはすでに66歳だった。

シェリングがベルリン大学に呼ばれたのは、積極哲学が既成宗教を哲学的に基礎づけることを期待されてのことだったので、これに答えて、シェリングは、「積極哲学」「神話の哲学」「啓示の哲学」といったタイトルの講義をした。ベルリン大学の人々も、積極哲学なるものがいかなる思想であるかを知りたいという期待もあった。シェリングの最初の講義は多数の聴講者であふれた。最初の聴講者の中には、キルケゴール、エンゲルス、バクーニン、ブルクハルトなどがいた。

ベルリン大学の講義において、シェリングは、ヘーゲル哲学を徹底的に批判した。シェリングによると、ヘーゲルは、理性や概念にもとづいて存在を把握しようとしたために、存在を本質としてしか把握できない「消極哲学」にすぎない。存在を存在そのものとして、「現実存在」としてとらえる「積極哲学」をシェリングは主張した。シェリングのいう「消極哲学」とはヘーゲル哲学のことをさしている。つまり、積極哲学をめざすということは、ヘーゲルを批判することであった。シェリングは「ヘーゲル哲学は、私の同一哲学の延長にあるものにすぎない」と考えていた。シェリングは、消極哲学を否定することで、みずからの同一哲学も否定している。いわば自爆テロである。たとえ自爆しても、ヘーゲルを否定したかったのかもしれない。すさまじい敵意である。理論的な装いをしているが、シェリングの積極哲学の底にはヘーゲルへの恨みがあると思われる。

1846年　シェリングはベルリン大学を辞任

しかし、ベルリン大学はすでにヘーゲル学派の牙城となっており、敵地に乗り込んだシェリングに対して批判も強まった。神学者ハインリヒ・パウルスは、イェナ大学時代はシェリングと仲が良かったが、後に仲が悪くなった。1843年に、『ついに顕わとなった啓示の積極哲学』というタイトルでシェリングの講義録を無断で出版した。パウルスの無許可出版に対して、シェリングは訴訟をおこした。ところが、1846年、この裁判にシェリング哲学は負けてしまった。これによって、講義が出版に対して保護されていないことを知って、71歳のシェリングは、大学を辞任した。大学での聴講者の数もしだいに減っていた。

1848年　ヘーゲル学派が消滅する

1848年のドイツ３月革命によって、ドイツ社会では旧勢力（封建制社会）から新勢力（自由主義・社会主義）へと転換がおこった。ヘーゲルの弟子たちによる哲学的運動は、３月革命で終わった。シェリングの宿敵だったヘーゲル学派は消滅し、シェリングの意図ははからずも達成された。その後、19世紀後半には、ヘーゲル哲学は支配力を失い、かわって「新カント派」が主流となったが、ヘーゲル左派の思想は、マルクス主義と実存主義哲学とに受け継がれていくことになる。

1854年　シェリング79歳で死す

1854年8月20日、療養に出かけたスイスの温泉地バート・ラガッツで病を悪化させ、家族に見守られて生涯

を終えた。享年79。シェリングの墓はこのバート・ラガッツにある。同じ年に妻のパウリーネも亡くなった。

６－４．徹底比較　ベルリン大学の３人

３人のベルリン大学時代にも多くの共通点がある。それをまとめたのが、下の表６－４である。

表６－４　徹底比較　ベルリン大学時代の３人

		共通点	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
A 就職前	前職・ベルリン大学までの経歴	波瀾万丈の経歴で大学教授に。ベルリン大学との不思議な因縁のドラマ	浪人→ケーニヒスベルク大学教授→志士（浪人）	バイエルンの「沈黙の時代」→ミュンヘン大学教授	新聞記者→高校校長→ハイデルベルク大学教授
	就職前の業績	すでに多数の著書・論文のある著名な哲学者	自我哲学の著書多数『ドイツ国民に告ぐ』	若い頃は哲学書多数出版。「沈黙の時代」以後著書なし。	『精神現象学』『論理学』などの主著を出版
B 就職の事情	就職人事の特徴	プロイセン政府の政治的な意図からの招聘	学生の愛国心の強化	ヘーゲル左派の沈静化のため、既成宗教の基礎づけ	学生運動の火消し役
	前任者・空席ポストの充当人事	師か弟子の死で空席となった教授ポストを埋める「人事の連鎖」	なし	ヘーゲル（10年前）	フィヒテ（４年前）
	就職時の推薦	プロイセン王国の強い推薦による招聘	プロイセン政府（フンボルト、シュライアマハー）	プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム４世の正式招聘	プロイセン政府（文相アルテンシュタイン）
C 在任中の特徴	大学での地位	教授として招聘され、学長や貴族など社会的名誉を得た	哲学部の教授 初代哲学部長 初代公選学長	哲学部の教授 大学引退後に貴族に列せられる	哲学部の教授 第16代学長
	在任期間	４～13年	1810～1814年　４年間	1841～1846年　５年間	1818～1831年　13年間
	年齢	48～71歳　　中年・晩年	48～52歳(死亡)	66～71歳	48～61歳(死亡)
	在任期間の重なり	重なりはないが「人事の連鎖」あり	なし	なし	なし
	在任中の行動と感情の特徴	プロイセン王国の政治的意図の任務を実現しようと勢力的に活動	学生組合の禁止。シュライアマハーとの対立。反ナポレオンに命を賭ける	既成宗教を基礎づける講義。ヘーゲルを徹底的に批判	学生運動の火消し役として「理性」を強調し学生の心を薫陶
	在任中の哲学の業績	みずから前期思想を否定し、飽くなき進化を遂げ、「後期思想」に達す	後期思想（絶対者の哲学）へと変化。弟子の影響で師の哲学を捨てる。	後期思想の時代。積極哲学によるヘーゲル批判。自らの同一哲学も否定する自爆テロ	ヘーゲル哲学の完成。著書多数。「ヘーゲル学派」の形成
D 師弟関係	師との関係・師への感情	師の哲学を批判し乗り超える。師を「無視」。	師カントの哲学を批判・無視	師フィヒテを批判し乗り越え。	師シェリングの哲学を批判して乗り越え。ベルリン大の人事選で師に勝つ
	師の死への態度	師の死に対して無視・無反応	無視。師の死後、ケーニヒスベルク大学で跡を継ぐ	師の死を無視	（該当なし）
	弟子との関係・弟子への感情	弟子を破門し、理論的に反批判。弟子への失望と怒り、嫉妬（シェリングは「死んだ相手を蹴る」）	弟子シェリングへの失望・破門・怒り。弟子の理論を取り入れる度量	弟子ヘーゲルの出世に嫉妬。自爆テロ的非難。「死んだ相手を蹴る」ほどの敵意	（該当なし）
E 対人関係	対人トラブル	大学での学内政治のトラブル	学生組合・シュライアマハーと対立し学長辞任	ヘーゲル学派との対立。パウルスとの訴訟に負けて辞職。	シュライアマハーと対立
	家庭生活・女性問題	妻子と落ちついた家庭生活	落ちついた家庭生活。妻の看病でチフスがうつり死亡	妻子と落ちついた家庭生活	妻子と落ちついた家庭生活
F 大学を去る	大学を去るきっかけ	病死ないし引退。志なかばでの挫折。無念の死	大学教授の在職中に52歳で急死	71歳で辞職（無許可出版敗訴への抗議）	大学教授の在職中に61歳で急死
	大学を出た時のポスト	教授	教授	教授	教授
	大学を去った後	引退	なし	引退（79歳で病死）	なし
	墓地・埋葬地	フィヒテとヘーゲルは墓石が並ぶ	ベルリン	スイスのラガッツ温泉	ベルリン

注）表１－２、表２－２、表６－５、表７－１は形式を揃えてある。

以下、表６－４にしたがって、以下のＡ～Ｆの６つの点から、３人を比較してみよう。
この表６－４は大きすぎるので、Ａ～Ｆの６つに切り分けて、説明していくことにする。
（以下、ベルリン大学にやってきた順、つまりフィヒテ→ヘーゲル→シェリングの順で述べる。）

Ａ．就職前
Ｂ．就職の事情
Ｃ．在任中の特徴
Ｄ．師弟関係
Ｅ．対人関係
Ｆ．大学を去る

Ａ．就職前

表６－４Ａ　徹底比較　ベルリン大学時代の３人　　Ａ．就職前

		共通点	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
Ａ 就職前	前職・ベルリン大学までの経歴	波瀾万丈の経歴で大学教授に。ベルリン大学との不思議な因縁のドラマ	浪人→ケーニヒスベルク大学教授→志士（浪人）	バイエルンの「沈黙の時代」→ミュンヘン大学教授	新聞記者→高校校長→ハイデルベルク大学教授
	就職前の業績	すでに多数の著書・論文のある著名な哲学者	自我哲学の著書多数『ドイツ国民に告ぐ』	若い頃は哲学書多数出版。「沈黙の時代」以後著書なし。	『精神現象学』『論理学』などの主著を出版

前職・ベルリン大学までの経歴
波瀾万丈の経歴で大学教授に。ベルリン大学との不思議な因縁のドラマ

３人とも、イェナ大学を出た後は、波瀾万丈の経歴を辿って、ベルリン大学に辿り着いた。ベルリン大学に来る前は、他大学の教授のポストに就いていた。３人とベルリン大学には不思議な因縁のドラマがあった。３人とも、決して平坦な道のりを辿って出世したわけではなかった。

フィヒテの前職はケーニヒスベルク大学の教授である。イェナ大学を追われたフィヒテは、その後苦労の連続であった。ケーニヒスベルク大学の教授だったカントが1804年に亡くなって３年後に、フィヒテは、紆余曲折を経て何とかケーニヒスベルク大学の教授に辿り着いたのである。師であるカントの跡を継ぐことができたわけである。ところが、ケーニヒスベルクがナポレオン軍に占領されてしまったため、フィヒテは命からがらケーニヒスベルクを脱出した。このため、ケーニヒスベルク大学でのフィヒテの講義はわずか１学期で終わってしまった。ナポレオン軍に追われて、メーメル（現在はリトアニア領のクライペダ）→コペンハーゲンへと逃げ回り、ナポレオン占領下のベルリンにひそかに帰還した。この当時のフィヒテは、反ナポレオンの政治的な志士であり、ナポレオンや政府からも追われていたのである。幕末の志士のような生き方であり、まるでスパイ小説の主人公のような人生だった。ベルリンでは浪人状態であったが、官僚のバイメに見いだされて、ベルリン大学の創設メンバーとして拾われた。そして、バイメの依頼により、ベルリン大学教育の理念を構想し、「ベルリン大学開設に関する計画書」を提出した。

ヘーゲルの前職はハイデルベルク大学教授である。ヘーゲルがベルリン大学に来るまでには、複雑な経過があった。イェナを逃げ出したヘーゲルは、新聞編集者となり、友人のニートハンマーの紹介で、高校（ギムナジウム）の校長にもぐりこんだ。1816年のベルリン大学のフィヒテの後任を決める投票では、シェリングとフリースに勝ったヘーゲルであったが、当時高校の校長だったヘーゲルの教授としての能力を疑った大臣シュックマンが躊躇した。このため、学長のダウプが呼んでくれたハイデルベルク大学を選んだのである。２年間のハイデルベルク大学での研究・教育生活で、哲学の著書も発表した。これに文部大臣のアルテンシュタインが惚れこんで、ヘーゲルをベルリン大学に呼んだのである。

シェリングの前職はミュンヘン大学教授である。シェリングにとっても、ベルリン大学とは不思議な因縁があり、そこに至る道は波瀾万丈であった。イェナ大学を出てヴュルツブルク大学に移ったシェリングは、バイエルン王室から呼ばれて、ミュンヘンで文化行政に携わった。そこで14年間、大学の外に出て、哲学を離れた「沈黙の時代」に入った。その後、エルランゲン大学を経て、ミュンヘン大学教授となった。ヴュルツブルク大学時代を含めると38年間、バイエルン王国ですごした。シェリングがプロイセン王国の首都ベルリンの大学に呼ばれたのは、バイエルン王室にはショックであっただろう。当時は、大ドイツ主義のバイエルン王国（カトリック）と、小ドイツ主義のプロイセン王国（プロテスタント）が覇権をめぐって対立していたからである。シェリングが哲学を離れて「沈黙の時代」に落ち込んだ原因のひとつは、こうした政治的

・宗教的対立に巻き込まれたことにもある。シェリングはすでに65歳になっていたが、それでも、ベルリン大学からの誘いを断ることができなかった。昔、ベルリン大学の教授選でヘーゲルに負けたときの悔しさを忘れておらず、「これでヘーゲルに対するリベンジができる」と思ったのである。その時はヘーゲルが死んで10年もたっていたにもかかわらず、ヘーゲルへの恨みが勝った。

就職前の業績
すでに多数の著書・論文のある著名な哲学者

３人ともすでに著名な哲学者となっており、多数の著書・論文があった。

フィヒテの自我哲学の業績はすでに高く評価されていたが、それよりも、ベルリン大学からの招聘において重要だった業績は、『ドイツ国民に告ぐ』という連続講演であろう。彼は命がけでドイツ国民に愛国心を訴えた。今のドイツには、利己的な心理に凝り固まっており、これがナポレオン軍の侵入を許した。フランス革命に対してフィヒテは若い頃に心酔したが、その革命の精神をナポレオンは踏みにじった。ドイツは、外国の支配に安住するか、抵抗するか。この屈辱を克服するには新しい教育によらなければならない。この新しい教育は、ペスタロッチの方法によって、主体的な精神を重んじなければならない。こうした教育によって真にドイツ国民の共同意識が目覚めたとき、はじめてドイツ国民は失われた独立を回復するだろう。こうした反ナポレオン思想を述べることは、当時は命がけのことであり、実際にナポレオンを批判して処刑された人もいた。愛国的な講演はドイツ中の若者を熱狂させた。こうした哲学者には珍しい政治的行動力はプロイセン政府から評価され、ベルリン大学の初代哲学部長として招聘された。

ヘーゲルも、多くの著書を出版していた。イェナ時代に第１の主著『精神現象学』を発表し、高校校長時代に第２の主著『論理学』を出した。ハイデルベルク大学時代には、第３の主著『哲学のエンチクロペディ』を出版し、高い評価を得ていた。

シェリングは、23歳のイェナ大学時代ですでに数冊の自然哲学の著書を出すなど、早熟の天才であった。その後、超越論的観念論や同一哲学についての主著を出版し、フィヒテ以上の時代の寵児となった。ところが、ミュンヘンに移ってからは、大学とも哲学とも離れて「沈黙の時代」に入った。それ以降は、哲学の著書は出版していない。ベルリン大学に呼ばれた時は、すでに最盛期をすぎた老人であり、すでに「過去の人」とみられるようになっていた。ヘーゲルを批判して、「もう一花咲かせよう」と思ったのだろう。

Ｂ．就職の事情

表６－４Ｂ　徹底比較　ベルリン大学時代の３人　　Ｂ．就職時の事情

		共通点	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
Ｂ 就職時の事情	就職人事の特徴	プロイセン政府の政治的な意図からの招聘	学生の愛国心の強化	ヘーゲル左派の沈静化のため、既成宗教の基礎づけ	学生運動の火消し役
	前任者・空席ポストの充当人事	師か弟子の死で空席となった教授ポストを埋める「人事の連鎖」	なし	ヘーゲル（10年前）	フィヒテ（４年前）
	就職時の推薦	プロイセン王国の強い推薦による招聘	プロイセン政府（フンボルト、シュライアマハー）	プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム４世の正式招聘	プロイセン政府（文相アルテンシュタイン）

就職人事の特徴
プロイセン政府の政治的な意図からの招聘

３人とも、ベルリン大学に呼ばれた大きな理由は、プロイセン政府の政治的な意図であった。３人がベルリン大学に呼ばれた理由は、学生運動対策や社会運動対策という国家の政治的な思惑からであった。意外なことだが、ドイツ観念論哲学のビッグ３といえども、純粋に哲学者としての業績だけで招聘されたわけではないのである。大哲学者といえども、政治というナマくさい状況にドップリと浸かって、懸命に生きていたわけである。

フィヒテは、ドイツ中の若者を熱狂させた講演『ドイツ国民に告ぐ』の功績もあって、ベルリン大学の学生の愛国心を強化し、学生運動に対応することが期待されていた。事実、フィヒテは学長就任演説において、学生に向かって管理主義宣言をおこない、学生運動を強く取締った。

ヘーゲルが1818年にベルリン大学に呼ばれたのも、学生運動の火消し役としてであった。当時のベルリン大学は、学生のブルセンシャフト運動に手を焼いており、それを権力で弾圧するのではなく、冷静な哲学を身につけさせることで、この運動を沈静化しようとした。そのために最もふさわしいのが、理性を重視するヘーゲルの哲学だと考えたのである。ヘーゲルはその期待に答えた。

シェリングが1841年にベルリン大学に呼ばれた理由は、ヘーゲル左派の社会運動を沈静化させるためであった。1931年にヘーゲルが死亡すると、ヘーゲル学派は３つに分裂し、ヘーゲル左派が台頭した。彼らは、一切の既成宗教を否定したので、プロイセン政府はシェリングを呼んで、彼の積極哲学によって既成宗教を哲学的に基礎づけてくれることを期待したのであった。
このように、

前任者・空席教授ポストの充当人事
師か弟子の死で空席となった教授ポストを埋める人事の連鎖

３人が重なって在席していた時期はないけれども、実質的には、３人の間には、人事上の連鎖があった。つまり、師や弟子の死によって空席となった教授ポストの後任として呼ばれたからである。ここには、フィヒテ→ヘーゲル→シェリングという教授ポストの連鎖があったのである（もっとも、この連鎖はストレートなものではなかったけれども）。
こうした連鎖は意外に知られていないので、ベルリン大学時代の３人を比較することはあまりなかった。大学論という視点からみて初めて、明らかになる連鎖なのである。

フィヒテの場合は、ベルリン大学は創設されたばかりなので、前任者はいない。なお、ベルリン大学ではないが、ケーニヒスベルク大学の教授だったカントが1804年に亡くなって３年後に、フィヒテはケーニヒスベルク大学教授となり、師のカントの跡を継くことができた。
ヘーゲルの前任者はフィヒテである。フィヒテが亡くなって４年後、その後任の教授ポストにヘーゲルが呼ばれた。ヘーゲルが赴任するまでは前述のように紆余曲折があった。
シェリングの前任者はヘーゲルである。ヘーゲルの死後に空席となった教授ポストには、10年という間があいたが、シェリングが呼ばれた。

就職時の推薦
プロイセン王国の強い推薦による招聘

３人ともプロイセン政府からの強い推薦があってベルリン大学に招聘された。
フィヒテは、プロイセン政府の官僚バイメの強い推薦を受けた。バイメは失脚したが、フンボルトとその補佐をしたシュライアマハーがベルリン大学を創設し、フィヒテを初代哲学部長として招聘した。
ヘーゲルは、ベルリン大学のフィヒテの後任の投票では選ばれたが、大臣シュックマンには高く評価されなかったので、ベルリン大学には行けなかった。学長だった神学のダウプが推薦してくれたハイデルベルク大学に就職した。２年後、ヘーゲルの著書を読んだ文部大臣のアルテンシュタインがヘーゲルをベルリン大学に呼んだ。
シェリングは、プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム４世からの正式な招聘で、ベルリン大学の哲学教授となった。

Ｃ．在任中の特徴

表６－４Ｃ　徹底比較　ベルリン大学時代の３人　　Ｃ．在任中の特徴

		共通点	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
Ｃ在任中の特徴	大学での地位	教授として招聘され、学長や貴族など社会的名誉を得た	哲学部の教授 初代哲学部長 初代公選学長	哲学部の教授 大学引退後に貴族に列せられる	哲学部の教授 第16代学長
	在任期間	４～13年	1810～1814年　４年間	1841～1846年　５年間	1818～1831年　13年間
	年齢	48～71歳　中年・晩年	48～52歳(死亡)	66～71歳	48～61歳(死亡)
	在任期間の重なり	重なりはないが「人事の連鎖」あり	なし	なし	なし
	在任中の行動と感情の特徴	プロイセン王国の政治的意図の任務を実現しようと勢力的に活動	学生組合の禁止。シュライアマハーとの対立。反ナポレオンに命を賭ける	既成宗教を基礎づける講義。ヘーゲルを徹底的に批判	学生運動の火消し役として「理性」を強調し学生の心を薫陶
	在任中の哲学の業績	みずから前期思想を否定し、飽くなき進化を遂げ、「後期思想」に達す	後期思想（絶対者の哲学）へと変化。弟子の影響で師の哲学を捨てる。	後期思想の時代。積極哲学によるヘーゲル批判。自らの同一哲学も否定する自爆テロ	ヘーゲル哲学の完成。著書多数。「ヘーゲル学派」の形成

大学での地位
教授として招聘され、学長や貴族など社会的名誉を得た

３人ともベルリン大学哲学部の教授として招聘された。その後、学部長や学長の要職を占めたり、貴族に列せられたり、社会的名誉を得た。
フィヒテは、哲学部の教授、初代哲学部長として招聘され、翌年には選挙で学長に選ばれ、初代公選学長となった。
ヘーゲルは、哲学部の教授として招聘され、のちに選挙で学長に選ばれ、第16代学長となった。
シェリングは、哲学教授として招聘されたが、高齢のため、大学の役職にはつかなかったようだ。大学を退職したあと、バイエルン国王から社会的名誉を得た。バイエルンのマキシミリアン２世は、シェリングに対する尊敬を持ち続け、1849年には、大学を引退したシェリングに対してバイエルン大十字勲章を与え、1853年にはシェリングを貴族に列した。

在任期間
４年～13年

３人がベルリン大学に在任した期間は、４年～13年である。
フィヒテの在任期間は、1810～1814年のわずか４年間である。
ヘーゲルの在任期間は、1818～1831年の13年間である。ヘーゲルが最も長く在任し、影響力も最も大きかった。
シェリング５の在任期間は、1841～1846年のわずか５年間であった。

年齢
中年～晩年～死

３人のベルリン大学在任は、中年期から晩年である。
フィヒテが在任したのは48～52歳であり、中年後期の働き盛りで赴任し、52歳で早死にした。
ヘーゲルが在任したのは48～61歳であり、同じく中年後期の働き盛りで赴任した。
シェリングが在任したのは66～71歳と、かなり高齢である。

在任期間の重なり
重なりはないが、空席となったポストを埋める人事という連鎖

３人の在任期間には時間差があり、重なって在席していた時期はない。ここがイェナ時代との大きな違いである。
しかし、前述のように、師か弟子の死で空席となった教授ポストを埋める人事という強い連鎖があった。これが人間ドラマの第２幕を作ったといえる。

在任中の行動と感情の特徴
プロイセン王国の政治的意図の任務を実現しよう勢力的に活動

３人とも、在任中には、プロイセン王国の政治的意図の任務を実現しようとして、勢力的に活動した。その結果、シュライアマハーとの対立を生んだ。

フィヒテは、学生の愛国心を強化し、学生運動に対応することが期待されて赴任したので、学生組合に対して強く当たった。学長就任でおこなった演説「大学の自由を妨げるただひとつの可能性について」は、学生への管理主義宣言である。フィヒテは、学生たちの決闘や乱暴行為（下級生いじめのペンナリズム）や、独善的な学生組合について、「大学の自由」を妨げるものとして否定した。フィヒテは、イェナ大学時代と同じように、ベルリン大学でも学生組合を禁止しようとして、学生組合から恨まれた。学生たちはケンカをして、大学当局から処罰を受けたが、学生組合に対して妥協的だったシュライアマハーらと対立した。これにより、教員集団がフィヒテ派とシュライアマハー派に二分され、業を煮やしたフィヒテは、ついに学長を辞任せざるを得なくなった。
さらに、晩年のフィヒテの行動と感情として特筆すべきことは、ナポレオンとの戦いに命を賭けたことである。フィヒテがケーニヒスベルク大学に行ったのは、プロイセンがナポレオン軍に占領されて、プロイセン臨時政府がケーニヒスベルクに作られたからである。また、フィヒテは、ナポレオン軍占領下のベルリンで、命をかけて講演『ドイツ国民に告ぐ』をおこない、ドイツ国民に愛国心を訴えた。ここで、軍に捉えられて殺されてもおかしくなかった。実際にナポレオンを批判して処刑された人もいたのである。1813年に、プロイセンはナポレオン軍に宣戦し、戦争が始まると、フィヒテは、大学教授という身分にもかかわらず、国境守備隊に入ろうとした。もし志願が許されていたら、そこで戦死しておかしくなかった。しかし、志願が断られたので、フィヒテの代わりに、夫人ヨアンナが篤志看護師として働いた。そして、兵士からヨアンナにうつったチフスが、フィヒテに感染し、彼の命を奪うことになった。こうしてみると、フィヒテの死はナポレオン戦争における戦死といっても過言ではない。
ナポレオンという存在は、当時のドイツの大学人にきわめて多大な迷惑をかけた。前述のように、ヘーゲルがイェナ大学を去るひとつのきっかけはナポレオン軍のイェナ占領であった。また、ヘーゲルの弟はナポレオン戦争で戦死した。

ヘーゲルは、「学生運動の火消し役」という自分の政治・教育的な役割を理解し、学生の心を薫陶しようとした。第４の主著『法の哲学』を出版し、その内容を学生たちに何回も講義したのは、そのあらわれであろう。この本ではやたら「理性」ということが強調されるのである。「学生運動の火消し役」という立場は、ヘーゲルの政治的な立場とも一致する。ヘーゲルは、フランス革命のような自由な政治をプロイセン国家に認めて、積極的に協力した。当時のドイツは小国に別れて対立しており、こうした状況では自由は実現できず、ドイツが統一され「国家」という形ができてはじめて「自由」が実現される。シュタインやハルデンベルクのプロイセン改革は、そうした自由を実現する国家を作るためであり、ヘーゲルはそれに期待してベルリン大学に来た。ヘーゲルは、フィヒテと同じように、ブルセンシャフトの過激な運動は「自由」とは折り合わない非理性的なものとして批判した。学生のブルセンシャフト運動を扇動した哲学者フリースに対して、ヘーゲルは『法の哲学』の中で罵倒した。このため、ベルリン大学の中で、学生運動に妥協的だったシュライアマハーと対立することになった。ふたりの対立はヘーゲルの死まで続いた。

シェリングは、既成宗教を否定するヘーゲル左派に対抗して、既成宗教を哲学的に基礎づけるために呼ばれた。このため、シェリングは「神話の哲学」「啓示の哲学」といった講義をおこない、ヘーゲルを批判した。すでにヘーゲルの死後10年以上もたっていたのだが、シェリングは、ヘーゲルを批判する講義をした。「ヘーゲル哲学は、私の同一哲学の延長にあるものにすぎない（私の哲学を盗んだもの）」と考えていた。学問の装いをとっているが、シェリングの積極哲学の底には、ヘーゲルに対する恨みがある。シェリングのいう「消極哲学」とはヘーゲル哲学のことをさしている。つまり、積極哲学をめざすということは、ヘーゲルを批判することであった。シェリングは、消極哲学を否定することで、みずからの同一哲学も否定している。いわば自爆テロである。たとえ自爆しても、ヘーゲルを否定したかったのかもしれない。すさまじい敵意である。

在任中の哲学の業績
みずから前期思想を否定し、飽くなき進化を遂げ、「後期思想」に達す

３人とも、それぞれの前期思想に満足せず、飽くなき進化を遂げ、それぞれの「後期思想」と呼ばれる境地に達している。前期思想の業績にとどまらず、さらなる深化をめざし、みずからの前期思想を否定してまで、前に進み続けたのはすごいことである。

フィヒテは、ベルリン大学で教鞭をとったのはわずか４年であり、学長職にあったためか、ベルリン大学

教授として出した著書は、学長就任演説のみである。ベルリン大学での講義は、「意識の事実」「知識学」「超越論的論理学」「法律論」「道徳論」などであった。フィヒテの聴講生としてショーペンハウアーがいる。フィヒテは、イェナ大学を追われベルリンで浪人となった頃から、自我哲学の立場から、「後期思想」である絶対者の哲学へと移っていった。弟子のシェリングの絶対者の哲学に影響を受けて、師のカントの哲学を捨てたことになる。後期思想は、1800年の著書『人間の使命』で明らかとなり、1801年『知識学の叙述』、1804年『知識学』、1806年『浄福な生への指教』など、年ごとに強くなった。こうした後期思想はベルリン大学時代にも引き継がれた。

ヘーゲルは、ベルリン大学に来て、48歳にしてやっと歴史の表舞台に立った。第４の主著『法の哲学』をはじめ、多数の著書を発表した。いわゆる「ヘーゲル哲学」が完成したのはベルリン大学時代である。週に10時間は講義をした。ヘーゲルの哲学は学生の心を引きつけ、彼の講義には学生だけでなく、公務員や政府高官も聴講した。1823年からは、ヘーゲルの弟子が、ヘーゲルの著作を教科書として、教科書通りにヘーゲル哲学を講義することもおこなわれた。ドイツの各大学では、ヘーゲル的な哲学が講義されるようになり、ドイツだけでなくヨーロッパ各地にも広がった。こうして、ヘーゲルを信奉する哲学者が増えて、1823年頃から、いわゆる「ヘーゲル学派」が形成された。『ベルリン年報』という雑誌を創刊し、論敵シュライアマハーなどを批判する論文を書かせて、発表させ、「ヘーゲル新聞」と揶揄された（フィッシャー、1901）。みずからジャーナルを刊行し、それをもって自派の勢力を誇示する方式を最初に発明したのはヘーゲルのこの雑誌だという（潮木、1992）。ベルリン時代の13年間は、ヘーゲルの栄光の時代である。

シェリングは、ベルリンに来る前から「後期思想」の時代に入っていた。後期思想は「啓示と神話の哲学」と呼ばれ、絶対者（＝神）の哲学である。彼は理性主義を捨てて、非理性主義の思想へと向った。そして、彼が最終的に行き着いた立場は『積極哲学』と呼ばれる。ヘーゲルを含めて、これまでの哲学は、本質について論じる「消極哲学」にすぎない。シェリングのこれまでの同一哲学ですら、消極哲学にすぎなかった。これに対し、真の哲学というものは、「事物がなぜ現実に存在するか」を問題にする「積極哲学」でなければならない。こうして、シェリングはヘーゲル哲学を徹底的に批判した。それは同時に、シェリング自身のそれまでの同一哲学を否定することでもあった。ヘーゲル批判が自爆テロだというのはこういう意味である。しかし、積極哲学とは、困難な茨の道である。シェリングは、ベルリン大学の就任演説で、積極哲学とは、「今まで不可能と考えられていた学問」を付け加えようとするのだと言う。シェリングは、ミュンヘン時代から「沈黙の時代」に入り著書を出さなくなったが、弟子たちが記録した講義録から内容が伝わっている。シェリングの後期思想は、のちの実存主義哲学の先駆となったことで、再評価されている。

Ｄ．師弟関係

表６－４Ｄ　徹底比較　ベルリン大学時代の３人　　Ｄ．師弟関係

		共通点	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
Ｄ 師弟関係	師との関係・師への感情	師の哲学を批判し乗り超える。 師を「無視」。	師カントの哲学を批判・無視	師フィヒテを批判し乗り越え。	師シェリングの哲学を批判して乗り越え。ベルリン大の人事選で師に勝つ
	師の死への態度	師の死に対して無視・無反応	無視。師の死後、ケーニヒスベルク大学で跡を継ぐ	師の死を無視	（該当なし）
	弟子との関係・ 弟子への感情	弟子を破門し、理論的に反批判。弟子への失望と怒り、嫉妬（シェリングは死んだ相手を蹴る）	弟子シェリングへの失望・破門・怒り。弟子の理論を取り入れる度量	弟子ヘーゲルの出世に嫉妬。自爆テロ的非難。死んだ相手を蹴るほどの敵意	（該当なし）

３人とも、ベルリン大学にやってきた時は、多くの業績をあげた熟年の大家であったが、師を裏切ったり、弟子を破門するといった激しい行動は相変わらずであった。年齢をとっても、彼らはちっとも丸くなっていない。打算と裏切りの人間ドラマの第２幕である。

師との関係・師への感情
師の哲学を批判し乗り超える。師を「無視」

ベルリン大学においても、イェナ大学の時ほどではないものの、師弟関係が続いている。３人の共通点は、師の哲学を批判して、乗り超えようとする点である。師に対する感情は、いずれも「無視」であり、師の死に対しても無反応である。師の哲学を批判して乗り越えるという学問的行為の底には、そうした冷酷さが潜んでいる。

弟子フィヒテ→師カント　　師カントの哲学を批判、無視

フィヒテは、イェナ時代に師のカント哲学を補おうとして自我哲学を打ち立てたが、フィヒテはカント哲学を批判し、２人の関係は冷めたものになる。フィヒテの自我哲学はカント哲学にならって無神論に近かったが、無神論論争をへて、1799年以降の「後期思想」においては、フィヒテは有神論へと移動した。フィヒテの後期思想の有神論は、1800年の著書『人間の使命』で明らかとなる。つまり、カントの哲学からどんどん離れて行った。それに対して、カントは1799年に公然とフィヒテを批判し、２人は絶縁状態となった。フィヒテは「後期思想」になると、カント哲学を捨てたことになる。師カントに対して無視の態度となったようである。1804年にカントは亡くなり、1807年、フィヒテは、カントの後を継いでケーニヒスベルク大学の教授になった。そして、1810年に、フィヒテはベルリン大学に呼ばれたが、ここでもカントに対する批判・無視の態度は変わらなかった。

弟子ヘーゲル→師シェリング　　師シェリングの哲学を批判して乗り越え。ベルリン大の人事選で師に勝つ

ヘーゲルは、1807年『精神現象学』において、カント、フィヒテ、シェリングを批判したが、最も強い批判を加えたのは師のシェリング哲学に対してであった。これによって、シェリングから不満の手紙が届き、２人の師弟関係は終わった。実質上の破門であり、絶交を言い渡したことになる。

1816年、ベルリン大学でのフィヒテの後任人事選考において、ヘーゲルはシェリングに勝った。これによって、２年後にはヘーゲルはベルリン大学教授として招聘された。

ベルリン大学において、ヘーゲルは次々と大著を出版し、ヘーゲル哲学はたちまちドイツ哲学界の主流をなした。これに対して、シェリングは、ミュンヘンで文化行政に携わっており、大学人ではなかったため、ヘーゲルは相手にしていなかっただろう。1812年にニュルンベルクで、1829年にカルルスバートで、ヘーゲルは師シェリングと偶然に出会ったが、ふたりとも冷たく分かれた。このような無視の態度は、1831年のヘーゲルの死まで続いた。

弟子シェリング→師フィヒテ　　師フィヒテを批判し乗り越え

シェリングは、フィヒテ哲学から出発し、イェナ時代には、①自我哲学、②自然哲学、③汎神論、④自我哲学と自然哲学の同等性、⑤絶対者の哲学へ、⑥美的観念論という発展を辿って、⑦同一哲学を完成させたのである。師の自我哲学から始まって、師とは違った結論に達した。フィヒテがイェナ大学を追われると、シェリングは手の平を返したように、フィヒテに冷たくなった。そもそもシェリングは自身の考えを貫く性格なので、師のフィヒテへの尊敬はあまりなかったのかもしれない。しかも、シェリングは、ヘーゲルをイェナ大学に呼んで、タッグを組んでフィヒテと対峙しようとし、ヘーゲルもそれによく応えた。シェリング

の1800年の論文『超越論的観念論の体系』によって、シェリングはフィヒテから破門され、ふたりは絶交した。1806年には、シェリングがフィヒテを公然と批判した。
　1810年に、フィヒテがベルリン大学教授となり、1814年には病死した。これについて、当時ミュンヘンで文化行政に携わっていたシェリングは、何も反応を示していない。シェリングにとっては、フィヒテの死そのものよりも、1816年のベルリン大学でのフィヒテの後任人事に関心があっただろう。この選考で、シェリングはヘーゲルに敗れて大きなショックを受ける。これによってヘーゲルへの憎悪に火がついたのかもしれない。シェリングは、66歳でベルリン大学に呼ばれたが、フィヒテという存在はもう昔のことであり、何も影響もなかった。

師の死への態度
師の死に対して無視・無反応

　フィヒテとシェリングは、師の死を迎えているが、いずれも、それに対して無視・無反応である。イェナ時代は大学への就職であれだけ世話になっていながら、手の平を返すような態度であり、冷淡である。

　フィヒテは、1804年に亡くなったカントに対し無反応であった。1807年、フィヒテは、カントの後を継いでケーニヒスベルク大学の教授になった。

　ヘーゲルは、師のシェリングより長生きしたため、師の死を体験しなかった。むしろ、師のほうが、弟子の死を体験した。

　シェリングは、フィヒテから破門されて絶交状態にあり、1814年に病死したフィヒテに対して何も反応を示していない。そもそも、フィヒテの哲学は、ドイツ社会への政治的影響は大きかったけれども、シェリングへの学問的影響は少なく、師が死んでもあまり動かされなかったのかもしれない（弟子のヘーゲルに対する強烈な憎悪とは対照的である）し、当時のシェリングは大学を離れていたので、哲学界のことに無関心になっていた時期だったのかもしれない。

弟子との関係・弟子との感情
弟子を破門し、理論的に反批判。弟子への失望と怒り、嫉妬（シェリングが顕著）

　３人とも、弟子を破門し、理論的に反批判を加えた点で共通する。その底には、弟子への失望と怒り、嫉妬といった強いネガティブ感情がある。
　ただ、その程度には違いがあり、フィヒテは弟子の理論を取り入れるという度量があったが、シェリングは、死者にムチ打つようなすさまじい敵意がある。ドイツ観念論哲学の人間ドラマ第２幕において、で最も迫力のある関係と言ってもよいだろう。

師フィヒテ→弟子シェリング　弟子シェリングへの失望・破門・怒り。一方で弟子の理論を取り入れる度量
　フィヒテは、シェリングを自分の弟子を作ろうとイェナ大学に呼んだ。シェリングに対して強い期待を持っていた。しかし、フィヒテがイェナ大学を追われると、シェリングは手の平を返したように、フィヒテに冷たくなった。フィヒテはもシェリングの1800年の論文『超越論的観念論の体系』を読んで、飼い犬に手をかまれたという反感を持った。期待が大きかった分、失望や怒りも強かったに違いない。始めは手紙で説得しようとした。はじめの頃の手紙は、互いに相手を尊敬し、意見の調停に努めるという態度が保たれていたが、しかし、しだいに論難するようになり、ついには感情的に対立した。互いの理論を批判する戦いが続いた。1802年１月のシェリングからの手紙で、ふたりの文通は終わった。フィヒテが弟子のシェリングを破門し、ふたりは絶交した。1806年にはシェリングがフィヒテを公然と批判した。1810年にベルリン大学教授となったフィヒテは、シェリングに対する絶交は変えず、1814年にフィヒテが亡くなるまで、ふたりが交流することはなかった。
　ところが、フィヒテは、シェリングを一方的に批判するだけではなかった。フィヒテは、その「後期思想」において、自我哲学からしだいに絶対者の哲学へと考えを変えていくが、そうした変化をもたらしたのは、弟子のシェリングの絶対者の哲学だったとも言われる。フィヒテは、シェリングの哲学は批判していたけれども、シェリングが提起した問題の意義を十分に認めて、それを解決しようとした。それによって、フィヒテの思想は、前期から後期へと変わっていった。つまり、弟子（シェリング）の影響を受けて、師（カント）の哲学から離れていったことになる。これは特筆すべきことである。
　ドイツ観念論哲学の３人は、師や弟子を批判ばかりして、唯我独尊の態度を取るのであるが、ただ、晩年のフィヒテのシェリングに対する素直な態度だけは例外である。人間的には少しホッとするけれども、哲学史の上では、中途半端な妥協的行為として低く見られるのかもしれない。

師シェリング→弟子ヘーゲル　弟子ヘーゲルの出世に嫉妬　自爆テロ的非難　死んだ相手を蹴るほどの敵意
　シェリングは、ヘーゲルの『精神現象学』で批判され、ヘーゲルに不満の手紙を書いて、絶交を言い渡し

た。実質上の破門であり、２人の師弟関係は終わった。その後、２回だけ出会う機会があった。1812年にニュルンベルクで、1829年にカールスバーグで、シェリングは偶然ヘーゲルと出会ったが、ふたりとも冷たく分かれた。1816年、ベルリン大学でのフィヒテの後任人事選考において、シェリングはヘーゲルに敗れ、ヘーゲルへの憎悪に火がついた。

1818年、ヘーゲルはベルリン大学教授として呼ばれた。ヘーゲルは次々と大著を出版し、ヘーゲル哲学はたちまちドイツ哲学界の主流をなしていった。これに対して、シェリングは、ミュンヘンにおいて、すっかり栄光から遠のき、今をときめくベルリンのヘーゲルを羨望の目で眺めつつ、落魄の日々を送ることになった。ヘーゲルよりも先に哲学界にデビューし、フィヒテ以上の時代の寵児となったシェリングが、20年後にはすっかり栄光から遠のき、ヘーゲルに水をあけられてしまった。ここには、哲学界のトップに登りつめたヘーゲル哲学への強い嫉妬があるだろう。ミュンヘンのシェリングのもとをハイネが尋ねた時に、シェリングは「わしのアイディアをヘーゲルは奪い取った」とぐちったという。

1831年、ヘーゲルが亡くなった。シェリングはすぐにはヘーゲル批判を公にはしなかったが、３年後の1834年、クーザンの著書に序文を寄せて、ひそかにヘーゲルを批判した。

ヘーゲルの死後10年がたち、66歳のシェリングはベルリン大学に招聘された。ヘーゲル哲学の牙城のベルリン大学に呼ばれたわけだが、シェリングはヘーゲル哲学を徹底的に批判し続けた。シェリングは「ヘーゲル哲学は、私の同一哲学の延長にあるものにすぎない（私の哲学を盗んだもの）」と考えていた。学問の装いをとっているものの、シェリングの積極哲学の底には、ヘーゲルに対する恨みがある。シェリングが批判する「消極哲学」とはヘーゲル哲学のことをさしている。つまり、積極哲学をめざすということは、ヘーゲルを批判することであった。シェリングは、消極哲学を否定することで、みずからの同一哲学も否定している。いわば「自爆テロ」であり、自分を切りつつ、ヘーゲルを切るのである。たとえ自爆しても、ヘーゲルを否定したかったわけである。すさまじい敵意である。ヘーゲルへの恨みが根底にあり、理論的批判を装って、攻撃を加えている。

ヘーゲルはすでに死んでいるわけであるから、シェリングの攻撃は「死者にムチ打つ」行為である。プロレスで言えば、「死んだ相手を蹴る」ような反則である。66歳のシェリングの静かな、しかし執念深い恨みである。ドイツ観念論哲学の人間ドラマで最もすさまじい感情といえるだろう。

Ｅ．対人関係

表６－４Ｅ　　徹底比較　ベルリン大学時代の３人　　Ｅ．対人関係

		共通点	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
Ｅ対人関係	対人トラブル	大学での学内政治のトラブル	学生組合・シュライアマハーと対立し学長辞任	ヘーゲル学派との対立。パウルスとの訴訟に負けて辞職。	シュライアマハーと対立
	家庭生活・女性問題	妻子と落ちついた家庭生活	落ちついた家庭生活。妻の看病でチフスがうつり死亡	妻子と落ちついた家庭生活	妻子と落ちついた家庭生活

対人トラブル
大学での学内政治のトラブル

３人とも、ベルリン大学において、学内政治のトラブルを抱えた。

フィヒテは、ベルリン大学の学生組合と対立し、教員のシュライアマハーたちと対立した。これによって、フィヒテは学長を辞任することになった。

ヘーゲルは、ベルリン大学時代には、学生運動のコッツェブー殺人事件をめぐって、シュライアマハーと対立した。ふたりの対立はヘーゲルの死まで続いた。
このように、シュライアマハーは、ベルリン大学において、フィヒテやヘーゲルとやり合ったライバルである。ある意味では、シュライアマハーがスパーリング・パートナーをつとめたからこそ、ドイツ観念論哲学は鍛えられたといえる。

シェリングは、ヘーゲル学派の牙城のベルリン大学において、ヘーゲルを批判したため、ヘーゲル学派から批判を受けた。シェリングの講義録を無断で出版したハインリヒ・パウルスに対して、シェリングは訴訟をおこしたが、負けてしまった。これに抗議して、シェリングは71歳でベルリン大学を辞職した。

家庭生活・女性問題
妻子と落ちついた家庭生活

３人とも、ベルリン大学時代には、妻と子女とともに落ちついた家庭生活を送った。以前のような女性とのスキャンダルはおこしていない（表に出なかっただけかもしれないが）。

フィヒテは、イェナ大学に就職する前年にヨハンナ・ラーンと結婚し、イェナ大学時代にひとり息子が生まれた。ベルリン大学時代には、妻のヨハンナが篤志看護師として勤務するうちに、チフスを発症し、妻を看病したフィヒテがチフスで死亡した。夫婦の関係を端的に示すエピソードであろう。フィヒテは、女性関係はまじめで、ひとりの女性ヨアンナと添い遂げた。

ヘーゲルは、イェナ時代に、ブルクハルト夫人と不倫関係になり、婚約したが、逃げて不履行となった。子が生まれたのに、母子を置いてイェナから逃げ出した。のちに、その子は海外で亡くなった。ヘーゲルは、こうした過去がなかったかのように、20歳年下の良家の娘マリー・トゥヘルと結婚し、３人の子供をさずかり、落ちついた家庭生活を送った。ブラック・ヘーゲルの面目躍如である。

シェリングは、イェナ時代には、シュレーゲル（兄）の妻だったカロリーネと不倫関係となり、スキャンダルとなった。イェナ大学を去ったシェリングは、夫と離婚したカロリーネと結婚したが、６年後にカロリーネは病死してしまった。その３年後に、シェリングは、パウリーネ・ゴッダートと結婚し、息子３人と娘３人をもうけ、落ちついた家庭生活を送ることになった。ベルリン時代もそうした生活が続いた。シェリングとその妻パウリーネは同じ年に亡くなった。

Ｆ．大学を去る

表６－４Ｆ　徹底比較　ベルリン大学時代の３人　　Ｆ．大学を去る

		共通点	フィヒテ	シェリング	ヘーゲル
Ｆ 大学を去る	大学を去るきっかけ	病死ないし引退。志なかばでの挫折。無念の死	大学教授の在職中に52歳で急死	71歳で辞職（無許可出版敗訴への抗議）	大学教授の在職中に61歳で急死
	大学を出た時のポスト	教授	教授	教授	教授
	大学を去った後	引退	なし	引退（79歳で病死）	なし
	墓地・埋葬地	フィヒテとヘーゲルは墓石が並ぶ	ベルリン	スイスのラガッツ温泉	ベルリン

大学を去るきっかけ
病死ないし引退。志なかばでの挫折。無念の死

３人は病死ないし引退によってベルリン大学を去った。３人にとって、ベルリン大学に呼ばれた目的が政治的なものであったため、その目的を達する前に死亡・引退することは、志なかばでの挫折である。その意味では、３人とも、ドイツの政治史と関わる激しい人生だったと言える。死は無念の死であった。

フィヒテは、ベルリン大学教授の在職中に急死した。フィヒテの人生はナポレオン軍との戦争というドイツの歴史と深くかかわったものであった。プロイセンは1813年、「諸国民の戦い」と呼ばれるライプチヒの戦いで勝利し、ナポレオン軍を追い出したが、この前年の戦いに関連して、フィヒテは病死した。妻のヨハンナが篤志看護師として勤務するうちにチフスにかかり、それを看病したフィヒテにチフスがうつって死亡した。戦争の犠牲者として死んだといえる。彼は大学教授として在職中に52歳で病死した。これから哲学者として活躍するという年齢であり、死は志なかばでの挫折であった。無念の死である。フィヒテは、ドイツの政治史と直接関わる激しい死を迎えたと言える。

ヘーゲルも、ベルリン大学教授の在職中に急死した。アジア・コレラがドイツで流行し、ヘーゲル一家は郊外に避難したが、流行がおさまってベルリンに戻ってきた。ヘーゲルは講義を始めたが、急に体調を崩して死亡した。現職の教授として、授業をした翌日に急死したのである。ヘーゲル学派を形成し、哲学の主流の位置についたが、61歳でまだまだこれから活躍するという時に急死した。学生運動を哲学によって薫陶するという目的は、志なかばで挫折した。ヘーゲルの死も、ドイツ政治史と直接関わる無念の死であったと言えよう。

シェリングは、71歳でベルリン大学を辞職した。シェリングにとって、ヘーゲル学派の牙城だったベルリン大学に行くことは敵地に乗り込むようなものだった。すぐにシェリングへの批判が現れ、聴講生も減った。さらに、シェリングの講義録を無断で出版したパウルスに対して、シェリングは訴訟をおこしたが、負けてしまった。敗訴への抗議として、シェリングは71歳でベルリン大学を辞職した。シェリングは、ヘーゲル哲学をやっつけるためにベルリン大学に招聘されたが、その目的は達成できなかった。シェリングの辞職も、ドイツの政治史とかかわる志半ばでの挫折であった。なお、シェリングが退職した２年後の1848年に、ヘーゲル学派は消滅したが、当時の社会がヘーゲル左派の思想に追いついて当たり前のことになり、思想が取り立てて目立たなくなったからである。決してシェリングの活動によって消滅したのではない。

大学を出た時のポスト
教授

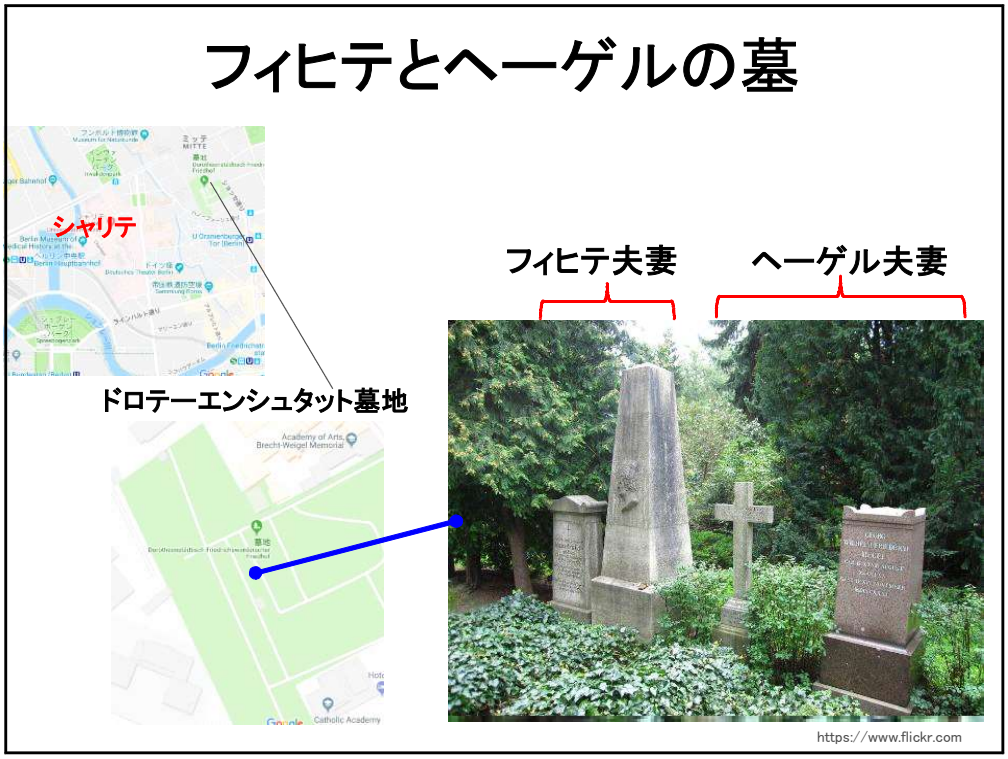
３人が病死ないし引退した時は教授の地位についていた。

大学を去った後
引退

フィヒテとヘーゲルは、在職中に急死したので、その後のポストはない。
シェリングは71歳で大学を退職したあと、バイエルン国王から社会的名誉を得た。バイエルンのマキシミリアン２世は、シェリングに対する尊敬を持ち続け、1849年には、大学を引退したシェリングに対してバイエルン大十字勲章を与え、1853年にはシェリングを貴族に列した。その後、79歳で病死したが、当時としては天寿を全うしたと言えるだろう。シェリングの死は、他の２人の働き盛りの急死に比べると、社会や歴史

と関わりの少ない個人的な死であった。
　死に方は三者三様であった。

墓地・埋葬地
フィヒテとヘーゲルは墓石が並ぶ



　フィヒテ夫妻とヘーゲル夫妻の墓は、ベルリンのドロテーエンシュタット墓地に、隣り合って立っている。ヘーゲルの強い希望により並んで立てられたという。ふたりはともにベルリン大学学長をつとめた。
　これに対し、シェリングの墓はベルリンではなくて、スイスの保養地ラガッツ温泉にある。この地でシェリングは亡くなった。ドイツ観念論哲学のビッグ３であるが、晩年のベルリン大学におけるシェリングの位置がわかる。

第７章　テュービンゲン・イェナ・ベルリン時代の比較　　生涯変わらなかった特性は何か

最後に、テュービンゲン大学時代、イェナ大学時代、ベルリン大学時代の３人の関係を比べてみよう。
３つの時代の特徴をまとめたのが、下の表７－１である。

表７－１　徹底比較　テュービンゲン・イェナ・ベルリンの時代の比較

		共通点	テュービンゲン大学時代	イェナ大学時代	ベルリン大学時代
A 就職前	前職・就職までの経歴	―	初等・中等教育	家庭教師から大学教員へ師への尊敬と取り入り【師弟関係　第１位相】	波瀾万丈の経歴で大学教授に。ベルリン大学との不思議な因縁のドラマ
	就職前の業績	―	優秀で飛び級も	業績レベルはさまざま	すでに多数の著書・論文のある著名な哲学者
B 就職時の事情	就職人事の特徴	―	入試成績はトップクラス	師弟関係を中心に展開。弟子が師のコネを利用するという打算	プロイセン政府の政治的な意図からの招聘
	前任者・空席ポストの充当人事	―	―	間接的ないし結果的に、師のポストの後任	師か弟子の死で空席となった教授ポストを埋める「人事の連鎖」
	就職時の推薦	a 強い推薦あり	推薦あり	師からの人事推薦などの便宜供与【師弟関係　第２位相】ゲーテからの推薦あり。	プロイセン王国の強い推薦による招聘
C 在任中の特徴	大学での地位	―	父からの期待によって神学部の学生に	助教授	教授として招聘され、学長や貴族など社会的名誉を得た
	在学期間	b 短期間	５年間	６～７年　短期間	４～13年
	年齢	―	15～23歳　少年期～青年期	23～37歳　血気盛んな若手	48～71歳　　中年・晩年
	在学期間の重なり	c 人事の連鎖あり	重なりあり。ここからドイツ観念論の人間ドラマが始まった	重なりがあり、ここから連鎖と因果応報のドラマが発生	重なりはないが「人事の連鎖」あり
	在学中の行動と感情の特徴	―	牧師を志し神学を猛勉強。フランス革命に感激。	師との戦いの援護で弟子を呼び、３代続くバトルロイヤルに	プロイセン王国の政治的意図の任務を実現しようと勢力的に活動
	在学中の哲学の業績	d 理論の飽くなき前進進化	神学→カント哲学→哲学を志す→フィヒテ哲学	各自オリジナルな理論を完成。ドイツ観念論哲学が成立。哲学史を変えた13年間	みずから前期思想を否定し、飽くなき進化を遂げ、「後期思想」に達す
D 師弟関係	師との関係・師への感情	e 師への強い感情	将来の師との出会い。師への尊敬と後継者アピール【師弟関係　第１位相】	師への恩を忘れ手の平返し。師へのライバル心。師への批判・攻撃・裏切り。無視と侮蔑。【師弟関係　第３位相】	師の哲学を批判し乗り超える。師を「無視」。師の死に対して無視・無反応
	弟子との関係・弟子への感情	f 弟子への強う感情	将来の弟子との出会いと指導	弟子からの屈辱。憎しみと非難。弟子を破門し絶交【師弟関係　第４位相】	弟子を破門し、理論的に反批判。弟子への失望と怒り、嫉妬（シェリングは「死んだ相手を蹴る」）
E 対人関係	対人トラブル	g トラブル続き	トラブルはなし。ヘルダリンとの友情	いくつかトラブルをかかえた	大学での学内政治のトラブル
	女性問題・家庭生活	―	淡い恋程度	恋愛がスキャンダルに発展することも	妻子と落ちついた家庭生活
F 大学を去る	大学を去るきっかけ	―	いわゆる卒業	スキャンダルを巻き起こしてイェナ大学を去る	病死ないし引退。志なかばでの挫折。無念の死
	大学を去った後	―	卒後、牧師にならず哲学者めざし家庭教師に。後にイェナ大学教官に	一時的に大学の外へ出て、ベルリン大学教授に返り咲く	引退。フィヒテとヘーゲルは墓石が並ぶ

注）表１－２、表２－２、表６－５、表７－１は形式を揃えてある。

以下、表７－１にしたがって、以下のＡ～Ｆの６つの点から、３つの時代を比較してみよう。
この表７－１も大きいので、Ａ～Ｆの６つに分けて見ていこう。
Ａ．就職前
Ｂ．就職の事情
Ｃ．在任中の特徴
Ｄ．師弟関係
Ｅ．対人関係
Ｆ．大学を去る

テュービンゲン大学時代、イェナ大学時代、ベルリン大学時代を比べると、３人の人生は多くの点で異なっている。人生の初期と中期と後期では、様相が異なっても当然である。
しかし、３つの時代を通して変わらない共通点もある。この共通点とは、すなわち彼らの人生で生涯変わらなかった特性の部分といってよいだろう。

Ａ．就職前

表７－１Ａ　徹底比較　テュービンゲン・イェナ・ベルリンの時代の比較　　Ａ．就職前

		共通点	テュービンゲン大学時代	イェナ大学時代	ベルリン大学時代
Ａ就職前	前職・就職までの経歴	－	初等・中等教育	家庭教師から大学教員へ 師への尊敬と取り入り 【師弟関係　第１位相】	波瀾万丈の経歴で大学教授に。ベルリン大学との不思議な因縁のドラマ
	就職前の業績	－	優秀で飛び級も	業績レベルはさまざま	すでに多数の著書・論文のある著名な哲学者

前職・就職までの経歴
テュービンゲン大学に入る前の２人は、初等・中等教育の学校の生徒であった。
イェナ大学に来る前の３人は、家庭教師であり、イェナ大学で初めて大学教員となった。そこには、師への尊敬と取り入り（師弟関係　第１位相）があった。
ベルリン大学に来る前の３人は、イェナ大学を出た後、波瀾万丈の人生を経て大学教授になった。そして、ベルリン大学へと異動した。３人とも、ベルリン大学との間に不思議な因縁があった。

就職前の業績
テュービンゲン大学に入る前は、成績も優秀で、シェリングは３年も飛び級するほどだった。
イェナ大学に来る前の３人は、業績レベルはさまざまであった。とくにヘーゲルは哲学の業績が何もなかった。
これに対し、ベルリン大学に来る前の３人は、すでに多数の著書・論文があり、著名な哲学者だった。

Ｂ．就職時の事情

表７－１Ｂ　徹底比較　テュービンゲン・イェナ・ベルリンの時代の比較　　Ｂ．就職時の事情

		共通点	テュービンゲン大学時代	イェナ大学時代	ベルリン大学時代
Ｂ就職時の事情	就職人事の特徴	－	入試成績はトップクラス	師弟関係を中心に展開。弟子が師のコネを利用するという打算	プロイセン政府の政治的な意図からの招聘
	前任者・空席ポストの充当人事	－	－	間接的ないし結果的に、師のポストの後任	師か弟子の死で空席となった教授ポストを埋める「人事の連鎖」
	就職時の推薦	ａ いつも推薦される	推薦あり	師からの人事推薦などの便宜供与【師弟関係　第２位相】 ゲーテからの推薦あり。	プロイセン王国の強い推薦による招聘

就職人事の特徴
テュービンゲン大学の入試の成績はトップクラスだった。

イェナ大学への就職人事は、３人とも師弟関係を中心に展開した。弟子が師のコネを利用するという打算が働いた。個人的な師弟関係から出たものであって、政治的な意図はなかった。
これに対し、３人がベルリン大学に呼ばれた理由は、国家の政治的な意図であった。

前任者・空席ポストの充当人事
イェナ大学の３人の人事は、間接的ないし結果的に、師のポストの後任となった。人事の連鎖がある。
ベルリン大学の３人の人事は、師か弟子の死で空席となった教授ポストを埋めるというものであった。ここでも人事の連鎖がある。
イェナ時代もベルリン時代も、人事の連鎖があったことは一致している。当時からこの３人はワンセット（三大哲学者）として考えられており、ポストが空席になると、この３人が後任として呼ばれたわけである。

就職時の推薦
テュービンゲン大学の入試では、２人とも推薦があった。
イェナ大学の３人の人事には、師からの推薦があった。これは、師から弟子への便宜供与の一部であった（師弟関係　第２位相）。また、ゲーテからの推薦もあった。
ベルリン大学時代の３人は、プロイセン王国の強い推薦があった。

共通点ａ　いつも他者から推薦される
３人は、いずれの時代でも、人事において、どこからか強い推薦があったことは共通する。それだけ周囲から求められる人材であったことを示している。３人とも周りが放っておかなかったのである。

Ｃ．在任中の特徴

表７－１Ｃ　徹底比較　テュービンゲン・イェナ・ベルリンの時代の比較　Ｃ．在任中の特徴

		共通点	テュービンゲン大学時代	イェナ大学時代	ベルリン大学時代
Ｃ在任中の特徴	大学での地位	－	父からの期待によって神学部の学生に	助教授	教授として招聘され、学長や貴族など社会的名誉を得た
	在学期間	b 短期間	５年間	６～７年　短期間	４～13年
	年齢	－	15～23歳　少年期～青年期	23～37歳　血気盛んな若手	48～71歳　中年・晩年
	在学期間の重なり	c 人事の連鎖あり	重なりあり。ここからドイツ観念論の人間ドラマが始まった	重なりがあり、ここから連鎖と因果応報のドラマが発生	重なりはないが「人事の連鎖」あり
	在学中の行動と感情の特徴	－	牧師を志し神学を猛勉強。フランス革命に感激。	師との戦いの援護で弟子を呼び、３代続くバトルロイヤルに	プロイセン王国の政治的意図の任務を実現しようと勢力的に活動
	在学中の哲学の業績	d 理論の飽くなき前進と進化	神学→カント哲学→哲学を志す→フィヒテ哲学	各自オリジナルな理論を完成。ドイツ観念論哲学が成立。哲学史を変えた13年間	みずから前期思想を否定し、飽くなき進化を遂げ、「後期思想」に達す

大学での地位
テュービンゲン大学時代は、大学生であり、父からの期待によって神学部に入った。
イェナ大学時代の３人は、助教授となった。
これに対し、ベルリン大学時代の３人は、教授として招聘された。そして、学長や貴族など社会的名誉を得た。

在任期間
テュービンゲン大学には、２人とも５年間在学した。
イェナ大学の在任期間は、３人は６～７年と短期間であった。
ベルリン大学時代の３人は、４～13年であり、ヘーゲルが最も長く在任し、影響力も最も大きかった。
共通点ｂ　在任は短期間
ベルリン大学時代のヘーゲルを除いて、短期間である。つまり、３人とも、ひとつの大学に長くいることがなく、短期間で大学を移動した。

年齢

テュービンゲン大学時代の２人は、15～23歳の少年期～青年期であった。

イェナ大学時代の３人は、23～37歳の血気盛んな若手であった。シェリングは23歳で助教授となっており、いかに早熟かがわかる。

ベルリン大学時代の３人は、48～71歳の中年～晩年である。シェリングは66～71歳と高齢である。

３つの時代ではこれだけ年齢が違う。行動の様相は異なるのが当然である。

在任期間の重なり

テュービンゲン大学時代の２人は、在学期間の重なりがあった。この重なりは全くの偶然であった。そして、この偶然からドイツ観念論の人間ドラマが始まった

イェナ大学時代の３人は、在任期間の重なりがある。それぞれ弟子を大学に呼んだので、重なったのである。ここから連鎖と因果応報のドラマがおこった。

これに対し、ベルリン大学時代の３人は、在任期間には時間差があり、在任期間の重なりはない。しかし、３人の人事は間接的な連鎖があった。プロイセン政府が、意図的にこの連鎖を作った。死後に空席となった教授ポストの後任人事に、フィヒテ→ヘーゲル→シェリングという順序で招聘したからである。

このように、イェナ時代もベルリン時代も、意図的な人事の連鎖があったという点では一致している。

ただし、イェナ時代は直接的な連鎖であり、ベルリン時代は間接的な連鎖であるという点で異なる。

共通点ｃ　３人の人事の連鎖あり

イェナ大学時代とベルリン大学時代では、３人の人事の連鎖があったことも一致している。当時からこの３人はワンセット（三大哲学者）として考えられていたようだ。

在任中の行動と感情の特徴

テュービンゲン大学時代は、２人とも牧師を志し神学を猛勉強した。また、フランス革命に感激し影響を受けた。

イェナ大学時代の３人は、師との戦いの援護で弟子を呼び、前述のように、３代続くバトルロイヤルになった。

一方、ベルリン大学時代の３人は、プロイセン王国の政治的意図の任務を実現しようと勢力的に活動した。

在任中の哲学の業績

テュービンゲン大学時代は、２人とも神学を勉強したが、カント哲学とフィヒテ哲学に触れて、哲学を志すようになった。

イェナ大学時代の３人は、オリジナルな哲学理論を完成し、これによりドイツ観念論哲学が成立した。哲学史を変えた13年間であった。

ベルリン大学時代の３人は、みずから前期思想を否定し、飽くなき進化を遂げ、「後期思想」に達した。

共通点ｄ　理論の飽くなき前進と絶えざる進化

テュービンゲン・イェナ・ベルリンのいずれの時代でも、３人とも、オリジナリティへの飽くなき前進があり、理論の進化がみられたことは一致している。

Ｄ．師弟関係

表７－１Ｄ　　徹底比較　テュービンゲン・イェナ・ベルリンの時代の比較　　Ｄ．師弟関係

		共通点	テュービンゲン大学時代	イェナ大学時代	ベルリン大学時代
Ｄ師弟関係	師との関係・師への感情	e 師への強い感情	将来の師との出会い。師への尊敬と後継者アピール【師弟関係　第１位相】	師への恩を忘れ手の平返し。師へのライバル心。師への批判・攻撃・裏切り。無視と侮蔑。【師弟関係　第３位相】	師の哲学を批判し乗り超える。師を「無視」。師の死に対して無視・無反応
	弟子との関係・弟子への感情	f 弟子への強う感情	将来の弟子との出会いと指導	弟子からの屈辱。憎しみと非難。弟子を破門し絶交【師弟関係　第４位相】	弟子を破門し、理論的に反批判。弟子への失望と怒り、嫉妬（シェリングは「死んだ相手を蹴る」）

師との関係・師への感情

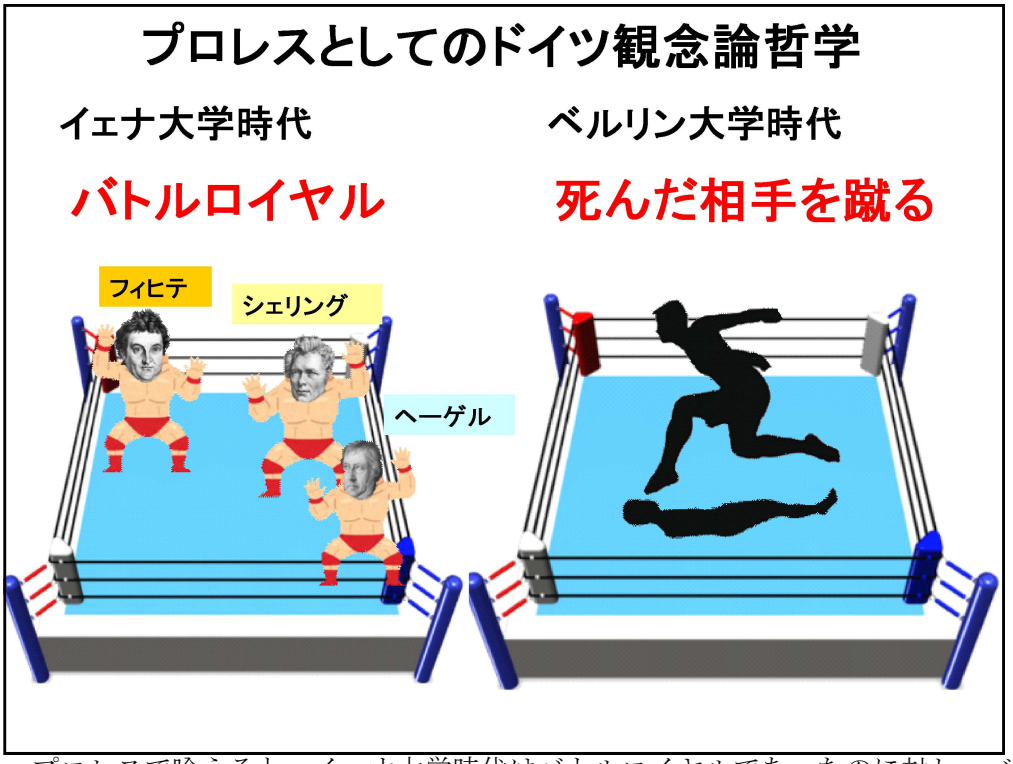
テュービンゲン大学時代は、将来の師との出会いがあり、師に対して尊敬を示し後継者アピールをした

（師弟関係　第１位相）。
　イェナ大学時代の３人は、師に対して、呼んでもらった恩を忘れ、手の平を返した。師へのライバル心があり、師を裏切り、批判・攻撃し、あるいは無視と侮蔑を加えた（師弟関係　第３位相）。
　ベルリン大学時代の３人は、師の哲学を批判して、師を無視した。師の死に対しては、無視・無反応であった。
　イェナ時代とベルリン時代では、師に対する裏切りと批判がある点では一致している。師弟間の強いネガティブな感情は一生変わらなかった。

共通点ｅ　師への強い感情
　３つの時代を通して、師への強い感情があったことは一致している。はじめは尊敬などのポジティブ感情であったが、のちに強い批判とネガティブ感情がおこった。

弟子との関係・弟子への感情
　テュービンゲン大学時代は、将来の弟子との出会いがあり、指導した。
　イェナ大学時代の３人は、「飼い犬に手を咬まれた」屈辱によって、弟子に対して、憎しみを感じ、非難し、破門し、絶交した（師弟関係　第４位相）。
　ベルリン大学に哲学教授として呼ばれた３人は、年齢的にも熟年を迎え、多くの業績をあげた大哲学者であった。しかし、弟子を破門し、理論的に反批判し、無視した。
　これが最も顕著だったのはシェリングである。すでに死んだヘーゲルに対して、反批判し（積極哲学）、自爆テロともいえるほどの破壊力をもって攻撃した。静かだが執念深い恨み感情である。

共通点ｆ　弟子への強い感情
　３つの時代を通して、弟子への強い感情があったことは一致している。はじめは指導などのポジティブ感情であったが、のちに弟子を破門し、強い批判とネガティブ感情がおこった。



　プロレスで喩えると、イェナ大学時代はバトルロイヤルであったのに対し、ベルリン大学のシェリングは、死体をののしったり、死体を殴ったりする反則行為をした。いわば「死んだ相手を蹴る」といった行為である。
　このように、イェナ時代もベルリン時代も、弟子に対する強い感情ある点では一致している。師弟間の対立感情の激しさは一生変わらなかった。シェリングの憎しみに至っては、晩年のほうがむしろ強くなっている。

Ｅ．対人関係

表７－１Ｅ　徹底比較　テュービンゲン・イェナ・ベルリンの時代の比較　　Ｅ．対人関係

	共通点	テュービンゲン	イェナ大学時代	ベルリン大学時代

			大学時代		
E 対人関係	対人トラブル	g トラブル続き	トラブルはなし。ヘルダリンとの友情	いくつかトラブルをかかえた	大学での学内政治のトラブル
	女性問題・家庭生活	―	淡い恋程度	恋愛がスキャンダルに発展することも	妻子と落ちついた家庭生活

対人トラブル

テュービンゲン大学時代の２人は対人トラブルはなかった。特筆すべきはヘルダリンとの友情である。
イェナ大学時代の３人は、いくつかトラブルをかかえた。
ベルリン大学時代の３人も、大学での学内政治のトラブルをかかえた。

共通点ｇ　対人トラブル続き

子供だったテュービンゲン大学時代はともかく、青年期以降のイェナ時代もベルリン時代も、トラブルが続いたことは一致している。トラブルを引き起こすパーソナリティであったからだろう。

女性問題・家庭生活

テュービンゲン大学時代の２人の異性関係は、せいぜい淡い恋程度であった。
イェナ大学時代の３人は、恋愛がスキャンダルに発展することもあった。
ベルリン大学時代の３人は、妻子と落ちついた家庭生活を送った。
３つの時代で大きく違っているのは、年齢の違いによるだろう。

Ｆ．大学を去る

表７－１Ｆ　徹底比較　テュービンゲン・イェナ・ベルリンの時代の比較　　Ｆ．大学を去る

		共通点	テュービンゲン大学時代	イェナ大学時代	ベルリン大学時代
F 大学を去る	大学を去るきっかけ	―	いわゆる卒業	スキャンダルを巻き起こしてイェナ大学を去る	病死ないし引退。志なかばでの挫折。無念の死
	大学を去った後	―	卒後、牧師にならず哲学者めざし家庭教師に。後にイェナ大学教官に	一時的に大学の外へ出て、ベルリン大学教授に返り咲く	引退。フィヒテとヘーゲルは墓石が並ぶ

大学を去るきっかけ

テュービンゲン大学の２人は卒業によって大学を去った。
イェナ大学時代の３人は、スキャンダルを巻き起こしてイェナ大学を去った。
ベルリン大学時代の３人は、病死ないし引退であり、志なかばでの挫折。無念の死であった。
３人の人生とも、プロイセン王国によるナポレオン軍との戦い、ドイツ統一といったドイツの歴史と深くかかわっていたという点では一致している。

大学を去った後

テュービンゲン大学の神学部を卒業した２人は、牧師にならず哲学者めざした。何年か家庭教師をした後、イェナ大学教官になった。
イェナ大学時代の３人は、いったん大学の外へ出た。その後、大学教授に返り咲き、やがてベルリン大学教授へと異動した。
ベルリン大学時代の３人は、引退した。３人とも病死した。
フィヒテとヘーゲルの墓石はベルリンで並んでいるが、シェリングだけ離れたスイスにある。

３人が生涯変わらなかった特性は何か

テュービンゲン時代、イェナ時代、ベルリン時代では、人生のライフステージが異なる。当然、いろいろなことが異なっている。
しかし、３つの時代を通して変わらない共通点もある。この共通点とは、いろいろなライフステージを通して変わらなかった特性があるということである。
以下の共通点は、生涯変わらなかった特性である。

共通点ａ　いつも他者から推薦される

３人は、いずれの時代でも、人事において、どこからか強い推薦があったことは共通する。それだけ周囲から求められる人材であったことを示している。３人とも周りが放っておかなかったのである。

共通点ｂ　在任は短期間

ベルリン大学時代のヘーゲルを除いて、短期間である。つまり、３人とも、ひとつの大学に長くいることがなく、短期間で大学を移動した。

共通点ｃ　３人の人事の連鎖あり

イェナ大学時代とベルリン大学時代では、３人の人事の連鎖があったことも一致している。当時からフィヒテ・シェリング・ヘーゲルの３人は、ワンセット（三大哲学者）として考えられていたようだ。

共通点ｄ　理論の飽くなき前進と絶えざる進化

テュービンゲン・イェナ・ベルリンのいずれの時代でも、３人とも、哲学のオリジナリティを追求しようとする飽くなき動機づけが強く、理論が絶えず進化した。この点は終生変わらなかった。

共通点ｅ　師への強い感情

３つの時代を通して、師への強い感情があったことは一致している。はじめは尊敬などのポジティブ感情であったが、のちに強い批判とネガティブ感情がおこった。

共通点ｆ　弟子への強い感情

３つの時代を通して、弟子への強い感情があったことは一致している。はじめは指導などのポジティブ感情であったが、のちに弟子を破門し、強い批判とネガティブ感情がおこった。

共通点ｇ　対人トラブル続き

子供だったテュービンゲン大学時代はともかく、青年期以降のイェナ時代もベルリン時代も、トラブルが続いたことは一致している。トラブルを引き起こすパーソナリティであった点では一致している。３人とも、学者の穏やかな人生のイメージからはほど遠い。

結び　大学がドイツ観念論哲学を育てた

ドイツ観念論哲学の世界史的意義

ドイツ観念論哲学の出現は、単なる哲学上の出来事にとどまらなかった。世界に影響を与える社会的な出来事である。ドイツ観念論哲学が出たことによって、世界はどのように変わったのだろうか。つまり、世界史的意義は何なのだろう。

①世界の人間観に与えた影響

ドイツ観念論哲学は、哲学を神学から解放し、近代の新しい主体的な世界観に哲学的表現を与えた。カントは理論理性の認識の限界を強調し、「神は存在するか」といった形而上学（神学）の問いは、答えの出ない問題であり、学問としては成立しないとした。神学を哲学から追い出し、ヨーロッパの人間中心の近代的世界観に哲学的表現を与えた。カントは、理論理性の限界を強調するが、実践理性については自由を強調し、理論理性と実践理性の間には矛盾が見られた。フィヒテ・シェリング・ヘーゲルは、カントが追放した神を「絶対者」として取り戻し、自我や絶対者を中心に据えて主体性を重視することで、実践的な世界観に哲学的表現を与えた。こうした世界観の創造ということがドイツ観念論哲学の大きな世界史的意義である。

②ドイツ社会に与えた影響

ドイツ観念論哲学は、ドイツ民族の精神性に大きな影響を与えた。当時のドイツは、フランスやイギリスより政治や社会が遅れており劣等感を持っていた。例えば、表６－２からわかるように、フランス・イタリア・イギリスの大学が12世紀に創設された（日本が平安時代だった頃）のに対し、ドイツ語圏の大学は、1347年のプラハ大学が最初であり、200年も遅れていた。しかも、フランスのナポレオン軍の侵略を受けて国の存続まで危うくされ、劣等感はなおさら強まった。その時に、ドイツ観念論哲学が出てきて、ヨーロッパの思想界を指導する立場となった。ドイツ民族は精神面での優秀性に自信を取り戻し、ドイツ再建の力を奮い起こした。これがプロイセン王国によるドイツ統一の原動力となった。

③ドイツの高等教育に与えた影響

フィヒテは講演『ドイツ国民に告ぐ』で、ドイツ民族の優秀性を伸ばす手段として、教育の改革の必要性を訴え、ベルリン大学の創設に力を尽くした。また、フィヒテ・シェリング・ヘーゲルがベルリン大学の教授として活躍したことで、ベルリン大学の名声と栄光は確立した。梅根（1973）によると、ベルリン大学が名声を博したのは、よく言われるような「フンボルトの理念」のためではなく、個々の教員が評判がよかったこと、最高政治権力の間近に位置を占めていることによるという。そして、ベルリン大学の名声によって、大学・高等教育というものがドイツ社会に初めて根づいたとされる。当時のドイツの大学は、神学が中心であり、社会の要請に答える機関ではなかった。これに対してベルリン大学は、世界最初の近代的な総合大学であり、神学中心の研究の場ではなく、社会の要請に答える指導者養成機関の役割を果たすようになった。このことが他の国々にも大きな影響を与え、世界の大学制度を変えたのである。

④哲学者と哲学システムそのものに与えた影響

そもそも哲学者が大学教員として飯を食えるようになったのはドイツ観念論哲学からである。それまでの偉大な哲学者、例えばデカルト、パスカル、スピノザ、ライプニッツ、ホッブス、ルソー、ベイコン、ロック、ヒューム、バークリーなどは、大学の教員ではなかった。多くは教会やアカデミーや図書館などで生計を立てた。それまでの哲学は神学の一部であったからである。カントによって、哲学は神学から独立し、教会関係者の手から離れた。これによって、哲学者が大学の教員として生計を立てられるようになった。

制度的に哲学が大学で教えられるようになったのは、ヘーゲル学派の成立が強い契機となった。1823年頃から、ヘーゲルを信奉する哲学者が増えて、いわゆる「ヘーゲル学派」が形成された。ヘーゲルの弟子が、ヘーゲルの著作を教科書として、教科書通りにヘーゲル哲学を講義するようになった。ドイツの各大学では、ヘーゲル哲学が講義されるようになった。いわゆる「講壇哲学」の成立である。これがドイツから世界各地の大学に広がった。

ドイツ観念論哲学以降、「哲学」という学問は、大学という場と切り離せなくなった。善し悪しは別として、「哲学」は人間の実際の人生とは直接の関係がなくなり、大学において大学人により研究され講義される専門科目となった。大学以外の在野の哲学は、大学では無視される。哲学者になるためには、大学教員のポストを獲得しなくてはならなくなった。大学がなければ、哲学も成立しなくなった。

以上のように、ドイツ観念論哲学は、高等教育や大学のあり方と切っても切れない関係にある。

大学がドイツ観念論哲学を育てた

本稿において、ドイツ観念論哲学を見る見方として、「大学論」という視点を提案した。ドイツ観念論哲学は、大学というシステムと深く結びついている。ドイツ観念論哲学は、イェナ大学という文化装置があったからこそ生まれた思想である。

①３人は大学という舞台で出会った。彼らは、テュービンゲン大学の神学部で学生として出会い、後にイェナ大学で教員として出会った。

②３人はイェナ大学に就職し、初めて家庭教師から足を洗うことができ、哲学で飯を食えるようになった。

哲学者が、大学という研究教育機関で生計を立てられるようになった。だからこそ、３人は教員のポストに就職するために、師にゴマをすって取り入ったのである。
③３人が同じイェナ大学に在席し、師弟関係を結び、ケンカすることで、みずからの哲学の本質を究めていき、それぞれオリジナルな哲学を打ち立てた。イェナ大学では攻撃感情むき出しの人間臭いバトルが繰り広げられた。もし、３人が同じ大学に勤めなかったら、ドイツ観念論哲学はこれほど深まらなかっただろう。大学というところは、「象牙の塔」と言われ、俗世間を離れて非感情的・非人間的な静寂の境地のように見られがちである。大学人というパーソナリティは、浮世離れした世捨て人、オタク、社会に無関心でタコツボに閉じこもるといったイメージがある。しかし、３人とも、学者の穏やかな人生のイメージからはほど遠い。
④３人とも、大学人として生涯を終えた。いろいろな大学を渡り歩き、最後には、同じくベルリン大学教授として名声を博した。３人の名声がベルリン大学の栄光を確立し、大学・高等教育というものをドイツ社会に初めて根づかせた。
⑤前述のように、そもそも哲学者が「大学」で教えるようになったのはドイツ観念論哲学からである。もし大学という場がなかったら、ドイツ観念論哲学は生まれなかっただろう。容器としての「大学」がドイツ観念論哲学を育てたとも言える。「大学が哲学を育てる」ということの例として、ミュンヘン時代のシェリングをあげることができる。それまで哲学の第一線にいたシェリングは、1806年に大学を離れて、文化行政に携わるようになった。すると、哲学の第一線から遠ざかり、著書や論文を全く発表しなくなる「沈黙の時代」に入ってしまう。1820年に大学に復帰してはじめて哲学への情熱が戻ってくる。
　以上のようなことは、大学論という視点から見えてくることであり、哲学史では関心が向けられないことである。

終わりに

　はじめに述べたように、第２～４部を仕上げたのに私の中には不全感が残った。こんなに面白い哲学史上の人間ドラマに出会ったのに、どうも最も肝心のことが描けていない。３人のドラマの本質をつかめていなかったからだ。ドラマの本質は何なのか、それを突き止めたい。心理学者としての野心が私の中にムクムクと沸いてきた。
　３人の人間関係を描くといっても、そもそも「関係を描く」という仕事は難しいものであった。３人の人間関係を描くためには、３人それぞれの人生と哲学理論を個別に見たうえで、３人の個々の関係をメタレベルから分析し、最後に、それらを総合的に俯瞰するというプロセスが必要である。
　第２～４部を第１次レベルの情報とすると、本稿の編年体の部分（１－３、２－３、６－３）は、そこから３人の人間関係を抽出した第２次レベル情報となる。
　また、本稿の徹底比較の部分（表１－２、表２－２、表６－５）は、第２次レベル情報から、３人の共通点を抽出した第３次レベル情報となる。
　また、第３～５章は、第２次レベル情報から、３人の師弟関係を抽出した第３次レベル情報となる。
　さらに、第７章（表７－１）は、第３次レベル情報から、３人の生涯を通した共通点を抽出した第４次レベル情報となる。
　このように、第１次レベル情報から、２段も３段も高次のメタレベルへと情報を抽出していく作業を続ける必要があった。建物全体を頭に描きながら、ひとつひとつのレンガを焼いて積み上げるような緻密な作業であり、なかなか集中と辛抱を要する作業となった。ずいぶん時間もかかった。
　そうしてできあがったのが本稿である。分量もいつのまにか増えて、５部の中で最も長くなった。第１部～第４部と全く同じネタを使っているわけであり、新しいネタを仕入れたわけではない。ただ同じネタの抽象レベルを上げてまとめる作業をしただけである。なのに分量は増えた。当然のことながら、第１～４部と重複する文章も多くなり、また、本稿第５部内でも同じ文章が繰り返し出てくる悪文になってしまった。本来ならもっとスリムにすべきなのだろうが、私の辛抱も限界に近づいたので、あきらめて悪文のまま発表することにした。

　３人のドラマの本質は何かという問いを突きつめ、長い作業の果てに辿り着いた結論が、①打算と裏切りの師弟関係（第３章）、②３代続く悪の連鎖（第４章）であったが、しかしまだどこか物足りない。そして、③プロレスのバトルロイヤルの乱闘（第５章）という概念に行き着いた。このバトルロイヤルという概念こそ、３人の関係の本質を最もぴったりあらわしていると感じられたのである。だから、少し品がないとは思ったが、「プロレスとしてのドイツ観念論哲学」というタイトルにした。苦労した分、これまでにない新しいドイツ観念論哲学のイメージを提供するオリジナルな読み物になったのではないかと自負している。

　私のライフワークである大学論は、「学者としての人生」ということをテーマとしている。本稿で学者の人間関係を冷静に見られるようになったのも、大学の研究生活の第一線から離れて、学者生活を冷静に眺められる時間的・心理的余裕ができたおかげである。現役時代は、学者の師弟関係などというテーマはとても冷静には見られない。また、本稿は何よりcovid-19問題で長期間自宅に籠もらなければならなくなったおかげの副産物でもある。本稿を書いているうちに、心理学者としての野心ともに、作家としての野心まで目覚めたような気がするのは、コロナ禍の不幸中の幸いかもしれない。

＜引用文献＞　　アルファベット順

バウムガルトナー（北村実監訳）『シェリング哲学入門』 早稲田大学出版部、1997.
フィッシャー（玉井茂・磯江景孜訳）『ヘーゲルの生涯：著作と学説第１巻　ヘーゲルの生涯』勁草書房、1971.（原書は1901年刊）
藤田健治『シェリング　思想学説全書11』、勁草書房、1962.
ハルトマン（村岡ほか訳）『ドイツ観念論の哲学　第１部　フィヒテ、シェリング、ロマン主義』作品社 、2004. Die Philosophie des deutschen Idealismus
服部英次郎・井上庄七「解説」　シェリング『ブルーノ』岩波文庫、1955.
岩崎武雄「ヘーゲルの生涯と思想」　『世界の名著 35 ヘーゲル』中央公論社、1967.
岩崎武雄「フィヒテとシェリングの生涯と思想」　『世界の名著 続９ フィヒテ シェリング』中央公論社, 1974.
樺山紘一『都市と大学の世界史』日本放送出版協会、1998.
クレッチュマー（内村祐之訳）『天才の心理学』岩波文庫、1982.
マックス・ウェーバー（尾高邦雄訳）『職業としての学問』岩波文庫、1980.
マックス・ウェーバー（野口雅弘訳）『仕事としての学問 仕事としての政治』講談社学術文庫、2018.
マックス・ウェーバー（三浦 展訳）『新装版[現代訳]職業としての学問』プレジデント社、2017.
澤田章『ヘーゲル 人と思想』清水書院CenturyBooks、2015.
丹野義彦『ロンドンこころの臨床ツアー』星和書店 2008
丹野義彦『イギリスこころの臨床ツアー 大学と精神医学・心理学臨床施設を歩く』星和書店 2012
丹野義彦『アメリカこころの臨床ツアー アメリカ:精神医学・心理学臨床施設の紹介』星和書店 2010
丹野義彦『イタリア・アカデミックな歩きかた』有斐閣、2015年
梅根悟「シュライエルマッヘルとその「大学論」、及び「教育学講義序説」について」『世界教育学選集17 国家権力と教育：大学論・教育学講義序説』明治図書、1961に収録.
潮木守一『ドイツの大学　文化史的考察』講談社学術文庫、1992.

＊第１部（ベルリン大学創立の謎）、第２部（フィヒテ）、第３部（シェリング）、第４部（ヘーゲル）の文献については、各部を参照。

丹野義彦：東京大学名誉教授　（元東京大学 教養学部 心理・教育学部会教授）

●元のページに戻る
http://tannoy.sakura.ne.jp/